

平成二十三年度 名古屋大学大学院文学研究科
学位（課程博士）申請論文

現代日本語助詞「は」と「が」の選択に関する研究
— 名詞句指示の様相と名詞句の性質からの一考察 —

名古屋大学大学院文学研究科
人文学専攻 日本語学専門

長澤理恵

平成二十四年 三月

目次

目次

序論	…… 5
1. 本研究の課題	…… 5
2. 本論の構成	…… 7
本論	…… 9
第1章 「{この/その}N{は/が}述語」文における「は/が」の選択要因 —名詞句の定・不定と述部の性質からの考察—	…… 9
0. はじめに	…… 9
1. 「は」と「が」についての先行研究	…… 9
1.1 丹羽説	…… 10
1.1.1 名詞句の規定と分類	…… 10
1.1.2 主語「が」と題目語「は」についての捉え	…… 11
1.2 庵説	…… 14
1.2.1 定情報名詞句のマーカ―「この/その」と「は/が」の相関関係	…… 14
1.2.2 定情報名詞句とは	…… 15
1.2.3 調査とその結果	…… 16
1.2.4 「この」と「その」の機能	…… 16
1.2.5 「このーは」型と「そのーが」型	…… 19
1.2.6 その他の場合	…… 21
2. 庵(1997)の問題点	…… 23
2.1 定情報名詞句のマーカ―「この/その」の定義について	…… 23
2.2 逆接・対比、新情報・旧情報の扱いについて	…… 24
3. 庵説、丹羽説から — 庵説修正へ —	…… 26
3.1 「新情報」「旧情報」の扱いについて	…… 26

3.2	「この一」「その一」の扱いについて	…… 27
3.3	「NはP」と「NがP」の扱いについて	…… 27
3.3.1	「NはP」（題目説明関係）について	…… 27
3.3.2	「NがP」（主語述語関係）について	…… 28
3.4	丹羽説における「この/その」と「は/が」の結びつきの捉え	…… 29
4.	名詞句・述部の性質と「は/が」	…… 30
4.1	名詞句や述部の性質による「は」と「が」の使い分け	…… 30
4.1.1	丹羽（2004a）の名詞句の捉え— 一定名詞句・不定名詞句—	…… 30
4.1.2	用例の考察 — 「このN {は/が} P」の「{この/その} N」部分について—	…… 31
4.1.3	用例の考察— 「N {は/が} P」のP部分について—	…… 35
4.2	どのような場合に「が」が出現するか	…… 38
4.2.1	〈前提—焦点〉構造と〈全体焦点〉構造という観点からの考察	…… 38
4.2.2	先行詞Nを含む先行文脈と「{この/その} N {は/が} P」の 関係からの考察	…… 39
4.3	丹羽説についての修正	…… 44
5.	結論	…… 45
6.	おわりに	…… 46
第2章 指示詞「この/その」指定指示文における「は/が」の出現傾向		…… 49
0.	はじめに	…… 49
1.	用例調査とその結果	…… 50
1.1	指示詞「この/その」と「は/が」の出現傾向	…… 50
1.2	「そのNが」型の有標性	…… 51
1.3	指示詞省略の可否と「は/が」の出現傾向	…… 52
2.	先行名詞句と名詞句Nの意味属性関係	…… 53
2.1	〔指示詞省略○〕における名詞句の性質	…… 54
2.2	〔指示詞省略×〕における名詞句の性質	…… 55
3.	先行名詞句と名詞句Nに出現する名詞句の性質	…… 58
3.1	指示詞「この/その」	…… 58

3.2	〔指示詞省略×〕についての考察	…… 59
3.2.1	「名詞句 N のみ固有名詞」の用例群	…… 59
3.2.2	「先行名詞句・名詞句 N とともに固有名詞」の用例群	…… 60
3.2.3	「先行名詞句のみ固有名詞」の用例群	…… 63
3.3	〔指示詞省略×〕全用例におけるその他の傾向	…… 65
4.	おわりに	…… 65
第3章	指示詞「この / その」代行指示文における「は / が」の出現傾向	…… 68
0.	はじめに	…… 68
1.	用例の検索	…… 68
2.	用例の考察	…… 69
3.	指定指示用法の用例	…… 72
3.1	名詞句の性質と「は / が」出現傾向についての考察	…… 73
4.	代行指示用法の用例	…… 74
4.1	「この N { は / が }」型類型	…… 75
4.2	「その N { は / が }」型類型	…… 77
4.2.1	「その N が」型類型	…… 77
4.2.2	「その N は」型類型	…… 78
4.3	代行指示用法における定型類型	…… 79
4.4	「その N が」型類型の特殊性	…… 80
4.5	先行名詞句と名詞句 N についての考察	…… 81
6.	おわりに	…… 84
第4章	抽象的意味を表す名詞句と指示詞「この / その」との相関関係	
	— 「{ この / その } システム」文からの考察—	…… 86
0.	はじめに	…… 86
1.	用例の検索	…… 88
2.	用例の考察	…… 88
2.1	【そのシステム】型用例	…… 88
2.1.1	「そのシステム」型用例における名詞句指示の様相	…… 90

2.2	【このシステム】型用例	90
2.2.1	先行名詞句に名詞「システム」が含まれない場合	91
2.2.2	先行名詞句に名詞「システム」が含まれる場合	92
2.2.3	「このシステム」型用例における名詞句指示の様相	97
3.	おわりに	98
第5章	「{この/その}N{は/が}述語」文における「は/が」の選択要因 —抽象的意味を表す名詞「システム」と固有名詞からの考察—	100
0.	はじめに	100
1.	抽象的な意味を表す名詞「システム」を含む用例の考察	100
1.1	用例考察	101
1.1.1	「このシステム{は/が}」型	102
1.1.2	「そのシステム{は/が}」型	104
2.	まとめ・抽象的な意味を表す名詞「システム」を含む用例の場合	105
3.	固有名詞を含む用例の考察	106
3.1	名詞句Nのみ固有名詞	106
3.2	先行名詞句・名詞句Nともに固有名詞	107
3.2.1	「このNは」型	107
3.2.2	「そのN{は/が}」型	109
3.3	先行名詞句のみ固有名詞	111
4.	まとめ・固有名詞を含む用例の場合	112
5.	おわりに	113
結 論		116
1.	本論のまとめ	116
2.	おわりに —本論の課題と今後の研究方針—	118

序 論

1. 本研究の課題

本研究は、「{この/その}N{は/が}述語」文における名詞句¹指示の様相と名詞句の性質に注目し、「は」と「が」の選択要因について追究しようとするものである。

「は」と「が」の問題について、三上章(1963)『日本語の論理』中では「ハとガの問題の考察が十分でないことはたしかだから、研究者の努力が望まれる。三尾砂氏は、この問題は日本文法のアルファでありオメガであるとまで言っている。どのような構造の文に『は』が表れるか、『が』は『は』とまったく同じ構造の文にしか表れないか等について、清新な研究が望まれる」(p. 200)と述べられており、まさしく「は」「が」の問題は日本語の助詞の中でも複雑なものであるといえるだろう。また、「は」と「が」の問題に関わって、西山佑司(2003)では「この概念²を自然言語の意味論の中に新しく導入することによってこそ、日本語学の中心的課題のひとつである『は』と『が』の問題ばかりでなく、コピュラ文の意味と構造にたいしても、さらには、一見コピュラ文とは関係ないように思われる変化文(「Aが変わる」)や存在文(「Aがいる/ある」)の意味と構造にたいしても、新しい光を投げかけることができると考えている」と述べられ、さらに「今日の国語学・日本語研究において文の意味や情報を分析する際に」、「『指示的名詞句』『非指示的名詞句』『変項名詞句』『飽和名詞句』『非飽和名詞句』といった概念は通常の国語学・日本語研究ではほとんど注意を払われることがなかったものばかりである」とも指摘する。現代日本語「は/が」の諸問題についてはこれまでも多くの研究蓄積があるが、西山佑司(2003)などで指摘されているように、従来の研究では「名詞句」の意味機能から「は/が」の問題についてアプローチしたものはあまりみられず、「名詞句」に着目することで「は」と「が」についてこれまで見えていなかった部分が新たに明らかになるということも十分に考えられる。それはまさに「は」と「が」の選択要因について「名詞句」の性質から迫ろうとする本研究をすることの意味にもつながると考える。

またこの「名詞句」をめぐる問題の中でも大きな問題として、「名詞句」をどのように捉えるかということがいま議論されている最中である。

¹ 本稿では庵功雄(1997)に倣い、名詞句は「定一不定」「固有一普通などの区別によらず、全て『名詞句』」と捉える。

² 非指示的名詞句のひとつのタイプである「変項名詞句」という概念。

「AはBだ」という構文のAとBの関係については、伝統的に「包摂関係（もしくは要素と集合）と捉えるか、同一（指示）関係と捉えるかで曖昧とされてきた」という。この考え方に対して西山佑司（2005）では、この2タイプに「二分できるほど単純ではな」く、また、このタイプに限定したとしても、これらでコピュラ文の意味構造を分析することは出来ず、名詞句のA・Bの指示性に着目するべきであるとしている。

これに対して丹羽哲也（2004）では、「コピュラ文あるいは一般に主題文の名詞句の問題は、定・不定のような指示の仕方の問題として理解すべきであり、指示・不指示という形で理解すべきではない」とする。そして、西山（2003）が非指示的とする名詞句（叙述名詞句や変項名詞句）は集合を指示する「指示的名詞句」と考えるべきであり、西山の主張する非指示的名詞句は不要であるという論を展開している。

このようにコピュラ文「AはBだ」における名詞句ひとつとっても、A・Bが指示的名詞句であるか、非指示的名詞句であるかについてはいまだ問題になっており、決着はついていない。また、A・Bが指示的であるか非指示的であるかということについては、主に「AはBだ」というコピュラ文を取り上げてなされており、「AがBだ」というコピュラ文についてはあまり取り上げられていない。

以上のような点からも、「名詞句」の性質に目を向け、「は」と「が」の問題について考えていくことは、今後の「は / が」の研究を進めていく上でも重要になってくると考える。

また、筆者が本研究を進めるきっかけとなった庵功雄（1997）は、指示詞「この / その」との関わりから「は」と「が」の選択要因について迫ったもので、「連文における『は』と『が』の選択という問題を定情報名詞句のマーカ³の選択要因」との関わりから論じ、「この」は「は」と、「その」は「が」と結びつきやすいということを明らかにした。庵（1997）ではテキストの結束性の分析を主たる目的とし、「{この / その}A{は / が}Bだ」という文の場合の「この / その」の持つ性質と、「は：旧情報」「が：新情報」との関係を中心に選択要因をみており、本稿で意識的に注目をしている名詞句の性質について特に考慮した研究ではない。しかし、「{この / その}A{は / が}Bだ」という文型において「この / その」という指示詞のもつ性質と「は：旧情報」「が：新情報」との関係を中心に見ることで、指示詞による情報の提示と「は / が」の選択要因を関連付けて論じた点で、本研究における問題意識に大きな示唆を与えたものであり、その点で評価さ

³ 「定情報名詞句のマーカ」とは指示詞「この / その」のこと。

れるものである。しかしながら、指示詞が絡まないような、他のさまざまな「AがBだ」文を考えていくにあたっては、指示詞の有無を超えて「は / が」の選択要因を考えていくにあたっては、庵のように指示詞「この / その」だけに着目して「は / が」との結びつきやすさを見るのではなく、「{この / その} + A/B」をひと括りに名詞句として捉え、「は」と「が」の選択要因を考えることで、「AはBだ」という文を広く捉えることになり、他へ拡がりをもつと考える。また庵が「は：旧情報」「が：新情報」を無批判に用いているという点は、「新情報 / 旧情報」という概念自体が有効であるのかという疑問がこれまでも出されているということからも問題であると考えられる。

本研究において、庵(1997)では特に指摘されておらず注目もされていなかった「名詞句」の性質に着目し、庵(1997)を捉えなおすことができることを示すことができたということは、今まさに議論となっている名詞句の性質が、「は」と「が」の問題にも関係してくるということを表すことにもなった。よって、庵(1997)によって取り上げられた「{この / その} N {は / が} 述語」文を名詞句の問題から捉えなおし、それを足がかりに「は」と「が」の選択要因を考えていく本研究は、他の「N {は / が} 述語」文、ひいては名詞句の研究に拡がりを持つものであり、意義を持つものであると考える。

2. 本論の構成

本論は以下のように議論を進める。

第1章では、まず本研究の議論の前提となる先行研究について概観する。それらを踏まえ、たうえで、「{この / その} N {は / が} 述語」文における名詞句の定・不定、述部の性質を考察し、それらと「は / が」との相関関係を分析する。

第2章では、「{この / その} N {は / が} 述語」文における指示詞「この / その」の指定指示文を主に考察対象とする。名詞句の性質や意味属性関係に注目し、「先行名詞句」と「名詞句 N」の関係から、指示詞「この / その」と「は / が」の相関関係について考察する。

第3章では、第2章と同様に名詞句指示の様相に着目し、「{この / その} N {は / が} 述語」文における指示詞「この / その」の代行指示文を考察対象とする。指示詞「この / その」による名詞句指示の様相と、名詞句の性質・意味属性関係を考察し、「は / が」の出現傾向を捉えることを目的とする。

第4章では、ここまでの議論を踏まえ、「{この/その}N{は/が}述語」文における指示詞「この/その」と「は/が」選択の場面では名詞句の性質が大きな条件となることから、分類学的な階層関係において複数の下位語を含むような名詞「システム」句に着目し、名詞句の振る舞いと指示詞「この/その」との相関関係について考察する。

第5章では、第4章において確認した内容を踏まえ、さらに固有名詞の振る舞いにも着目する。抽象的な意味をあらわす名詞「システム」と固有名詞、それぞれの出現する「{この/その}N{は/が}述語」文中の「は/が」選択の様相について整理し、考察する。

最後に、本研究における成果と課題についてまとめて結論とする。

引用文献

- ・庵功雄（1997）『『は』と『が』の選択に関わる一要因一定情報名詞句のマーカ―の選択要因との相関からの考察一』（『国語学』188集）
- ・西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論』（ひつじ書房）
- ・西山佑司（2005）「コピュラ文の分析に集合概念は有効であるか」（『日本語文法』5巻2号）
- ・丹羽哲也（2004）「コピュラ文の分類と名詞句の性格」（『日本語文法』4巻2号）
- ・三上章（1963）『日本語の論理 ーハとガー』（くろしお出版）

第1章

「{この/その}N{は/が}述語」文における「は/が」の選択要因

—名詞句の定・不定と述部の性質からの考察—

0. はじめに

本章では、「{この/その}N{は/が}述語」文における名詞句の性質と、述部の性質を考察し、それらと「は/が」との相関関係を分析することを目的とする。

まず、考察の前提として、本論における議論の前提となる先行研究を概観する。先行研究の中でも、「は/が」選択の問題について「この/その」の選択の原理を絡めて論じた庵功雄（1997）について特に注目する。さらに、丹羽哲也（2004a. c）を取り入れることによって庵（1997）はよりよく修正できるという考えのもと、新たな視点から「は」と「が」の選択要因について示す。

1. 「は」と「が」についての先行研究

「は」と「が」についてはこれまでも多くの研究の積み重ねがある。以下において、野田尚史（1996）を参考に「は」と「が」の使い分けの原理について確認しておこう。

- 1) 新情報と旧情報の原理— 新情報には「が」、旧情報には「は」
…何を主題にするかの原理
- 2) 現象文と判断文の原理— 現象文には「が」、判断文には「は」
…主題をもつかどうかの原理
- 3) 文と節の原理— 文末までかかるときは「は」、節の中は「が」
…主題をもてるかどうかの原理
- 4) 対比と排他の原理— 対比のときは「は」、排他のときは「が」
…どう取り立てるかの原理
- 5) 措定と指定の原理— 措定には「は」、指定には「が」
…主題を明示するかどうかの原理

上記のように「は / が」の使い分けについて5つの原理が示され、各原理に関して詳しく示されている点はよいだろう。しかしながら、「は / が」の使い分けがこれら5つの原理ですべて説明できるということは必ずしもいえず、区分が詳細であるがゆえに「は / が」の使い分けに関する全体像が掴みにくくなっている面がある。また、先に述べたように「新情報」「旧情報」という規定自体の有効性に疑問が呈されている¹ ことなどからも、従来の「は / が」に対する捉え方とは異なるアプローチが必要であるといえるだろう。そこで、現在研究が進みつつある「名詞句」の意味機能から「は」と「が」の選択要因について迫るという方法を取り入れることで、「は」と「が」の使い分けにおいて有効な、新たな見解を示す事ができるのではないかと考える。そこで、まずは名詞句の意味機能に注目して「は」と「が」について捉えている丹羽(2004a. c)を確認しておこう。

1.1 丹羽説

1.1.1 名詞句の規定と分類

丹羽(2004a)では、名詞句を大きく「定名詞句(同定可能な名詞句)」と「不定名詞句(同定不可能な名詞句)」に分けている²。以下、定名詞句と不定名詞句の規定・分類についてまとめたものを示す。

a 定名詞句(同定可能な名詞句): 指示する対象の範囲が定まっている名詞句であり、次のいずれかの名詞句からなる。

(ア) ある特定の個体を指示する名詞句(特定個体)

「この子」「私」「地球」といった単一個体を指示する指示名詞句や固有名詞句。

(イ) ある集合の全体を指示する名詞句(集合全体)

「人」「この店の豆腐」「そこに集まっている人たち」という集合全体を指示するもの。

(ウ) ある集合の特定の部分を指示する名詞句(特定部分)

普通名詞句の「代名詞的用法」³ と呼ばれる名詞句を中心とするもの。

¹ 「新情報 / 旧情報」については、2.2 において詳しく述べる。

² この名詞句の分類は、堀口和吉(1995)に拠っており、その内容はほぼ同じであるが、それぞれにあてている名称は変えている。

³ 金水(1996)

「社長が挨拶を申しあげます」の「社長」や、「今回の飛行機事故について、原因を究明するために調査団が派遣された」の「原因」などのような名詞句。

b 不定名詞句（同定不可能な名詞句）：指示する対象の範囲が定まっていない名詞句であり、次のいずれかの名詞句である。

(エ) 任意の個体、または、要素の定まらない集合を指示する名詞句〈任意個体・集合〉

「どんな人」のような不定語を含む名詞句、「ある～」「数量詞～」という名詞句。

(オ) ある集合の任意の部分を示す名詞句〈任意部分〉

「この店の豆腐を食べたい」という時の「この店の豆腐」のように、「集合の一部を示すが、どの部分であるかということは特定化されていない」名詞句。

本稿では、以上の丹羽（2004a）による名詞句の捉えに則り、庵（1997）の「{この / その}N」について見直していく。

1.1.2 主語「が」と題目語「は」についての捉え

ここでは丹羽（2004c）による「は / が」の捉え方について確認しておこう。

I) 「Nは」について

丹羽（2004c）では、「は」を含む文について便宜的に「NはP」と示すと、「は」の働きはNを題目として提示し、NについてPと説明する構造（題目説明構造）を形成することにあると述べ、Nという固定部分にPという可変部分を割り当てる関係にあるとする⁴。たとえば、以下のような例文の場合、「『山田さん』のことを問題にしていることは動かないが、『山田さん』の何を問題にし、それにどう答えるかは可能性としていろいろあり得る」という。

⁴ 「Nは」は「題目語」、「は」によって提示されるNは「題目」である。「主題」という言葉も「題目（語）」と同様の意味である。（丹羽（2004c））

山田さんは中国にいきました。

山田さんはどうしていますか。

また、「固定と可変という関係は、情報構造上の対立として、『前提』と『焦点』という名で呼ばれる」としている。「前提焦点構造」というのは、「山田さんは中国へ行きました」という文でいえば、「山田さんはX」が前提命題、「X＝中国に行った」が焦点命題となる構造で、この前提と焦点という関係はあくまで「Nは」にPが割り当てられる関係を捉えており、Nという名詞部分そのもの、Pという述語部分そのものにおける情報としての新旧を問題にしているのではないという。また、丹羽は「N」そのものの部分が「旧情報」か「新情報」かということでは、「は」と「が」の対立を説明できないと述べる。

Ⅱ) 「Nが」について

「Nが」の場合には、以下の2つの場合があるとする。

- ・ (誰が中国に行ったのかが問題になっていて) 山田さんが中国に行ったんだ。
 - Pが前提部分であり、そのPにあてはまる「山田さん」が焦点部分を構成する。
 - 〈焦点—前提〉という構造
- ・ (何かニュースがあるかという文脈で) 山田さんが中国に行ったんだ。
 - 「Nが」と「P」との間に情報構造上の落差⁵がなく、全体が可変部分となっている。(固定部分がない)
 - 〈全体焦点〉という構造

Ⅲ) I・IIから

以上より、「は」は〈前提—焦点〉という構造に固定しており、一方で「が」が用いられる場合は情報構造において固定していないという。よって、「は」が用いられる場合以外の情報構造、つまり〈全体焦点〉と〈焦点—前提〉の構造は「が」が担うことになる。また〈前提—焦点〉の場合であっても「が」が用いられ、係助詞の「は」は主文で

⁵ 「情報構造上の落差」の「落差」について、丹羽は特に詳しく述べてはいない。「意外性」のようなものだろうか。

用いられるのが原則で、独立性の低い従属節には用いられないという制約があることから、そのような従属節では「が」が専ら用いられると指摘している⁶。

IV) 述語の種類と「は」「が」

I～IIIで確認したとおり、丹羽(2004c)では「N{は/が}P」文には次の三種類があると
する。

(ア) 「NはP」〈前提—焦点〉構造

(イ) 「NがP」〈全体焦点〉構造

(ウ) 「NがP」〈焦点—前提〉構造

そして、上記の情報構造には「一時性の述語」と「恒常性の述語」という述語の性質が
関わっているという。一時性述語とは、「箱が棚から落ちたこと」「あそこに犬がいるこ
と」「空が真っ赤なこと」の「落ちる」「いる」「真っ赤だ」などの「動き(動作・変
化)や状態(存在も含む)」ものであり⁷、恒常性述語とは、「地球が丸いこと」「太郎
が学生であること」の「丸い」「学生である」などの「性質や所属を表す」ものであると
されている⁸。以上のような規定を踏まえた上で、丹羽は文の種類を次のように分ける。

一時性の述語：〈前提—焦点〉〈全体焦点〉〈焦点—前提〉すべてOK

太郎は中国へ留学した。(ア) / 太郎が中国へ留学した。(イ)(ウ)

恒常性の述語：〈前提—焦点〉〈全体焦点〉のみOK

太郎は未成年だ。(ア) / 太郎が未成年だ。(ウ)

また〈焦点—前提〉構造、〈前提—焦点〉構造、〈全体構造〉について、〈焦点—前
提〉はPが既出かそれに相当する文脈が必要な有標の構文であり、〈前提—焦点〉〈全体
焦点〉は特に先行文脈がなくて単独で用いられ得る無標の構文であると規定する。さらに、
一時性述語の文はある時点において新たにNとPが結びついた(N—Pという事態が新た

⁶ ただし、庵(1997)では従属節にくる「は/が」については考察の対象外としている。本
研究においても、このような「が」については詳しく取り上げない。今後、これらも含め
た「は」と「が」の選択要因についての研究をする必要があると考える。

⁷ PはNにとって非内在的な属性である。

⁸ PはNにあらかじめ内在している属性、あるいはNとPの外延が一致する場合もある。

に発生した) という関係を表すものであると指摘している。また、恒常性述語の文の場合、PはNにあらかじめ内在している属性で、Nのある属性Pを述べるということは、NにPという面があることを話し手が新たに認識したり、聞き手に認識させたりすることによって、それはNの説明することに他ならないとしている。

V) 題目語と主語の類似

以上のように、「NはPだ」文・「NがPだ」文についてみているが、丹羽(2004c)では「題目説明関係」の「NはPだ」文と、「主語述語関係」の「NがPだ」文とはよく似た関係であると述べられている。それは、「NについてPで説明するということは、基本的には、Nの属性を説明するという他にないからで」、「主述関係」は「主体と属性の関係そのものを表し」、「題目説明関係」も「主体と属性の関係を説明という形で表す」からだとしている。また、「Nが先に提示されてPがそれについての説明と解釈できれば、題目を提示していると言える」とも述べられており、「題目説明関係」は「かなり柔軟な面がある」とする。つまり、「は」以外にも「なら、ったら、って」なども題目を表す形式であり、「統語構造として確立した題目語という意味で、『統語的題目語』と呼ぶことができる」としている。また題目については以下のように指摘している。

- ・主語を表す形式が「が」のみであるのに対し、題目語を表す形式が「は」以外に種々あるというのは、何をどのような形で説明するかという関係のあり方の多様性を示している。
- ・統語的主語「Nが」と統語的題目語「Nは」などとは、文中の同じ位置に生じることが多く、情報構造上の対立が生じている。

では、以上を踏まえた上で、庵(1997)について確認しよう。

1.2 庵説

1.2.1 定情報名詞句のマーカ「この / その」と「は / が」の相関関係

庵(1997)は、「『は』と『が』の相違に関しては多くの論考がある」とし、その中でも野田(1985)の次の記述にまず注目している。

(I) ・主語が前に出てきた名詞と同じ名詞であり、その名詞について何かを伝えたいときは、主語に「は」を付ける。

(例) 日本で一番大きな湖は琵琶湖です。琵琶湖は / #⁹ が京都府の東の滋賀県にあります。

・主語が前に出てきた名詞を指す名詞「彼」「彼女」「これ」「それ」「この～」「その～」などであり、その名詞について何かを伝えたいときは、主語に「は」を付ける。

(例) 昔々あるところにおじいさんがいました。ある日、このおじいさんは / # が山へ芝刈りに行きました。

(I) について、庵は次のように「反例」が存在するとしている。

(1) 健は病気知らずが自慢の男だった。その健が / ?? はガンであっけなく逝ってしまった。

(2) 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。その順子が / # は今は他の男の子供を二人も産んでいる。

(3) もう一席の『かわり目』はお酒の話だ。小米朝落語という、昨年演じた『たちぎれ線香』のように若旦那が活躍するネタが得意だというイメージがある。その彼が (/ # は)、酔っぱらいのおっさんが主役のこのネタを演じる。

(『第2回桂小米朝独演会パンフレット』)

以上の反例から、庵は「(I) の一般化には修正が必要である」とし、この点を「定情報名詞句のマーカースの選択の原理」から論じている。

1.2.2 定情報名詞句とは

1.2.1 において、庵(1997)は野田(1985)による「は / が」についての指摘に関して、それに合致する例と反する例を挙げたが、それらを(II)のように整理し、また、「定情報名詞句」についても(III)のように説明している

⁹ 「# は先行文脈とのつながりの悪さ(非結束性(incohesiveness))を表す」(庵(1997))

- (Ⅱ) a. 定情報名詞句が「この」「ゼロ」でマークされるときは「は」が使われやすく、「が」は使われにくい。
 b. 定情報名詞句が「その」でマークされるときは「が」が使われやすく、「は」は使われにくい。
- (Ⅲ) テキスト（意味的に一体をなす文連続）内に導入された名詞句がそのテキスト内で再度言及された時、その名詞句を定情報名詞句と呼ぶ。

1.2.3 調査とその結果

以上を踏まえ、庵(1997)では(Ⅱ)の傾向性を確かめるため1985年～1991年の天声人語でガ格の定情報名詞句が指定指示の「この / その」でマークされている全用例を対象として調査を行っている。その結果、(Ⅳ)が導かれたとする。表1は庵(1997)で示されているものである。

(Ⅳ) 「この」は「は」と、「その」は「が」と結びつきやすい。

《調査結果》

表1 「は」と「が」

	は		が		合計	
この	321	75%	107	25%	428	100%
その	58	32.8%	119	67.2%	177	100%
合計	379	62.6%	226	37.4%	605	100%

$$\chi^2 = 95.5$$

(99.9%水準で有意)

1.2.4 「この」と「その」の機能

庵は(Ⅳ)で見られるような関係は、「『この』と『その』の選択に関わる要因から説明可能である」と指摘し、また、それらは次のような「テキスト内で顕著な名詞句の捉え方」を前提としている。

- a、トピックとの関連性という観点から捉える。
- b、テキスト的意味の付与という観点から捉える。

「トピック（との関連性）」については、「テキストの内容を1名詞句で要約する時、その名詞句をそのテキストの『トピック』、トピックを構成する意味上の諸要素の中で、特に重要度の高いものをそのトピックと関連性が高い名詞句と呼ぶ」と規定している。たとえば、次に示す用例における「トピック」は「殺人事件」で、「そのトピックは殺人者、被害者、殺人現場、事件の日時等の要素から構成される」とし、「これらがトピックと関連性が高い名詞句」だとしている。

- (4) 名古屋・中村署は、殺人と同未遂の疑いで広島市内の無職女性(28)を逮捕した。調べによると、この女性は20日午前11時45分ごろ名古屋市内の神社境内で、二男(1)、長女(8)の首を絞め、二男を殺害した疑い。(日刊スポーツ 1992.11.22)

また、「テキスト的意味（の付与）」については、「テキスト内で名詞句が繰り返されると定情報名詞句はその文脈内で限定される。この限定を『テキスト的意味』と呼び、限定を受けた名詞句には先行文脈からのテキスト的意味の付与があると考え」と規定している。たとえば、「先日生協で本を買って読んだ。本は推理小説でなかなか面白かった。」という用例の場合であれば、「先日生協で買って読んだ」という部分が「本」に対する限定であり、「テキスト的意味」だとしている。また、「この」だけを用いることが出来る場合には「次の3つの場合がある」と指摘している。

- 言い換えがある場合
- 遠距離照応の場合
- 先行詞への限定が多くない場合

庵(1997)は上記の3点の場合について、「先行詞を『テキスト的意味の付与』という観点から捉えることは困難であり、『トピックとの関連性』という観点からしか捉えられない」とする。以下は、上記の3点にそれぞれ対応した用例である。

- (5) アオマツムシやツヅレサセコオロギに比べれば、カネタタキの鳴き声はいかにも遠慮深げで、かぼそい。この（/#その）虫は低木や植え込みの葉の陰に遠慮深げにすんでいる。
- (6) ティラー民族画展と題した珍しい美術展が開かれている。6月5日までは東京・渋谷のたばこと塩の博物館で、そのあと新潟など各地を回る。（13文略）折から全国でインド祭が催されている。この（/#その）美術展はその一環だ。
- (7) 一茶にはなぜか現代の「政治献金」のありさまを活写したような句があります。（中略）《今迄は踏まれて居たに花野かな》この（/#その）花野は竹の下にあったものだろう。

そして、次のように「この」の機能を規定している。

・「この」の機能

- a. 「この」は先行詞をトピックとの関連性という観点から捉えていることを示すマーカーである。

また、先行詞を「テキスト的意味の付与」という観点からしか捉えられないものとして、次のような用例を挙げて検討を行っている。

- (8) 田中君は優しい性格でみんなに愛されていた。その / ?? この / # ϕ¹⁰ 田中君が通り魔に殺された。

庵は（8）の文において「田中君が通り魔に殺された」という文が発せられるには、「田中君」が「他人に殺されるはずがない」といった「属性を持っている必要があるため」、ここで「田中君」は「優しい性格でみんなに愛されていた田中君」でなければならないとしている。そして、この下線部が「先行文脈から定情報名詞句へ付与されたテキスト的意味であり」、「この環境では先行詞をテキスト的意味の付与という観点から捉えることが義務であると言え」、この場合、「その」しか用いることはできないと説明している。以上から、「その」の機能を次のように規定している。

¹⁰ 「ϕ」は助詞無標示を示す。

・「その」の機能

- b. 「その」は先行詞をテキスト的意味の付与という観点から捉えていることを示すマーカーである。

1.2.5 「この一は」型と「その一が」型

庵は、1.2.4 で見たような「この」と「その」の機能の違いが、「は / が」との結びつきやすさとどのように関わっているのかについても検討している。先述の「昔々あるところにおじいさんがいました。ある日…」のような、「この」と「は」の組み合わせだけが許容されるタイプの文（「この一は」型）と、(1)(2)のような「その」と「が」の組み合わせだけが許容されるタイプの文（「その一が」型）のそれぞれについて、次のように分析している。

- (XII) a. 「この一は」型は先行文脈の叙述内容を継続／発展させる意味内容を表す文で用いられる。
b. 「その一が」型は先行文脈の叙述内容と対立する意味内容を表す文で用いられる。

また、それぞれの型について、次のように言い換え可能だと指摘している。

- (XIV) a. 「この一は」型はデフォルトの非逆接¹¹ 的意味関係を表す文で用いられる。
b. 「その一が」型は有標の逆説的意味関係を表す文で用いられる。

庵は「その」について、(8)のように「先行詞を定情報名詞句へのテキスト的意味の付与という観点から捉える文脈で使われる」と述べ、一方で「言い換えや遠距離照応では先行詞をテキスト的意味の付与という観点から捉えることが困難である」ことから、「テキスト的意味を短期記憶に保持することは読み手／聞き手の短期記憶の負担になる」としている。従って、「書き手 / 話し手は通常読み手 / 聞き手のテキスト読解 (decoding) が容易になるようにテキストを配列するというのが正しく、かつ、それにも拘わらず書き手

¹¹ 庵は「非逆接」とはいわゆる「順接」に当たるとしている。

/話し手がテキスト的意味の付与という観点から対象を捉えるという読み手 / 聞き手の負担になることを読み手 / 聞き手に敢えて要求するとすれば、その動機が有標の逆接的意味関係を表現することにあるというのは十分ありえることである」としている。以上を「有標の逆接的意味関係を表すために（「この」ではなく）「その」が使われる理由」として述べている。そして、このような意味関係を表すために、なぜ（「は」ではなく）「が」が用いられるのかについて、「『は』は旧情報を、『が』は新情報を表す」という考え方を採り入れて検討している。「この一は」型について、庵は以下のように指摘している。

- ・「この」は、「その」が表すテキスト的意味の付与という観点からの捉え方よりも無標。その点で「この」は「その」よりもデフォルトの意味関係を表すのに適している。
- ・定情報名詞句は外延的にも旧情報であり、定情報名詞句の叙述が先行文脈の叙述を継続 / 発展させるものである点で内包的にも旧情報。

つまり、「この一は」型では、先行詞をトピックとの関連性という観点から捉えるという「この」の性質と旧情報を表す「は」の性質が呼応し、デフォルトの意味関係を表すことになるとしている。また「その一が」型については、以下のように指摘している。

- ・「その健」の部分は指示対象（外延）としては旧情報であり、他に妨げる要因がなければ「は」でマークされることになるが、（1）の文の場合には「その健」についての叙述内容が、「健は病気知らずが自慢の男だった。」の部分を読んだ / 聞いた段階で、読み手 / 聞き手が持つ予測の範囲外にあるという点で「その健」は属性（内包）としては新情報。

つまり、「その一が」型では、先行詞を定情報名詞句へのテキスト的意味の付与という観点から捉えるという「その」の性質と新情報を表す「が」の性質が呼応して、有標の逆接的意味関係が表されるとしている。

1.2.6 その他の場合

庵は、「表1からも『この / その』と『は / が』の組み合わせの中ではこの二つが典型的であると言える」が、この組み合わせ以外に「このーが」「そのーは」の組み合わせがあるということにも簡単に触れている。

(9) [スミソニアン協会]は1846年、英国の科学者スミソンが「人類の知識の増加と普及のために」と、米国政府に贈った遺産で設立された。… このスミソニアンが、14日から3日間、東京で日本の聴衆を対象にセミナーを開く。

(1985.5.13)

(10)病院跡の慰霊碑のそばに、1本のエノキがある。被爆して、幹は根元近くから、裂けるように折れていて、枝もなければ、葉もない。このエノキが、5月に入って芽を吹いた。(1985.6.3)

(11)ある市民が社会党の地方議員に年金のことで相談に行った。… やむなく 別の野党の地方議員の所に行った。その議員は本部と連絡をとり、しっかりと調べた上で答えてくれた。(1986.9.1)

(12)別の病で、長期間闘病を続けている遺伝学者、柳沢桂子さんとの励まし合いが、栗田さんを支えてきたことは前にも書いた。その柳沢さんは、動けなくなってから自然の美しさをずっと深く味わえるようになったという。(1986.8.23)

そして、(9)(10)の「このーが」型について、以下の点を指摘している。

- ・「そのーが」型と類似した意味内容を表す。
- ・「そのーが」型が先行文脈と対立的な意味内容（逆接）を表すのに対し、「このーが」型は主に先行文脈との対比性を表す。（例えば、(10)の「枝も葉もない」という属性と「芽を吹く」という属性が対比されている。）
- ・逆接と対比は連続性を持つことから「そのーが」型と「このーが」型は連続することになり、「このーが」が許容される場合「そのーが」型も許容されることが多い。

また、(11)(12)の「そのーは」型については、次の2点を指摘している。

ることが言える。さらに、「対比 / 逆接という文脈の有標性を示す今一つの現象は次のようなものである」とも述べられ、以下のような例を挙げて説明している。

(13)今朝、太郎が朝ごはんを食べた。

(13)は、「『人が朝、朝ごはんを食べる』という一般知識に合致しているという点で通常は情報量が少なく、発話される動機付け (motivation) が少ない」が、(13)が次の「(14)のような文脈でなら使われても不自然には感じられない」と指摘する。

(14)太郎は朝寝坊でめったに朝ごはんを食べない。

このことから「(13)が自然な文として使われるためには、(14)のようなそれと対比的な文脈を設定する必要がある」と述べ、次のような用例を示している。「めったに朝ごはんを食べない」ということと、「朝ごはんを食べた」という部分が対比性を示すということになるのであろう。

(15)太郎は朝寝坊でめったに朝ごはんを食べない。今朝、その太郎が朝ごはんを食べた。

以上、庵(1997)では「定情報名詞句」のマーカの選択要因との関連から「は / が」の選択に関して述べられていることが確認できたが、2節では庵(1997)における問題点について指摘する。

2. 庵(1997)の問題点

2.1 定情報名詞句のマーカ「この / その」の定義について

庵は「この」「その」について、次のように定義していた。

- ・「この」は先行詞をトピックとの関連性という観点から捉えていることを示すマー

カーである。

- ・「その」は先行詞をテキスト的意味の付与という観点から捉えていることを示すマー
カーである。

また、「『この』だけが使える三つの場合」を次のように分析し、それぞれについて用例を示していた。用例は先述の(5)～(7)である。

- a 言い換えがある場合。(例は(5))
- b 遠距離照応の場合。(例は(6))
- c 先行詞への限定が多くない場合。(例は(7))

しかし、用例を検討すると a の用例と b の用例は「その」も可能ではないだろうか。また、「この」だけが使える場合というのは「トピックとの関連性」からしか捉えられないと指摘されているが、b の用例などは、先行詞から定情報名詞句マーカが離れれば離れるほど説明が多くなるということになり、「テキスト的意味の付与」であるとも捉えられるのではないだろうか。よって、先に確認した定義については検討の余地がありそうである。また、以上のような点から考えると、庵(1997)で指摘されているように、果たして「この」は「は」と、「その」は「が」と結びつきやすいといえるのかという疑問も生じる。

2.2 逆接・対比、新情報・旧情報の扱いについて

庵(1997)では、「{この/その}N{は/が} 述語」文を「そのーが」型、「このーが」型、「そのーは」型、「このーは」型という四つに分類し、それぞれの文の意味内容について述べられていた。庵によれば「そのーが」型と「このーが」型は類似したものであり、「そのーが」型は「先行文脈と対比的な意味内容」を表すもので、「逆接的意味関係を表す文で用いられる」とし、また「このーが」型については「先行文脈との対比性を表す」とする。このように述べられているが、ここで注意しなければならないのは、「逆接」と「対比」という概念である。

先ほども確認したように、「逆接」と「対比」について、庵は「対比と逆接の関係につ

いては」「機能的には両者を特に区別しない」と述べている。つまり、このように「逆接」と「対比」を区別しないということは、「その一が」型と「この一が」型を一見はつきりと区別しているようだが、実はそれぞれの文型についてどのような違いがあるのかを明確には説明していないと言えるだろう。よって、この点については検討を要するだろう。また、「その一は」型は「この一は」型に近く、「その一は」型は「固有名詞」と結びつくと「対比のハ」の意味になることが多く、その点で「『この一が』型と連続する」とも指摘されている。ここにおいても「その一は」型と「この一が」型の違いは明確ではない。「その一は」型は固有名詞と結びつくと対比を表すことが多いということであるが、「この一が」型も対比性を表すということであれば、その二つの文型はどのように使い分けられるのか、どのような条件のときに「この」と「その」が選択され、同時に「は」と「が」が選択されるのか、という疑問が起こる。しかし、この点については明確な説明をしておらず、結びつきやすさの傾向を示すのみである。

また、俺は「は」は「旧情報」、「が」は「新情報」を表すという考えを無批判に用いている。この用語について、丹羽 (2004c) では「NはP」という文を想定した場合、

「『N』そのものの部分が『旧情報』か『新情報』かということでは、『は』と『が』の対立を説明できない」と述べる。以下の用例をみよう¹²。

- (12) 山田さんは中国に行きました。
- (13) 山田さんが中国に行きました。
- (14) 山田さんはどうしていますか？

例えば、「既知か未知かという知識上の概念として理解」する場合、「『は』が既知の場合に用いられ、『が』が未知の場合に用いられると考えると」、「(13)の『が』の文に既知の山田さんが用いられることを説明でき」と指摘している。また「『旧情報/新情報』を、聞き手にも予測できる情報・予測できない情報と考えたり、聞き手にも意識されている情報・意識されていない情報と考える」場合、「(14)において『は』の文に新登場の『山田さん』が用いられることが説明でき」ず、「この『山田さん』は聞き手に予測不可能であるし、聞き手に意識されていなくても構わない」という。このように、「Nの部分そのものが『既知・旧情報』か『未知・新情報』かという考え方で説明することには無

¹² (12) から (14) の用例はいずれも丹羽 (2004c) による。

理があり、NとPとの関係において考えなければならない」という指摘がなされていることから、安易に「は」は「旧情報」、「が」は「新情報」という考え方を導入するべきではないだろう。

以上より、庵のアプローチ方法では「は」と「が」の選択要因を十分に説明することは難しいといえる。そこで、新たなアプローチの方法として名詞句の性質に着目することで、「は／が」の選択要因を説明できるのではないかと考える。指示詞「この／その」の性質だけに注目するのではなく、「この／その」部分を大きく名詞句としてひとくくりに捉えた上で、その名詞句が「は／が」とどのような条件で、どのような関係を結ぶのか分析を行う。

3. 庵説、丹羽説から — 庵説修正へ —

以上より、筆者は庵説について丹羽説をベースに考えることができるのではないかとこの考えの下、以下において庵（1997）について見直していく。

3.1 「新情報」「旧情報」の扱いについて

「新情報」「旧情報」という概念は、庵の論考においても用いられていたものであり、「この／その」と「は／が」の結びつきについて説明する際にこの概念が導入されていた。しかし、先に示したように、丹羽は「NはP」という文について「Nの部分そのものが『既知・旧情報』か『未知・新情報』か」という考え方で説明することには無理がある」、「NとPとの関係において考えねばならない」と指摘している。また、丹羽（2004a）が参考にしている、堀口（1995）でも、「新情報」「旧情報」について、「この用語は、本来の使い方を離れて恣意的にあいまいに使われることが多いので、注意しなければならない」、「何でも‘既知扱い’すれば『～は』と言い、‘未知扱い’すれば『～が』と言う、などと主張されるが、そういう言い方までして‘既知’・‘未知’にこだわるのは、まったく有害無益である」と述べられている。以上のような点が指摘されているということからも、「新情報」・「旧情報」という概念を用いずとも「は」「が」の選択要因を明らかにすることができると思われる。

3.2 「このー」「そのー」の扱いについて

庵(1997)では、「この / その」、また「この / その」でマークされる「定情報名詞句」について次のように規定されている。今一度、簡単に確認をしておこう。

「この」: 先行詞をトピックとの関連性という観点から捉えていることを示す。

「その」: 先行詞をテキスト的意味の付与という観点から捉えていることを示す。

「定情報名詞句」: 「テキスト(意味的に一体をなす文連続)内に導入された名詞句がそのテキスト内で再度言及された時、その名詞句を定情報名詞句と呼ぶ。」

以上より、庵による「この / その」+「定情報名詞句」は、いずれもそのテキスト内において何らかの意味づけがなされている名詞句、つまりテキスト内において何を指示しているかが明確な名詞句であると考えられる。よって、「この / その」+「定情報名詞句」は、丹羽のいう「同定可能な名詞句」、つまり「定名詞句」であるということができるとはならないだろうか。

3.3 「NはP」と「NがP」の扱いについて

ここでは、後の4節で庵(1997)における「は / が」の選択要因について見直していくにあたって、丹羽(2004c)における「N{は / が} P」の捉えについて改めて確認をしておく。

3.3.1 「NはP」(題目説明関係)について

丹羽(2004c)では「NはP」について、次のように規定していた。

- ・「は」の働きは、Nを題目として提示し、そのNについてPと説明する構造(題目説明構造)を形成することであり、Nという固定部分にPという可変部分を割り当てるという関係にある。
- ・固定と可変という関係は、情報構造上の対立として、『前提』と『焦点』という名

で呼ばれる。

つまり、常に「NはP」は〈前提—焦点〉関係であり、また、Nには題目名詞句の同定制約がかかり、Nは「定名詞句」でなければならない。「NはP」についてまとめると以下のようなになる。

「NはP」… NについてPと説明する関係。

N は P

〈前提〉 〈焦点〉

- | | | |
|-------|----|--|
| 一時性述語 | …… | Nに新たにPという出来事が生じたということを、Nを提示してPでそれを説明するという形で表したもの。 |
| 恒常性述語 | …… | Nのある属性Pを述べる（NにPという面があるということ話し手が新たに認識したり、聞き手に認識させたりすることであり、Nの説明をするということ）。 |

3.3.2 「NがP」（主語述語関係）について

また、「NがP」には以下の場合があると指摘されている。

- ・ 〈焦点—前提〉… 「P」が既出かそれに相当する文脈が必要な有標の構文。
- ・ 〈全体焦点〉… （固定部分なし）無標の構文（先行文脈がない場合など）。

さらに、上記それぞれにおいて「P」が「一時性述語」「恒常性述語」をとると、次のように分析できるとする。

- ・ 「一時性述語」の場合… 「N」は「P」の表す動き（動作・変化）や状態（存在も含む）を体現するものを表す。（PはNにとって非内在的な属性）
- ・ 「恒常性述語」の場合… 「N」は「P」の性質や所属を表す。（PはNにあらかじめ内在している属性、あるいはNとPの外延が一致する場合もある）

<u>N</u>	が	<u>P</u>	
動き・状態を表す	—	一時性述語	…… P を中心とした捉え
性質・所属を現す	—	恒常性述語	…… N を中心とした捉え

以上のように、「P」の種類によって「N」が表すものは異なると指摘している。

3.4 丹羽説における「この / その」と「は / が」の結びつきの捉え

以上、丹羽 (2004c) からは次のようなことがいえる。

- ・「この—」「その—」それぞれを区別することはなく、いずれも「定名詞句」という捉え方が可能である。つまり、「この—」「その—」をひとくくりに「定」として捉え、「は」と「が」の結びつきを考えることができる。よって、庵 (1997) のように「この—」「その—」それぞれが「は / が」のどちらに結びつきやすいかということを、述べ示すことは難しい。
- ・あくまでも「N」と「P」の関係から「は」と「が」を捉え、文の情報構造は主に「P」の性質による。

以上より、「この / その」が「は / が」のどちらに結びつきやすいかということよりも、主に単文の「NとP」を考察し、場合によっては何らかの先行文脈を想定したり、NやPに特別な解釈を入れることにより、「Nは / がP」という情報構造を考察しているといえる。丹羽における「N{は / が}P」についての考えを以下にまとめて示す。

「NはP」

「P」

〈前提—焦点〉 { 一時性動詞 …有標
恒常性動詞 …無標

「NがP」

〈焦点—前提〉構造 …有標
〈全体焦点〉構造 …無標

→ 「P」はそれぞれ「一時性述語」

- 「恒常性述語」をとる。
- 「P」が一時性述語の場合「N」
は動き・状態を表す。
- 「P」が恒常性述語の場合「N」
は性質・所属を表す。

以上より、筆者は「新情報 / 旧情報」という概念を用いず、「N{は / が}P」の「N」と「P」の関係から「は / が」について考えている丹羽説を用い、庵(1997)を捉えなおすことができると思う。

4. 名詞句・述部の性質と「は / が」

本節では丹羽(2004a)における名詞句や、丹羽(2004c)における述部の捉えを用いることによって、庵(1997)について捉えなおしていく。

4.1 名詞句や述部の性質による「は」と「が」の使い分け

4.1.1 丹羽(2004a)の名詞句の捉え—定名詞句・不定名詞句—

先において確認したように、丹羽は名詞句の定・不定について規定・分類していた。以下、定名詞句についてのみ再掲する。

- a 定名詞句(同定可能な名詞句): 指示する対象の範囲が定まっている名詞句であり、次のいずれかの名詞句からなる。
- (ア) ある特定の個体を指示する名詞句〈特定個体〉
 - (イ) ある集合の全体を指示する名詞句〈集合全体〉
 - (ウ) ある集合の特定の部分を指示する名詞句〈特定部分〉

丹羽によれば、題目名詞句の場合は(ア)(イ)(ウ)のどれかの定名詞句であり、「このような制約が存在するのは、何を指示しているか分からないものについて、それがどんなものであるか、どんな状況であるかなどということを説明することに情報価値がな

いからである」という。また、従来、定名詞句（同定可能な名詞句）という概念は「既知名詞句」と呼ばれているが、丹羽が「既知」という用語を用いないのは、「その名詞句の指示対象を聞き手が知っているとは限らないからである」とする。(16)がその例である。

(16) 金魚って何年くらい生きるの？—私の叔父さんの家の金魚は、みんな5年以上生きていますよ。(朝日新聞84. 11. 25)

このような場合、「聞き手や読み手がこの文においてはじめて『私の叔父さんの家の金魚』の存在を知る場合にも用いられることが想定でき、「既知」という概念になじまないとする。しかし、定名詞句は「指示範囲の定まった名詞句であるから、聞き手は指示対象を他の対象と区別することはできる」とし、これに対して「不定名詞句¹³は指示範囲が定まっていないので、聞き手はその対象を他の対象と区別できない」と指摘している。さらに、不定名詞句が題目に立つのは「その対象の上位集合を表す適切な定名詞句が文脈上想定できるという場面で、対象自体が不定でも対象の存在する範囲が限定できるならば、その属性や状況を説明することが可能である」としている。また他に、不定名詞句が題目に立つような場合は「存在・非存在を表す文」であり、「存在述語の場合に不定名詞句が題目に立ち得る」とする。これは丹羽(2004a)に詳しい。このような点を踏まえた上で、以下では用例を考察する。

4.1.2 用例の考察—「このN{は / が} P」の「{この / その}N」部分について—

ここでは名詞句の性質に着目しながら用例についての考察を行ない、庵(1997)を捉えなおす。煩雑になることを防ぐため、用例は便宜的にそれぞれの類型ごとに示し、庵(1997)で取り上げられていた用例と、『毎日新聞‘97データファイル』から取り出した

¹³ 丹羽(2004a)。

不定名詞句（同定不可能な名詞句）：指示する対象の範囲が定まっていない名詞句であり、次のいずれかの名詞句である。

(エ) 任意の個体、または、要素の定まらない集合を指示する名詞句〈任意個体・集合〉

(オ) ある集合の任意の部分を指示する名詞句〈任意部分〉

用例のいくつかを以下で示す。

・用例

〈「この一は」型〉

(以下、庵 (1997) から)

- ・名古屋・中村署は、殺人と同未遂の疑いで広島市内の無職女性(28)を逮捕した。調べによると、この女性は20日午前11時45分ごろ名古屋市内の神社境内で、二男(1)、長女(8)の首を絞め、二男を殺害した疑い。(日刊スポーツ1992.11.22)
→「この女性」: 単一の個体を指示する指示名詞句であり「特定個体」。
- ・アオマツムシやツヅレサセコオロギに比べれば、カネタタキの鳴き声はいかにも遠慮深げで、かぼそい。この(/#その)虫は低木や植え込みの葉の陰に遠慮深げにすんでいる。
→「この虫は」: 集合全体を指示する名詞句であると捉えられる。「集合全体」。
- ・ティラー民族画展と題した珍しい美術展が開かれている。6月5日までは東京・渋谷のたばこと塩の博物館で、そのあと新潟など各地を回る。(13文略)折から全国でインド祭が催されている。この(/#その)美術展はその一環だ。
→「この美術展」: 「特定個体」
- ・一茶にはなぜか現代の「政治献金」のありさまを活写したような句があります。(中略)《今迄は踏まれて居たに花野かな》この(/#その)花野は竹の下にあったものだろう。
→「この花野」: 「特定個体」

(以下『毎日新聞』から)

- ・97/07/27(朝)[経]一方、95年にASEAN首脳会議で決まったASEAN産業協力計画(AICOスキーム)もあまり進んでいない。この計画は96年11月から、地元の出資比率が30%以上という「現地企業」の条件を満たせば、部品、完成品、原材料の域内貿易が特惠関税の対象となるというもので、事実上のAFTAの前倒しとなると注目されてきた。
→「この計画」: 「特定個体」
- ・97/08/06(夕)米国国家運輸安全委員会(NTSB)によると、グアム国際空港は飛行機を滑走路に誘導する「グライドスロープ」と呼ばれる無線誘導システムがメンテナンスのた

め先月から使用停止状態となっていたことが分かった。この装置は着陸しようとする航空機に電波を発射して、適当な進入角度を知らせるシステム。

→「この装置」：単一個体として捉える。「特定個体」

〈「その一は」型〉

(以下、庵(1997)から)

- ・ある市民が社会党の地方議員に年金のことで相談に行った。…やむなく別の野党の地方議員の所に行った。その議員は本部と連絡をとり、しっかりと調べた上で答えてくれた。(1986.9.1)

→「その議員は」：単一個体。「特定個体」

- ・別の病で、長期間闘病を続けている遺伝学者、柳沢桂子さんとの励まし合いが、栗田さんを支えてきたことは前にも書いた。その柳沢さんは、動けなくなってから自然の美しさをずっと深く味わえるようになったという。(1986.8.23)

→「その柳沢さんは」：固有名詞。「特定個体」

(以下、『毎日新聞』から)

- ・97/02/05(朝)[国]一方、カシミール領有問題でインドと対立するパキスタンでは軍部が大きな権限を持つ。その軍部は、国防予算削減に絶対反対の意向を表明。

→「その軍部は」：単一個体。「特定個体」

- ・97/07/25(朝)[経]時を同じくして工作機械等の製造装置の自動化・高度化が画期的に進み、新興国では熟練工がいなくても高精度製品を、先進国並みの歩留まりで生産できるようになった。その製品は品質が上がっても値上げとならず、先進国に続々と流れこんでいる。

→「その製品は」：単一個体。「特定個体」

〈「この一が」型〉

(以下、庵(1997)から)

- ・[スミソニアン協会]は1846年、英国の科学者スミソンが「人類の知識の増加と普及のために」と、米国政府に贈った遺産で設立された。…このスミソニアンが、14日から3日間、東京で日本の聴衆を対象にセミナーを開く。(1985.5.13)

→「このスミソニアン」：「特定個体」

- ・病院跡の慰霊碑のそばに、1本のエノキがある。被爆して、幹は根元近くから、裂けるように折れていて、枝もなければ、葉もない。このエノキが、5月に入って芽を吹いた。(1985.6.3)

→「このエノキ」：単一の個体。「特定個体」

(以下、『毎日新聞』から)

- ・97/05/27(朝)[社]同会によると、錦織工務店が本体工事を羽曳野市の建設業者に発注し、内装などは自前で実施。この業者が設計段階で倒産し、別の業者に6000万円で改めて発注した。

→「この業者」：「特定個体」

- ・97/07/25(朝)[家]仏壇を飾った品物をのせて海に流す小舟を地元では「ともしあげ」と呼ぶ。昔は、この小舟が遊び道具だった。

→「この小船」：「集合全体」

〈「そのーが」型〉

(以下、庵(1997)から)

- ・健は病気知らずが自慢の男だった。その健が／??はガンであっけなく逝ってしまった。

→「その健」：「特定個体」

- ・順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。その順子が／#は今は他の男の子供を二人も産んでいる。

→「その順子」：「特定個体」

- ・もう一席の『かわり目』はお酒の話だ。小米朝落語という、昨年演じた『たちぎれ線香』のように若旦那が活躍するネタが得意だというイメージがある。その彼が(／#は)、酔っぱらいのおっさんが主役のこのネタを演じる。

(『第2回桂小米朝独演会パンフレット』)

→「その彼」：「特定個体」

- ・田中君は優しい性格でみんなに愛されていた。その／??この／#田中君が通り魔に殺された。

→「その田中君」：「特定個体」

(以下、『毎日新聞』から)

- ・ 97/01/07(夕)[総] 日本には自衛隊、海上保安庁、都道府県の消防、民間などに約1600機のヘリコプターがあります。そのヘリが阪神大震災で人命救助に縦横に活躍しなかった…。

→「そのヘリ」：「集合全体」

- ・ 97/01/21(朝)[社] 何年か前のことです。私は駅のホームで、列車を待っていました。すると私のすぐ前に並んでいた女性がバッグからたばこを取り出し、吸い始めました。そして吸い殻を足元に“ポイ”と捨てました。すぐそばに吸い殻入れがあるのにです。その女性が、和服で一分のすきもないすてきな身なりの人だっただけに、今でも私の脳裏に焼き付いています。

→「その女性」：「特定個体」

以上より、「この一」「その一」名詞句は定名詞句であると考えることができ、特に「この一」と「その一」を区別して扱わずともよさそうである。「この/その」という指示詞があることによって「指示する対象の範囲が定まっている」と考えられ、定名詞句と捉えることが可能となる。では、次に「が」が選択される場合について注目し、どのような場合に「が」が出てくるといえるか考察を行なう。

4.1.3 用例の考察—「N {は / が} P」のP部分について—

4.1.2で確認したように、「この一」「その一」名詞句は定名詞句であると捉えることができる。よって、ここでは「この一」「その一」の後に続く述部の性質の違いが「は」と「が」の使い分けに関わっている可能性も考えられるため、述部の検討を行う。ここでも、まず丹羽(2004c)における「一時性述語」「恒常性述語」という捉えを取り入れて考察する。以下で示した用例は、4.1.2と同様の用例である。それぞれの用例型についての様相は次の通りである。

●「{この/その}一は」型

(一時性述語として捉えられるもの)

- ・ この女性は20日午前11時45分ごろ名古屋市内の神社境内で、二男（1）、長女（8）の首を絞め、二男を殺害した疑い。
- ・ この（/#その）虫は低木や植え込みの葉の陰に遠慮深げにすんでいる。
- ・ この（/#その）花野は竹の下にあったものだろう。
- ・ この計画は96年11月から、地元の出資比率が30%以上という「現地企業」の条件を満たせば、部品、完成品、原材料の域内貿易が特惠関税の対象となるというもので、事実上のAFTAの前倒しとなると注目されてきた。
- ・ その議員は本部と連絡をとり、しっかりと調べた上で答えてくれた。
- ・ その柳沢さんは、動けなくなってから自然の美しさをずっと深く味わえるようになったという。
- ・ その軍部は、国防予算削減に絶対反対の意向を表明。
- ・ その製品は品質が上がっても値上げとならず、先進国に続々と流れこんでいる。

（恒常性述語として捉えられるもの）

- ・ この（/#その）美術展はその一環だ。
- ・ この装置は着陸しようとする航空機に電波を発射して、適当な進入角度を知らせるシステム。

（計：一時性述語8例・恒常性述語2例）

● 「{この/その}ーが」型

（一時性述語として捉えられるもの）

- ・ このスミソニアンが、14日から3日間、東京で日本の聴衆を対象にセミナーを開く。
- ・ このエノキが、5月に入って芽を吹いた。
- ・ この業者が設計段階で倒産し、別の業者に6000万円で改めて発注した。
- ・ その健が / ??はガンであっけなく逝ってしまった。
- ・ その順子が/#は今は他の男の子供を二人も産んでいる。
- ・ その彼が（/#は）、酔っぱらいのおっさんが主役のこのネタを演じる。
- ・ その / ??この/#の田中君が通り魔に殺された。
- ・ その女性が、和服で一分のすきもないすてきな身なりの人ただだけに、今でも私の脳に焼き付いています。

・そのへりが阪神大震災で人命救助に縦横に活躍しなかった…。

(恒常性述語として捉えられるもの)

・この小舟が遊び道具だった。

(計：一時性述語 9 例・恒常性述語 1 例)

以上は、庵(1997)でとりあげられていたもの、また筆者が『毎日新聞 ‘97データファイル』から引用してきたものなどであるが、数量的に十分ではないと思われるため、さらに毎日新聞から用例を抽出し、考察を加えた。結果は次の通りである。

「このーが」型 (一時性述語 3 1 例・恒常性述語 9 例)

「そのーが」型 (一時性述語 3 7 例・恒常性述語 3 例)

→計：一時性述語 6 8 例・恒常性述語 1 2 例

「このーは」型 (一時性述語 2 8 例・恒常性述語 1 2 例)

「そのーは」型 (一時性述語 2 9 例・恒常性述語 1 1 例)

→計：一時性述語 5 7 例・恒常性述語 2 3 例

上記の結果から、いずれも一時性述語が恒常性述語よりも多いといえる。また「{この/その}ーは」型と「{この/その}ーが」型についてみると、若干「ーが」の付く用例のほうに一時性述語が出やすいようにもみえるが、「ーは」のつく用例とそれほど大きな違いはない。ならば「は」が出る場合と「が」が出る場合の文構造の違いはどこにあるのだろうか。

先ほども述べたように、「{この/その}ー」型はいずれも「定」であるということが言える。そこから丹羽(2004c)に則れば「{この/その}ー」型文については「前提ー焦点」というものが予測され、そこから「は」が出やすいということになり、「{この/その}ーは」型という文構造となるはずである。また、この場合、一時性述語・恒常性述語のいずれも許される。以上のような点から、「{この/その}ーは」型という文構造のほうが「{この/その}ーが」型よりも無標であるといえよう。

考察の結果、「は」が出る場合と「が」が出る場合の述部の性質にそれほど大きな違いは見られなかったということから、検討すべきは先行文脈の内容との関係ということにな

るだろう。以上を踏まえ、どのような場合に「が」が選択されるか以下において考察する。

4.2 どのような場合に「が」が出現するか

庵（1997）は「{この/その}N{は/が}述語」文という文型に着目し、それぞれの文型の特徴について記述した点で評価されるべきものである。また、「『この一が』型が許容される場合『その一が』型も許容されることが多い」という指摘は、「この/その」の違いよりも、「{この/その}一」が定名詞句であるという共通性に注目する本稿における見方とつながる面がある。しかしながら、庵ではそれらの文型それぞれの出現の傾向や結びつきの傾向を示すに留まり、「が」が選択される要件については十分に説明しきれていない部分がある。よって、以下では主に「{この/その}一が」型についていくつかの観点からアプローチし、「は」ではなく「が」が出る要因について考察・分析を行なう。

4.2.1 〈前提一焦点〉構造と〈全体焦点〉構造という観点からの考察

「{この/その}NがP」型について検討を行なうと、筆者の考えでは「この/そのN」部分は、先行詞を含む先行文脈からなんらかの意味づけをされていると考えられるため「定」であり、P部分は「不定」である。よって、丹羽（2004c）でいうところの〈前提一焦点〉文ということになる。またこの場合、P部分は一時性述語も恒常性述語もあり得る。

丹羽が「NがP」について〈全体焦点〉文であると指摘するのは、おそらく構造上ということではなく、先行文脈で示されたこととは異なる側面PをもつNが現れること becoming ため、ひとまずそこでNが先行文脈内で示されたNとは違うものとされ、情報内容として「N」は「定」ではなく「不定」と捉えられるからだろう。「{この/その}NがP」についても、こう捉えれば〈全体焦点〉文とも考えられる。しかしながら、文構造としては〈前提一焦点〉文と考えられ、構文構造は〈前提一焦点〉で、意味としては〈全体焦点〉という、両方の性質を併せ持つような特殊な構文であるということが言えるかもしれない。

丹羽（2004c）では「（何かニュースがあるのかという文脈で）山田さんが中国へ行ったんだ」のように言うとき、これは〈全体焦点〉文であるといえるとしているが、「何か

ニュースがあるのかという文脈で」、突然「(22)¹⁴ …その姉が2年ほど前から最後の里帰りを思い立った」とは言えないということからも、この場合、「{この/その}NがP」文が〈全体焦点〉文であるとは考えにくいだろう。Nという先行詞を含む先行文脈がある場合の「{この/その}NがP」という場合には、やはり「{この/その}N」は定名詞句であると考える。しかし、この場合の「定」は先行文脈の内容とPの記述内容との関係によって左右される「不安定な定」であり、「{この/その}NはP」の場合の「{この/その}N」は「安定した定」であるともいえる。ここでいう「安定」「不安定」は丹羽(2004c)における〈全体焦点〉構造についての指摘の中で述べられている、「『Nが』と『P』との間に情報構造上の落差がなく、ひとまとまりに焦点となっている」かどうかに関わると考える。つまり、丹羽がいうところの「情報構造上の落差」があれば「不安定」であり、「情報構造上の落差」がなければ「安定」ということになるだろう。あるいは「N」についての情報の確かさがPによって左右されるかどうかということが「安定」「不安定」に関わるという可能性も考えられる。つまり、それが「が」を用いることによって生じる、庵(1997)が言うような「逆接」の意味を発生させ、そこから「意外性」や「強調」という意味を発生させるとも考えられるのではなかろうか。

4.2.2 先行詞Nを含む先行文脈と「{この/その}N{は/が}P」の関係からの考察

ここまでは主に「{この/その}NがP」という構文内部の関係から「が」の出る条件について考察を行ってきたが、さらに先行詞を含む先行文脈と「{この/その}N{は/が}P」文の関係を考察することにより、「が」が出現する条件について考えてみたい。

これまでも述べているように、用例の調査結果などから「{この/その}NはP」文は出現しやすい。よって、ここで「が」が選択される条件を解明するにあたって、「は」について「対比の『は』」があるといわれているということからも、「{この/その}NがP」文に先行する文脈に、Nと対比されるようなものが出てくる、あるいは条件がそろっている場合には「は」が出やすく、そうでない場合には「が」が出てくるという仮説を立て、用例を考察し、分析する。「対比」という概念については、これまでも多くの研究の蓄積がある。野田(1996)には「対比」について、諸氏によってなされてきた研究がまとめられている。野田(1996)によれば「対比の『は』」には大きく分けて、対比の相手が明示されているものと、対比の相手が明示されていないもの等があるとされている。こ

¹⁴(22)の用例は4.2.2に示す。

れらを参考に考えたい。

では、以下において「{この/その}NがP」と先行文脈との関係を考察する。その後、「{この/その}NはP」と先行文脈との関係を考察する。なお、以下で取り上げた用例は、毎日新聞（1998）『毎日新聞データ‘97データファイル』から無作為に抽出したものである。

・用例

「{この/その}NがP」用例

（このNが）

- (17) ここは、フィジーで3番目に大きな島・タベウニ島。世界地図で確認してほしい。この島はマリンレジューの拠点というだけではないことに気付かれるだろうか。島を縦断して180度の子午線が走っている。ということは、地球上でこの島が最も早く朝を迎える。
- (18) 伸びのある球にギルキーのバットは空を切った。この球がバッテリーの頭に当たったのだろう。
- (19) サハリン北部のピルタン湾で94年、ロシア人科学者とともにもコククジラの写真識別調査を行なった米国立海洋漁業公社のボブ・ブラウエル博士は「確認されている中で、この湾が西系統群唯一の夏のエサ場。そのすぐ沖で、原油が採掘されているのだから心配するなというほうが無理」と影響を心配する。

（そのNが）

- (20) 昨年3月、思い出の海、天橋立で亡夫のお骨を少し散骨した。その海が今、重油の流出で汚染されている。
- (21) 父は大工で、親方としての仕事のほか、仏像、仏具の彫刻や漆塗り、箔押しなど何でもできる器用な職人であった。寺の真下に生まれ育ち、仏縁深い仕事を多くしていたので、信仰心は格別に厚かった。戦後、仕事を離れてからは子供たち5人に仏壇を作り、仏像を彫って形見としてくれた。無口なせいも、家で子供をしかったり、他人の悪口を言ったことなど記憶にない。その父が亡くなる日、母に一言、「長かったのう」と言った。
- (22) 熊本県八代市に住む7.5歳の姉が3年前、夫と死別後、急速にパーキンソン病が進行、

手足のまひがひどくなった。後ろから支えられてやっとすり足の歩行、めったに外出もしない。その姉が2年ほど前から最後の里帰りを思い立った。

「{この/その}NはP」用例

(このNは)

- (23) オーストラリア北部特別地域（準州）のダーウィンで、末期がん患者が安楽死法を使い2日朝死去していたことが、6日明らかになった。同法による安楽死は昨年9月の男性に次いで同国で2人目。この人は南オーストラリア州の主婦、ジャネット・ミルズさん（52）で、インターネットに「安楽死は末期患者にとっては素晴らしいこと」と遺言を残していた。
- (24) じつは富士山、そのものがかぐや姫なのです。だから富士はいつも美しい。あの人買い伝説で有名な厨子（ずし）王の姉の安寿が、青森県の岩木山の化身とされるのと同じです。かぐや姫を描く『竹取物語』はこんな最後ど終わります。かぐや姫に月に去られて帝は嘆きます。彼女が置き土産にした不死の薬を、彼女がいなければ持っても仕方がないと、天に最も近い山で焼かせます。日本で最も高い山は今も昔も富士山です。その山の頂で使者に薬と帝のかぐや姫への思いをつづった手紙を焼かせました。だから富士山からは長い年月、ケムリが立ち昇っていたのです。不死の薬を焼いた山、だからフジと呼ばれました。高さ3776メートル。この山は養老山、仙人山、常盤山など長寿にちなむ異名を数多く有してきました。
- (25) 凍りついた土手に、ひととき鮮やかな色彩を放っているのはスイバの葉だ。光を透過する紅色は、まるでステンドグラスのように美しい。この葉は、越冬の真っ最中。

(そのNは)

- (26) すると、隣の男の人が私の足に触れて。避けたんですけど、それがまた触れて。これは一発言っておかないと！と決心し、「触らないでください」と言ったんです。車内がどよめきましたね。その男はその後、目をつぶっていました。
- (27) 大勢が罵っても誰一人涙を流さなかった。往生際の見苦しさが惻隱の情を奪っていた。途中ゲルマニア軍の一人の兵士が出会い頭に剣を抜いてウィッテリウスを襲った。鬱憤を晴らそうとしたのか、それとも一刻も早くウィッテリウスを嘲弄から救ってやろうとしたのか、それとも始めから副官を狙っていたのか、不明である。その兵は副官

の耳を切り落とした途端、喉を突き刺された。

(28) OL時代の話ですが、給料日は21日でした。そのころ、私は母の作ってくれたお弁当を持参しており、ある日、包みを開けると小さな祝儀袋が入っていました。「うわあ、きっと給料日前でお金ないの知っててくれたんやわ」。先輩も「いいお母さんやねえ」と注目の中、ワクワク喜んで中を見ると、なんとごま塩でした。「うん?」。そしてお弁当を開けると赤飯でした。そうです。その日は私の誕生日だったのです。

・考察

【「{この/その}NがP」文と先行文脈について】

「{この/その}NがP」の先行文脈中にはNと対比されるような名詞句が出ていないということが分かる。それぞれの文における先行文脈内部に見られる先行名詞句と、「Nが」の様子をみると、(17)でいえば「フィジーで3番目に大きな島・タウベニ島」—「この島が」朝を迎える、(18)「伸びのある球」—「この球が」あたった、(19)「サハリン北部のピルタン湾」—「この湾が」エサ場、(20)「思い出の海、天橋立」—「その海が」汚染されている、(21)「父」—「その父が」言った、(22)「熊本県八代市に住む75歳の姉」—「その姉が」思い立った、というような、名詞句についての一対一の関係が中心にあるということがわかる。

このように、二重下線で示した名詞句以外にはNと対比されるような名詞句は特にみられず、これらの名詞句を含む先行文脈を受けて比較的すぐに「{この/その}NがP」という文が続く。先行詞を含む先行文脈からあまり間を置かずに「{この/その}NがP」が続いているというのも、この文連続の特徴であるといえる。「{この/その}NはP」文のほうが、Nという先行詞を含む先行文脈との間に多くの文を挟みこんでおり、庵(1997)でいうところの「遠距離照応」の文であるといえる。

また、それぞれ二重下線でマークした名詞句についてはかなり細かくその名詞句がどのようなものであるかが記述されており、その名詞句の意味がある程度限定されているといえよう。固有名詞が出現している頻度も高い。たとえば、(17)(19)(20)の名詞句は固有名詞であり、なおかつ(20)については「思い出の海」というさらなる条件が加わっているということからも、ここで現れる名詞句は定名詞句であるということがよりいえるだろう。また(18)についてはただの「球」ではなく「伸びのある」球であるということが示され、また(21)では先行文脈内容から「大工で、信仰心が厚い、無口な」父であるということが

示され、(22)では「熊本県八代市に住む75歳の、パーキンソン病を患っている」姉ということが示されている。よって、いずれもそれぞれの文で現れる名詞句にはなんらかの細かい限定がかかっているということがいえるだろう。このことは庵(1997)において「その一は」型は固有名詞と結びつきにくいという指摘がなされていることと関わる可能性がある。

【「{この/その}NはP」文と先行文脈について】

「{この/その}NはP」の先行文脈について考察すると、(23)では「同法による安楽死は昨年9月の男性に次いで同国で2人目」とあるように、「この人」として指される以外にもう一人いるということがわかる。また、(24)では「じつは富士山、そのものがかぐや姫なのです。だから富士はいつも美しい。あの人買い伝説で有名な厨子(ずし)王の姉の安寿が、青森県の岩木山の化身とされるのと同じです」のように、富士山以外の山が出てくる。(25)は、「ひととき鮮やかな色彩を放っているのはスイバの葉」とあり、「ひととき」と述べられているということから、この文からは土手にはスイバ以外にも鮮やかな色彩を放っている植物があるとわかる。また、(26)には「隣の男の人が私の足に触れて。」とあるように、この隣の男性以外にも男性がいるということが推測される。さらに、(27)では「途中ゲルマニア軍の一人の兵士が出会い頭に剣を抜いてウィッテリウスを襲った。」とあり、ゲルマニア軍の兵隊が他にも大勢いるということが想像され、(28)の用例では「そのころ、私は母の作ってくれたお弁当を持参しており、ある日、包みを開けると小さな祝儀袋が入っていました。」ということから、お弁当を持っていった日というのはこの日以外にもあった、ということは十分に考えられる。

このように、「{この/その}NはP」型では、先行文脈において、(23)「この人は」、(24)「この山は」、(25)「この葉は」、(26)「その男は」、(27)「その兵は」、(28)「その日は」のNの部分と対比されるような名詞句が出現していたり、あるいは先行文脈内にNと対比されるような事柄が想定されているということが分かる。また固有名詞が「NがP」では多く現れていたのに対し、ここではNに一般名詞しか現れていないということも、押さえておく必要があるだろう。このことは先ほども指摘した、庵(1997)において『「その一は」型は固有名詞と結びつきにくい』と述べられていることと共通するものである。

・「この/そのNは/がP」文と先行文脈についての考察から

以上、「{この/その}N{は/が}P」の考察結果から、「{この/その}NはP」という構文の場合のほうが、それに先行する文脈にNと対比させられるようなものが多く出現しているということが確認できた。また「{この/その}NがP」という構文においては、Nと対比関係にあるような名詞句がいくつも出現するという様相はみられないということが明確になった。以上のような結果を合わせて考えてみると、Nという先行詞を含む先行文脈のなかにNと対比的なものが多く出る場合には「は」が選択され、そうでない場合、つまりNと対比するような名詞句なり、事柄が想定されるような条件がそろわない場合には「が」が選ばれるということが言えるだろう。「は」を用いることが「対比」の意味を担うということから、「が」が選ばれた結果として、「対比」ではなく他のものを想定しない「排他」の意味が表され、そこから「強調」や「意外性」の側面を「が」が示すことになると考えられる。野田（1996）では、排他専用の「が」と排他兼用の「が」について指摘されている。排他兼用の「が」は「まず第一に、主格を表している」ものであり、「それが、名詞述語文の主格になっているといった条件によって、結果的に、排他を感じさせる」と述べられていることから、本稿で対象としているものについては排他兼用の「が」ということになるだろう。

4.3 丹羽説についての修正

以上、丹羽（2004c）や庵（1997）、また用例を確認しつつ、主に庵（1997）の修正を目指した。そこで、本節では丹羽（2004c）についても簡単に問題点を指摘し、筆者の考えを示しておきたい。丹羽（2004c）では、文の情報構造について以下のように示していた。

「NはP」〈前提—焦点〉

「NがP」〈全体焦点〉

「NがP」〈焦点—前定〉

丹羽は「NがP」について、「太郎が未成年だ」のような恒常性述語の用例は、この用例の「全体を焦点とする文として用い」、例えば、「どうしてみんなでいかないの？」

「（メンバーのひとりである）太郎が未成年なんです」のように用いられれば、「これは『みんなで行かない理由は』などという題目語が潜在しており、〈前提—焦点〉文に属す

る」と説明する。しかし、この説明をみる限りでは「太郎が未成年だ」という文を〈全体焦点〉として考えているのか、〈前提—焦点〉構造として考えているのか判然としない。丹羽は「NがP」型は通常〈焦点—前提〉文であり、「NがP」を〈全体焦点〉文として用いるとすると、そこには「題目語が潜在して」おり、〈前提—焦点〉文に属するものだとする。しかし、筆者はこれらの考え方を修正する必要があると考える。

まず一点目は、用例を見る限りでは「NがP」型を〈全体焦点〉文として用いようとする場合、必ずしも「題目語が潜在して」いるものばかりでなく、本研究で対象としているような、先行文脈をもつ「{この/その}NがP」型の文には「題目語」を想定しにくく、〈全体焦点〉文とは考えにくいということである。

二点目は、〈全体焦点〉文が〈前提—焦点〉文に属するという考え方についてである。それぞれの文の構造をみると〈全体焦点〉文は文全体が「不定」の構造であり、〈前提—焦点〉文は「定—不定」という文構造であり、大きく構造が違う。にもかかわらず〈全体焦点〉文を〈前提—焦点〉文に属させるのは多少の無理があるともいえるのではないだろうか。

このように筆者の考えが丹羽の考えと馴染まない部分があるのは、おそらく「{この/その}NがP」という文の特殊性から来ているのだと思われるが、それは同時に丹羽が本研究で対象としているような「{この/その}NがP」という文構造までを十分に想定していないことを示すものであろう。丹羽(2004c)では「{この/その}NがP」までをも含めた「NがP」文についての説明は十分に行なえず、修正の余地があると考ええる。「NがP」という文構造はある条件下では、構造上〈前提—焦点〉であるが、その文のもつ意味としては〈全体焦点〉であるということを明確に記述した上で、それを振り分けて置くことができるような新たな構造を、丹羽の示す3分類に付け加える必要があると考える。以上の点については、今後も検討をしたい。

5. 結論

以上の考察から、本章でみた範囲における「{この/その}N{は/が}P」文については、次のようなことが結論としていえるだろう。

- 1) 「このN」「そのN」はいずれも定名詞句として捉えることができる。よって、庵

(1997) のように「この」と「その」と分けて考えずとも、指示詞と「は」と「が」との結びつきを説明をすることができる。

- 2) 「{この / その}N{は / が}P」という場合において、Pの部分には一時性述語・恒常性述語のいずれの述語も見られ、一時性述語のほうが多く用いられているということが分かる。しかし、「は」と「が」の違いによってP部分に出現する述語の種類に特に大きな違いはなく、P部分だけが「{この / その}N{は / が}P」の場合の「は」と「が」の使い分けに大きく関わっているとは考えにくい。
- 3) 「が」が選択される要因について考察すると、N先行詞を含む先行文脈に、Nという名詞句と対比されるような名詞句、あるいは対比されるようなものが連想されるような条件がそろっている場合には「は」が選択され、そうでない場合には「が」が選択されるということが明らかとなった。そして「は」は、Nと対比される相手はその文に明示あるいは暗示される場合、対比の意味をもつということが言われているということから、「は」ではなく「が」が選択されるのであれば、結果として対比ではなく「排他」という意味を持つことになり、そこから自ずと意外性や強調という意味合いがでる。

6. おわりに

本章では「{この / その}N{は / が}述語」文について、庵(1997)の修正をしつつ、丹羽(2004b)の「コピュラ文あるいは一般に主題文の名詞句の問題は、定・不定のような指示の仕方の問題として理解すべきであり、指示・不指示という形で理解すべきではない」という考え方を取り入れて考察を進め、結論を出した。

庵(1997)では「この / その」と「は / が」の結びつきのひとつひとつを、主に傾向性の面から説明するにとどまっており、なぜ「は」が選択されるか、「が」が選択されるかという部分について十分な記述はなかった。そこで、本章ではそこに名詞句の性質からのアプローチを取り入れ「{この / その}N」をいずれも「定名詞句」と捉えることができるとし、それらを別々ではなく、まとめて扱うことができると主張した。また、Nという先行詞を含む先行文脈の意味や内容と「{この / その}N」の関係から、庵(1997)によって示されていた「は」と「が」の選択要因の部分、庵より少ない枠組みを用いることにより明らかに出来たという点で、主に傾向性の面から「は」と「が」の選択要因を述べて

いる庵(1997)を乗り越えるものであると考える。しかし、名詞句の捉えについて西山(2003a,b)などは丹羽とは違う論を展開しているという現状があり、コピュラ文「AはBだ」における名詞句「A」「B」が指示的名詞句であるか、それとも非指示的名詞句であるかについては現在でも問題になっており、議論がなされているところである。また、この問題に関しては、「AはBだ」という文を中心に持ち上げられて考察されており、「AがBだ」というコピュラ文はあまり持ち上げられていないということからも、名詞句の性質と「は/が」をめぐる問題については、今後もさらなる展開があるのではないかと考える。以上を踏まえ、第2章以降においても、名詞句の振る舞いに注目し「は/が」の選択要因について考察する。

引用・参考文献

- ・庵功雄(1995)『『それが』とテキストの構造』(阪大日本語研究/大阪大学文学部日本学科(言語系)編)
- ・庵功雄(1997)『『は』と『が』の選択に関わる一要因一定情報名詞句のマーカ―の選択要因との相関からの考察一』(『国語学』188集)
- ・西山佑司(2003a)『日本語名詞句の意味論と語用論』(ひつじ書房)
- ・西山佑司(2003b)「名詞句の諸相」(『朝倉日本語講座5 文法I』第6章)
- ・西山佑司(2005)「コピュラ文の分析に集合概念は有効であるか」(『日本語文法』5巻2号)
- ・丹羽哲也(2004a)「名詞句の定・不定と『存否の題目語』」(『国語学』第55巻2号)
- ・丹羽哲也(2004b)「コピュラ文の分類と名詞句の性格」(『日本語文法』4巻2号)
- ・丹羽哲也(2004c)「主語と題目語」(『朝倉日本語講座6 文法II』第11章)
- ・野田尚史(1996)『『は』と『が』—新日本文法選書1』(くろしお出版)
- ・堀口和吉(1995)『『～は～』のはなし』(ひつじ書房)
- ・三上章(1963)『日本語の論理—ハとガー』(くろしお出版)

- ・ 金水敏・田窪行則（2004）『日本語研究資料集 指示詞』（ひつじ書房）
- ・ 益岡隆志・田窪行則（2003）『基礎日本語文法—改訂版—』（くろしお出版）
- ・ 益岡隆志・野田尚史・沼田善子（1995）『日本語の主題と取り立て』（くろしお出版）

用例データ出典

- ・ 毎日新聞（1998）『毎日新聞データ ‘97データファイル』

附記

本章は、修士論文の一部に加筆、修正をしたものである。「は/が」についての先行研究、また筆者が本研究を行うきっかけとなった論考などを示して論述したものであり、2章以降における議論の前提を多く含む。本章以降の章へのイントロダクションとして、また、本論全体の方向づけの役割を担うという点から、第1章とした。また、名古屋言語研究会第40回例会での発表の際には、多くの方から貴重なご意見、ご指摘をいただいた。ここに記して深謝申し上げる。

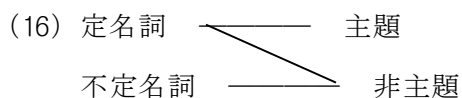
第2章

指示詞「この / その」指定指示文における「は / が」の出現傾向

0. はじめに

第1章において検討した庵功雄（1997）は、「{この / その} N {は / が} 述語」文に注目した、数少ない先行論である。指示詞「この / その」との関わりから「は / が」の選択要因に迫り、「この」は「は」と、「その」は「が」と結びつきやすいということ等を明らかにした庵（1997）は、指示詞による情報提示と「は / が」の選択要因を関連付けて論じた点で筆者の問題意識に大きな示唆を与え、その点において評価されるものであった。しかしながら、庵（1997）は「は / が」の選択要因そのものというよりも、テキストの結束性の分析を主たる目的としており、「は」と「が」について「旧情報」「新情報」という概念を特に検討を加えずに使用している等の問題点があることは否めず¹、再考すべき余地が残されているということから、第1章において庵（1997）を見直した。

また、「は」と「が」の問題全般について扱っている野田尚史（1996）では、「は」は「が」と異なり主題を表すとした上で、「日本語で文の主題になりやすいのは、話の現場や前の文脈にあるものを指す名詞や、それと関係のある名詞」であると指摘され、日本語以外の言語でも『私』や『君』、『これ』、『その～』にあたるような語は主題になりやすいとする。さらに名詞句の性質と主題との関係について（16）²のような関係を示している。



¹ 「は」「が」について「旧情報」「新情報」という概念がいつでも当てはまるわけではない。例えば、次の用例の「は」は旧情報、「が」は新情報といえるだろうか。（用例はいずれも『毎日新聞‘97データファイル』より引用）

・【長寿社会を生きる】やすらぎの家 / 7 自宅を開放 人とのきずなこそ支え

その木造の家は被災を免れて以前のまま兵庫県西宮市・香栞園地区の閑静な住宅街に建っている。

・黄教授は米国テネシー川流域開発公社で一時期働き、四川省開発局で測量隊長として長江を延べ3000キロ調査した。その黄教授が指摘する。

また丹羽哲也（2004）では、「NはP」のような文を想定した場合、「N」が「新情報」か「旧情報」かということでは「は / が」の対立は説明できないと指摘されている。このような点からも「新情報」「旧情報」の概念を用いずに「は」「が」の選択要因について説明をしたい。その際、名詞句の性質からのアプローチが有効であるという目論見があり、本論考の執筆動機のひとつにもなっている。

² 番号は野田（1996）のまま。

(16) で示されているように「主題は定名詞である必要があるが、定名詞は必ず主題になるわけではない³」とする。このような指摘からも、名詞句と「は / が」の問題は密接に関わるということが明らかである。ただし、野田（1996）ではこの指摘に関してこれ以上の追究はなされず、「は / が」の選択要因への整理には至っていない。

以上のような点を踏まえ、本章では「{この / その} N {は / が} 述語」文を考察対象とし、名詞句 N、「指示詞 {この / その} N」部分に注目して「は」と「が」を考察する。「指示詞 {この / その}」と名詞句 N、さらに「{この / その} N {は / が} 述語」文の先行文脈に現れる先行名詞句との関わりのなかで「は / が」の選択要因について明らかにする。また、先行名詞句や名詞句 N の関係を分析するにあたっては名詞句の意味属性の観点から、名詞句の「同位」関係、「上位—下位」関係、「下位—上位」関係を踏まえて考察を行なう。

1. 用例調査とその結果

1.1 指示詞「この / その」と「は / が」の出現傾向

用例調査には『毎日新聞’97データファイル』の1年分のデータを用いる⁴。その際に対象となるのは以下のような文章形態のものである。

「——先行詞——。【この / その名詞句 Nは / が】——。」

- ・ 財政赤字で世界の2大超大国である日本とイタリア。【そのイタリアは】予想以上にい

↑先行詞

↑名詞句 N

いま財政改革のあらしの渦中にあった。

以下、表1に指示詞「この / その」と「は / が」の出現傾向を示す。

³ 野田（1996）は定名詞、不定名詞について以下のように補足している。「定名詞には定冠詞付きの名詞のほか、人称代名詞や指示代名詞、固有名詞なども含み、不定名詞には不定冠詞付きの名詞のほか、『だれか』のような名詞を含む」。

⁴ 記事データは膨大であるということから、考察の便宜上、用例数を絞り込むために名詞句 N が3文字

あるいは4文字の用例を調査の対象として扱った。

表 1：指示詞「この / その」と「は / が」の出現傾向

	は		が		合計	
	回数	割合	回数	割合	回数	割合
この	218	80.1%	54	19.9%	272	100%
その	43	47.3%	48	52.7%	91	100%
合計	261	71.9%	102	28.1%	363	100%

表 1 で示したように、指示詞「この」が選択され、且つ「は」が選択される場合は全体の約 8 割である。また、指示詞「この」は「は」と結びつきやすいことが確かめられる。一方で、指示詞「その」の場合はわずかに「が」が選択される場合が多い。これは野田（1996）で『『その～』にあたるような語』は「主題になりやすい」と指摘されている内容に反するものでもあり、そのような点からも「指示詞＋が」型、なかでも「その N が」型は注目すべき型であるといえよう。以下で、「その N が」型の特殊性を名詞の指示性における先行名詞句との関係において説明する。

1.2 「その N が」型の有標性

ここで、「その N が」型について改めて確認しておこう。

第 1 章でも示したように、「N {は / が} P」文の「N」と「P」についての「固定」と「可変」の関係を、情報構造上の対立として「前提」と「焦点」の関係と捉える丹羽（2004）によれば、「N は P」文は常に〈前提—焦点〉構造であり、「N が P」文は〈焦点—前提〉構造、あるいは〈全体焦点〉構造であるとされる。つまり、「N は P」文は〈前提—焦点〉構造に固定しているが、「N が P」文についての情報構造は固定していないという捉えである。さらにまた、〈前提—焦点〉構造と〈全体焦点〉構造は「特に先行文脈がなくて単独で用いられ得る無標の構文」であり、〈焦点—前提〉構造は「P が既出かそれに相当する文脈が必要な有標の構文」であるとも指摘する。

丹羽（2004）のこのような指摘は、本章における「その N が」型を有標とする立場と通ずるもので、「その N が」型は他の用例型に比べ特殊性を持つという本章の主張を支えるものである。では、以下において「その N が」型の有標性を名詞句の性質という観点から

考察し、明らかにする。

1.3 指示詞省略の可否と「は/が」の出現傾向

ここでは指示詞「この/その」が「は/が」の選択要因にどのように影響を及ぼしているかをみるため、1.1節で扱った用例群を指示詞省略の可否を基準に（Ⅰ）（Ⅱ）のように分類する。

（Ⅰ）指示詞を省略しても非文にならない場合：〔指示詞省略○〕

（Ⅱ）指示詞を省略すると非文になる場合：〔指示詞省略×〕

（Ⅰ）（Ⅱ）のように分類し考察すると、指示詞「この」と「は/が」の結びつきやすさは次のように考察される。

表2：固有名詞の出現傾向

（パーセンテージ以外の数字は用例調査数）

		先行詞・ 名詞句N ともに固有 名詞	先行詞 のみ 固有名詞	名詞句N のみ 固有名詞	先行詞・ 名詞句N とも固有名 詞以外	合計
指示詞省略○	その	は (24)	12(50%)	0(0%)	12(50%)	24(100%)
		が (11)	2(18.2%)	0(0%)	9(81.8%)	11(100%)
	この	は (88)	5(5.7%)	1(1.1%)	82(93.2%)	88(100%)
		が (19)	0(0%)	1(5.3%)	17(89.5%)	19(100%)
指示詞省略×	その	は (19)	3(15.8%)	0(0%)	16(84.2%)	19(100%)
		が (37)	11(29.7%)	1(2.7%)	25(67.6%)	37(100%)
	この	は (130)	0(0%)	9(6.9%)	121(93.1%)	130(100%)
		が (35)	0(0%)	2(5.7%)	33(94.3%)	35(100%)

（対象とした文章形態）「―― 先行詞――。【この/その 名詞句N は/が】――。」

まず「このN {は / が}」型は、〔指示詞省略○〕〔指示詞省略×〕ともに「このNは」型が多く、指示詞「この」は「は」と結びつきやすい。

〔指示詞省略○〕 〈このNは型〉88例 > 〈このNが型〉19例

〔指示詞省略×〕 〈このNは型〉130例 > 〈このNが型〉35例

一方、指示詞「その」と「は / が」の関係について考察すると、〔指示詞省略○〕の場合の「そのN」は「は」と結びつきやすく、〔指示詞省略×〕の場合の「そのN」は「が」との結びつきが強い。「このN {は / が}」型とは異なる結びつきの特徴が見られる。

〔指示詞省略○〕 〈そのNは型〉24例 > 〈そのNが型〉11例

〔指示詞省略×〕 〈そのNは型〉19例 < 〈そのNが型〉37例

上記のように、指示詞「その」と「は / が」間の結びつきの様相は特徴的である⁵。「その」と「この」がともに指示詞である一方、この差異が生じている要因としては、指示詞が付与される名詞句の性質が結びつきやすさを左右している可能性が考えられる。そこで、2節では〔指示詞省略○〕の場合と〔指示詞省略×〕の場合における先行詞と、「{この / その}N」における名詞句Nについて、意味属性の観点からその性質を確認する。

2. 先行名詞句と名詞句Nの意味属性関係

本節では名詞句について意味属性の観点から考察を加える。名詞句間の意味属性関係とは、例えば以下の用例の場合、先行名詞句「ハートマンヤマシマウマ」と名詞句N「シマウマ」において捉えることができる「下位上位」関係のようなものである。

- ・上野動物園のシマウマはアフリカ南西部の山岳地帯に生息している ハートマンヤマシマウマである。【このシマウマは】、サバンナにすむグラントシマウマやグレビーシマ

⁵ 庵（1997）では、指示詞「この」は「は」と、指示詞「その」は「が」と結びつきやすいという結果を示している。

ウマに比べ、幅は狭いが高さのある蹄を持っている。

名詞句間の関係は、上記の「下位上位」関係のほか、「同位」関係、「上位下位」関係も見られる。以下、〔指示詞省略○〕〔指示詞省略×〕についてそれぞれ考察を行う。

2.1 〔指示詞省略○〕における名詞句の性質

〔指示詞省略○〕全体では「下位上位」関係が最も多い。「上位下位」関係は「この N {は / が}」型においてのみ見られ、用例数は少ない。また、名詞句の性質をみると、特に固有名詞句の出現傾向に用例型による偏りがあり、「その N は」型に突出してみられる。

①「その N は」型 (24例)

先行詞と名詞句 N の関係を見ると、「下位上位」関係が 8 例、「同位」関係が 16 例である。「下位上位」関係が大多数を占める「この N は」型にくらべて「同位」関係の多さは特徴的である。「同位」関係の場合、先行詞と名詞句 N はいずれも固有名詞であり、固有名詞の出現率が他の用例型と比較して最も高い。

- (1) 国内炭の引き取り先は、すでに電力会社だけ。【その電力業界は】発電コスト重視を強め、高い国内炭の価格引き下げを求めている。（「下位上位」関係）
- (2) 財政赤字で世界の 2 大超大国である日本とイタリア。【そのイタリアは】予想以上にいま財政革命のあらしの渦中にあった。（「同位」関係）

②「その N が」型 (11例)

先行名詞句と名詞句 N の関係は「下位上位」関係 5 例、「同位」関係 6 例で、ほぼ同数である。この用例型の場合も「同位」関係の出現の様相は特徴的である。「同位」関係ではうち 2 例が先行名詞句・名詞句 N 共に固有名詞である。

- (3) 重要なのは生産活動を通していくら蓄積したか、つまりストックだ。【そのストックが】腐ってはいくら成長しようが砂上の楼閣になってしまう。（「同位」関係）
- (4) あるテーマに関する書類を探しに、公立の図書館へ目録カードを調べに行った。とこ

ろが、【そのカードが】ボックスごと消えていた。（「下位上位」関係）

③「このNは」型（88例）

先行名詞句と名詞句Nの関係は「下位上位」関係50例、「同位」関係36例、「上位下位」関係2例である。「同位」関係のうち5例が先行名詞句・名詞句N共に固有名詞である。

(5) 筋ジストロフィに似た筋力の退化症状さえ表れた。運動刺激がないと、【この退化症状は】ますます進んでしまう。（「下位上位」関係）

(6) 臨床研究には米国・カイロン社が製造するベクターが使われる。【このベクターは】マウス由来のレトロウイルスを改変して病原性や増殖性を取り除いてある。（「同位」関係）

(7) この血管は“異常”なものであり、未熟でもろく、破れやすい。【この異常血管は】ブルフ膜に穴を開けて、さらに成長。（「上位下位」関係）

④「このNが」型（19例）

先行名詞句と名詞句Nの関係は「下位上位」関係12例、「同位」関係4例、「上位下位」関係3例である。先行名詞句・名詞句Nがともに固有名詞である用例はみられない。

(8) くじの実施主体は、文部省所管の「日本体育・学校健康センター」だ。助成金の配分も審議会で大枠を決め、【このセンターが】外部の識者の意見を聞きながら決めることになりそうだ。（「下位上位」関係）

(9) 大豆のカマンベールといわれる健康食品「テンペ」をご存知だろうか。もとはインドネシアの伝統的な発酵食品だが、【このテンペが】今、みそ、コロッケなどの加工品になって、岡山県で普及し始めた。（「同位」関係）

(10) ナゴヤドームでエラーをしたらこれだけ塁を盗まれる、と実証した場面。七回2死から、大豊の【このトンネルが】中日の「ドーム初敗戦」にそのままつながった。（「上位下位」関係）

2.2 【指示詞省略×】における名詞句の性質

〔指示詞省略〇〕と同様に「下位上位」関係が最多である。「上位下位」関係は全体で5例と、出現しにくい。また固有名詞の「同位」関係が「そのNが」型に偏在しており、ここでも固有名詞の出現傾向は注目に値する。

①「そのNは」型（19例）

先行名詞句と名詞句Nの関係は「下位上位」関係10例、「同位」関係9例で、「下位上位」関係と「同位」関係はほぼ同数みられる。「同位」関係のうち3例は、先行名詞句・名詞句Nともに固有名詞である。

(11)大橋兄弟の下流にはトロ流し漁をする漁師が少なくとも10人いる。【その漁師たちは】、一昨年の漁の結果をみて昨年の長良川での漁をあきらめ、隣接する揖斐川、木曾川に漁場を移した。（「下位上位」関係）

(12)ジタさんが休暇明けで香港に出かけるたびに、末娘は「いかないで」と泣きじゃくる。【そのジタさんは】17日、39歳の若いおばあちゃんになった。（「同位」関係）

②「そのNが」型（37例）

先行名詞句と名詞句Nの関係は「下位上位」関係16例、「同位」関係20例、「上位下位」関係1例である。「同位」関係の場合、その半数が先行名詞句と名詞句Nともに固有名詞であり、固有名詞の出現率は他の用例型と比較して高い。このことが「同位」関係の多さを支えているといえよう。

(13)回収されたペットボトルは、再生処理施設で改めて異物などを取り除いた上、細かく裁断されたフレークなどになる。【そのフレークが】原料となり、再商品化される。（「下位上位」関係）

(14)証券不正疑惑に巻き込まれいったんは辞任するが、ラオ首相が引き戻した。【そのラオ首相が】、タミルナド州で汚職の悪評高かったジャヤラリッタ州首相と総選挙協力を発表すると、敢然と国民会議派離脱を宣言。（「同位」関係）

(15)時々、風が窓から入ってくる。【その涼しい風が】教室を吹き抜けて、私たちに一時のうるおいを与えてくれる。（「上位下位」関係）

③「このNは」型（130例）

先行名詞句と名詞句Nの関係は「下位上位」関係120例、「同位」関係6例、「上位下位」関係4例である。用例数は全体で最も多く、うち「下位上位」関係が130例中120例を占める。なお、固有名詞が出現するのは先行名詞句のみ（9例）で、名詞句Nには出現しない。

(16) 2人のキャリアウーマン（岩下志麻と吉永小百合）が年下の男、耕介（玉置浩二）を同時に愛してしまう物語だ。【この幸せな男は】、出世、という言葉さえ知らないのではと思うほどのんびりした30代の新聞記者。（「下位上位」関係）

(17) マンションなど機密性の高い住宅に住む人の健康チェックを目的に東京都の保健所が全国で初めて、無料で住宅室内への訪問診断を行ったところ、こんな傾向が分かった。【この訪問診断は】「住まいの健康・快適度診断」と名付けられ、4月から多摩地区にある12の都保健所で一斉に始めた。（「同位」関係）

(18) 日本海の重油流出事故で海産物への影響が懸念されている中で20日、自民党役員会を前に、橋本龍太郎首相らが、わざわざ日本海でとれたズワイガニと甘エビを食べ、「影響なし」のパフォーマンスを披露した。【この試食会は】北陸地方選出の国会議員らの要請で実現した。（「上位下位」関係）

④「このNが」型（35例）

先行名詞句と名詞句Nの関係は「下位上位」関係29例、「同位」関係6例である。固有名詞が出現するのは先行名詞句のみ（2例）で、名詞句Nには出現しない。

(19) 「私は芸術といったことはほとんど知らない」。「このひとことが」成功の秘訣。（「下位上位」関係）

(20) 海の深い所にある海水を深層水という。【この深層水が】いま熱い注目を集めている。（「同位」関係）

以上のように、指示詞省略の可否を基準として用例を分類し、本節において名詞句の意味属性関係について概観した結果、用例型によって出現しやすい意味属性関係や名詞句などを確認することができた。3節においてはさらに名詞句に注目しつつ、「は / が」の選

択要因について考察を加える。さらに、本節において指摘したが、名詞句のなかでも固有名詞の出現傾向に特徴がみられたことから、3節以降では固有名詞の振る舞いにも注目する。また、本稿は一貫して「{この / その}N{は / が}述語」文について注目するものであるということから、3節では指示詞を省略すると非文になると考えられる〔指示詞省略×〕文⁶を主に取り上げて、その中に出現する先行名詞句と名詞句Nの性質について考察する。

3. 先行名詞句と名詞句Nに出現する名詞句の性質

本節では、先に示した調査結果について考察を加える前提として、指示詞「この / その」に関する先行研究を確認しておこう。

3.1 指示詞「この / その」

文脈指示における指示詞「この / その」についてはこれまでも多くの言及があり、さまざまな説が提示されているが、ここでは基本的に金水敏（1999）の分析に倣う。

金水（1999）は日本語の指示詞3系列（コソア）について、いずれも「直示用法⁷」ならびに「非直示用法」をもつとする。本章で扱う指示詞「この / その」のうち、「コ系列」の指示詞について、「コの文脈照応用法」は「直示用法の拡張」されたもので、「コ系列の場合、指示対象は言語文脈によって提示されはするが、言語的文脈は指示対象を代表しているだけであって、言語表現とは独立に、あらかじめ存在するもの」であると述べる。

- (32) a. 五歳の誕生日に真智子は両親に熊のぬいぐるみを買ってもらった。この友人を、真智子は一生大切にした。⁸

⁶ ここでは詳しく説明しないが、本章において主として考察する〔指示詞省略×〕の用例は、いわゆる指示詞の「指定指示」用法の用例である。後に続く第3章では、「代行指示」用法の用例について考察する。指示詞「この / その」による文脈指示の用法については、第3章において触れる。

⁷ 「直示」については以下のように定義されている。「談話に先立って、言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込むことである」。

⁸ 用例番号(32)a、(32)bは金水（1999）のまま。

(32) a のように、コ系列は「対象の同一性を保ちながら、異なるカテゴリー付けを行なう、すなわち複数の異なるフレームに属するものとして扱うことができる」⁹。一方、「ソ系列」は「主に言語的な表現によって談話に導入された要素を指し示すために用いられ」、「ソのいわゆる照応用法は、言語外世界とは関係なく、先行文脈によって概念的に設定された対象を指し示す」とする。このような場合「指示対象の概念が検索の重要なキーとなるので、カテゴリーを変えると指示対象の同定が困難」となる。

(32) b . 五歳の誕生日に真智子は両親に熊のぬいぐるみを買ってもらった。??その友人を、真智子は一生大切にした。

また、相手に対して何らかを「新規に知らせる」場合にも「ソ系列」の指示詞が使われ、「説明的・提示的な文脈でソを使用する」のは「聞き手の負荷に関する語用論的な要請¹⁰に基づく選択である」とする。

以上、指示詞「この / その」については基本的に上記の規定に倣い、用例調査の結果について考察を進める。

3.2 【指示詞省略×】についての考察

ここでは先の表2に示した用例調査の結果をうけ、【指示詞省略×】を中心に先行名詞句と名詞句Nについて考察を行う。先行名詞句と名詞句Nの関係については名詞句の意味属性の関係に着目し、名詞句の「同位」関係・「上位下位」関係・「下位上位」関係のように名詞句の意味属性を捉え、先行名詞句と名詞句Nの双方の関係を捉えて考察する。

3.2.1 「名詞句Nのみ固有名詞」の用例群

この用例群で特徴的なのは、いずれの型においても「名詞句Nのみ固有名詞」の用例が0例という点である。これは固有名詞が固有名詞たる所以を考えれば、ある意味では当然

⁹ 金水(1999)によれば「第1文は一般的なフレームに基づいて『ぬいぐるみ』というカテゴリーを与えられた対象が、第2文では『真智子』から見た世界のフレームに基づいて、『友人』というカテゴリーを与えられている」とされる。

¹⁰ 金水(1999)は「聞き手負荷制約：聞き手が発話を処理する際にかかる負荷を最小にせよ」があるとするが、ただしこのような聞き手に対する負荷を無視してもよい場合(「叱責、勧め、思い出語り等の文脈」)もあるということも指摘している。

のことだといえる。固有名詞はある1つの事物に付与され、その名称を見聞きすれば、誰もが特定の一つの事物と結び付けられるような名詞¹¹である。よって先行名詞句で固有名詞または定名詞句として導入された場合、指示詞による対象の固定は必須とはならない。

また、田窪行則(1997)において「同一指示が許されるのは、一番構造的に高い位置にある名詞句が一番情報量が多い場合」で、「指示的名詞は、より指示性の少ない名詞を先行詞としてはいけない」と指摘されているように¹²、たとえば当該文型において「先行名詞句」≠「固有名詞」で「名詞句N」＝「固有名詞」という文脈であるならば、先行名詞句は「名詞句N」＝「固有名詞」よりも「指示性の少ない名詞句」ということになり、同一指示は許されない。つまり先行名詞句という位置づけ自体が成立しなくなる。よって「名詞句N」のみ固有名詞である用例は出現しないという現象は、名詞の指示の原理に裏打ちされていることになる。また一方、本章の考察対象範囲においては「名詞句N」＝「固有名詞」である時に「名詞句N」に指示詞「この/その」が付与される場合がある。これは指示の原理に照らして有標の型として捉えられると同時に、なぜ指示詞が付与されるのかを説明する必要がある。この点について、本章では情報量という観点を導入して以下で説明する。

3.2.2 「先行名詞句・名詞句Nともに固有名詞」の用例群

〈そのNは型〉3例・〈そのNが型〉11例みられる¹³。

〔指示詞省略×〕：〈そのNは型〉計3例

◇先行名詞句・(固有名詞) ジタさん一名詞句N・(固有名詞) ジタさん / 「同位」関係
(21) ジタさんが休暇明けで香港に出かけるたびに、末娘は「行かないで」と泣きじゃくる。

【そのジタさんは】17日、39歳の若いおばあちゃんになった。

◇先行名詞句・(固有名詞) カワクボ一名詞句N・(固有名詞) 川久保玲 / 「同位」関係

¹¹ 織田(1994)における固有名詞の規定は次のようである。1. 特定の一つの存在対象だけに与えられた固有の名称であり、2. 固有名と命名対象との結び付きは社会的に認められた命名儀式によって成立・保証され、名称表現がもつ言語的意味(そのような意味を持っているとして)によるものではない。

¹² 田窪(1997) p.23参照。

¹³ 「そのが」型の用例数は〔指示詞省略○〕における「そのが」型の用例数を唯一上回っている型であり、その点で特徴的であり注目すべき型である。

(22) ジバンシーを引き継いだ気鋭のデザイナー、アレクサンダー・マックイーンも、1月のパリ・メンズで「最も尊敬するカワクボのために」とショーのゲストモデルを買って出たほど。【その川久保玲は】、今回、ひたすら洗練さを求める西欧流仕立てを逆転する発想で、服の原型に迫った。

◇先行名詞句・(固有名詞) 山崎拓政調会長一名詞句 N・(固有名詞) 山崎さん / 「同位」関係

(23) 自見さんは自民党の山崎拓政調会長の側近といわれている。【その山崎さんは】石油卸売商、泉井純一被告による多額献金疑惑の渦中にいます。

〔指示詞省略×〕: 〈そのNが型〉計11例(そのうち3例を以下で示す)

◇先行名詞句・(固有名詞) ラオ首相一名詞句 N・(固有名詞) ラオ首相 / 「同位」関係

(24) 証券不正疑惑に巻き込まれいったんは辞任するが、ラオ首相が引き戻した。【そのラオ首相が】、タミルナド州で汚職の悪評の高かったジャヤラリッタ州首相と総選挙協力を発表すると、敢然と国民会議派離脱を宣言。

◇先行名詞句・(固有名詞) キューバー一名詞句 N・(固有名詞) キューバ / 「同位」関係

(25) キューバは原住民の言葉で〈中心地〉という意味だそう。【そのキューバが】、リマの日本大使公邸「人質事件」解決の中心地になろうとしている。

◇先行名詞句・(固有名詞) 自民党一名詞句 N・(固有名詞) 自民党 / 「同位」関係

(26) 財界、分けても経団連は戦後の保守政界に政治資金を供給し続け、自民党と二人三脚で経済大国ニッポンを築き上げた。【その自民党が】政権から転落。

「そのNは」型・「そのNが」型ともに「先行名詞句」と「名詞句N」の関係はいずれも「同位」関係である。この場合、「その」は金水(1999)で述べられているような、先行名詞句と名詞句N間での異なるカテゴリー付けを行なうものではなく、ある種の限定的な指示を行うものであるといえる。この意味で、指示詞を必須とする上記6例は「そのNが」の述部(後続文脈)において先行名詞句について未知の情報を提示するものである。この場合において、有標の「そのNが」型がデフォルトとなることは理解しやすい。3例みられた「そのNは」型の用例もすべて「が」に置き換え可能である。

(ア) 〈そのNが〉型の特殊性—指示詞「その」の付与される要因

出現傾向から本稿で有標性を認めた〈その N が型〉については、さらに以下のように考察を加えることができる。

(24)' ラオ首相にいったん引き戻された (何者か) が、後に会派離脱。

(25)' キューバという国名が持つ意味は〈中心地〉だが、新たに「人質事件解決」の〈中心地〉として捉えられようとしている。

(26)' 経済大国ニッポンを築き上げた「自民党」であったが、政権から脱落。

(24)～(26)の文脈から見ると、およそ読み手にとっては先行文脈から推測・予測困難な内容が後続文脈に続く文章内容であり、後続文脈中の「名詞句 N」には新たな情報が付け加えられているといえる。文意を踏まえずに「先行名詞句」と「名詞句 N」をみた場合、それらは意味属性関係においては「同位」関係にあり、それぞれが持つ情報量も同等であると判断される。しかし、文意を考慮したうえで「先行名詞句」と「名詞句 N」をみれば、それらが持つ情報量は相対的にみて「先行名詞句」 < 「名詞句 N」という関係にある。そしてこのような場合、先の田窪(1997)の指摘に従えば、「先行名詞句」と「名詞句 N」の同一指示は困難となる。

(33)¹⁴ 田中課長は最近元気がない。課長の奥さんに原因があるのかもしれない。

(田中課長 = 課長 は可能)

(34) 課長は最近元気がない。田中課長の奥さんに原因があるのかもしれない。

(課長 ≠ 田中課長)

田窪(1997)は「同一指示が許されるのは、一番構造的に高い位置にある名詞句が一番情報量が多い場合」であり、「指示的名詞は、より指示性の少ない名詞を先行詞としてはいけない」とする。ただし、(25)のような例は指示詞が付与されており、一見この原理に反するようにみえる。しかしそうではない。むしろこの場合、指示詞の省略は不可能で、指示詞の存在は何らかの役割を担っていると説明する必要さえ出てくる。そこで、指示性とその名詞句に関する情報量は異なると考えてみよう。

情報量が「先行名詞句」 < 「名詞句 N」であったとしても、同一名詞を指示する場合は

¹⁴ 用例番号(33)(34)は田窪(1997)のまま。

現実にある。(25)の「キューバ」や(26)の「自民党」の例がそうである。この場合、指示詞「その」を「名詞句N」に付与することにより名詞句の同一指示を可能にしていると考えられる。この場合、指示詞の省略も不可である。つまり、名詞句の同一指示を可能にする役割を指示詞「その」が担っているため、指示詞省略は不可となると説明できる。

このように、「先行名詞句」と「N名詞句」の両名詞句が指示の上で「同位」関係にあり、先行文脈からは推測・予測困難な後続文が続くような場合、情報量の観点では「先行名詞句」<「名詞句N」となり、同一指示のために指示詞「その」が付与されることが必須となると考えられる。

(イ) 〈そのNが〉型の特殊性—「が」選択の要因

それでは、以下でさらに「が」が選択されるという点について考えてみたい。

「先行名詞句・名詞句Nともに固有名詞」の場合、「先行名詞句」と「名詞句N」は情報量の点からみて「先行名詞句」<「名詞句N」という関係にあり、そのような点から「そのN」以降の内容が先行文脈から推測・予測困難な内容であるということを示すメルクマールとしての「が」が、指示詞「その」と共に選択される。つまり、「が」を選択することによって、先行文脈から後続文脈へと続く、その意味内容には飛躍があるということを示す役割を「が」が受け持つ。このような点から、「そのNがP」文が意外性や強調、排他性を表す文として捉えられることになる。また、前述のように、固有名詞に指示詞「この/その」が付与されるということは有標であるという点も、意外性や強調という点に関与している。「が」の基本的な性質について、野田(1996)では「文章・談話中の『が』」の主な性質としては「主題をもたない文 — 前の文脈とのつながりをもたず、話題を導入したり、転換したりするのに使われる」、「述語が主題になっている文 — 前の文脈にでてきたものや、それに関係のあるものを主題にして、話題を継続するのに使われる」などのように指摘され、また「が」には「排他的な意味を表す働きが強いものがある」とも述べられている。

3.2.3 「先行名詞句のみ固有名詞」の用例群

〈そのNが型〉 1例・〈このNは型〉 9例、〈このNが型〉 2例である。

〔指示詞省略×〕：先行名詞句のみ固有名詞〈そのNが型〉計1例

◇先行名詞句・（固有名詞）チャールズ皇太子 一名詞句 N・（人名詞）皇太子 / 「下位上位」関係

(27) そこでは皇太子の愛人、カミラさんよりも、離婚の原因を作ったチャールズ皇太子自身への風当たりが強い。【その皇太子が】、国民の王室離れが進む中で次期国王を約束されているのだ。

〔指示詞省略×〕：先行名詞句のみ固有名詞〈この N は型〉計 9 例

◇先行名詞句・（固有名詞）トゥバ村一名詞句 N・（場所名詞）田舎町 / 「下位上位」関係

(28) ウガンダ東部、ケニアとの国境に近いトゥバ村。【この田舎町は】、しばしば干ばつに襲われてきた。

〔指示詞省略×〕：先行名詞句のみ固有名詞〈この N が型〉計 2 例

◇先行名詞句・（固有名詞）実母ヤエさん一名詞句 N・（人名詞）お母さん / 「下位上位」関係

(29) 4 年前、骨粗鬆症（こつそしょうしょう）で身動きできなくなった実母ヤエさん (84)を自宅で介護することになった。【このお母さんが】半端じゃなかった。

上記の用例はいずれも「先行名詞句」と「名詞句 N」は「下位上位」関係にあり、ゆえに指示詞省略は不可であると考えられる。

〈この N が型〉 2 例は「名詞句 N」に指示詞「この」が付与され、「が」が選択されているという点においては〔指示詞省略×〕の〈その N が型〉(27)と大きく変わるわけではない。異なる点は、指示詞が「その」であるのか「この」であるのかという点である。

「先行名詞句」と「名詞句 N」が「下位上位」関係の場合は、「先行名詞句」と「名詞句 N」の保有する情報量はそもそも同等ではなく、「先行名詞句」と「名詞句 N」を同定するための何らかのマーカとなるものが、もとより求められていると言ってもよい。そして、そのような同一指示のマーカがあってはじめて名詞句の同定が可能となる。その場合、カテゴリ転換を示す指示詞「その」よりも、「この」が無標であり選択されやすいと予測できる。唯一「その N が」型の(27)は先行名詞句「チャールズ皇太子」、名詞句 N「皇太子」である。「下位上位」関係のなかでも、名詞句 N「皇太子」のもつ特殊性から

ほぼ「同位」関係であるとみなすことができ、3.2.2の類型に整理できる。とすると、「下位上位」関係の場合は指示詞「この」のみ選択されるといえる。「下位上位」関係というのは、言語とは独立した分類学（タクソノミー）的な階層関係に基づく意味関係である。本章で対象としている「{この/その}N{は/が}述語」文においては用例数の観点でも「このNは」型が最多であり、無標であると位置づけた。先に指摘したように、指示詞を必須とする「このNは」型では130例中、120例が「下位上位」関係であった。よって、「このNは」型はタクソノミーに基づく名詞句の「下位上位」関係に支えられ、「無標」の型として確立しているといえる。

3.3 〔指示詞省略×〕全用例におけるその他の傾向

最後に〔指示詞省略×〕全体的な傾向・特徴について指摘しておこう。1.3でみた出現傾向を用例型別に以下に示す。

〈このNは型〉〔指示詞省略○〕88例 < 〔指示詞省略×〕130例

〈このNが型〉〔指示詞省略○〕19例 < 〔指示詞省略×〕35例

〈そのNは型〉〔指示詞省略○〕24例 > 〔指示詞省略×〕19例

〈そのNが型〉〔指示詞省略○〕11例 < 〔指示詞省略×〕37例

全体の傾向として〔指示詞省略○〕 < 〔指示詞省略×〕であるが、「そのNは」型に限っては〔指示詞省略○〕 > 〔指示詞省略×〕であることがわかる。

先に示したように、「そのN{は/が}」型においては名詞句間の「同位」関係が特徴的であった。そして、考察対象とした用例においては「このNは」型がデフォルトであり、「下位上位」関係が本章の考察範囲においては定型で、「そのN{は/が}」型が「同位」関係の専用型であるといえる。また、「そのNは」型が〔指示詞省略○〕24例 > 〔指示詞省略×〕19例であるということは、指示詞「その」が省略されても名詞句間の同一指示が可能となりやすいことを示すもので、同一指示の観点から用例の出現傾向をみたとき、「そのNは」型が「同位」関係を示す用例においてはデフォルトと考えられる。

4. おわりに

本章では「{この/その} N {は/が} 述語」文とその先行文脈を考察対象に、特に指示詞「この/その」の省略が不可である用例について「先行名詞句」と「名詞句 N」の関わりから指示詞「この/その」と「は/が」の関係について考察を進めた。その結果、以下のような点が明らかとなった。

- 1) 「{この/その} N {は/が} 述語」文の類型においては、先行名詞句と名詞句 N が「下位上位」関係である「この N は」型が定型である。
- 2) 「この N」に対して、「その N は」型が名詞句間の「同位」関係の定型となる。それは別カテゴリからの同一指示が可能な指示詞「その」の性質による。
- 3) この類型においては「は」に対して「が」が有標であり、「その N が」型は定型類型（「この N は」型）のもっとも対極に位置する。

以上の結論は、「{この/その} N {は/が} 述語」文という限られた類型の観察に基づくものであるが、名詞句 N や先行名詞句、またその指示の様相をみるにあたって、特に固有名詞の出現状況に注目したことによって導かれたもので、一定の成果を得ることができたと考える。「は/が」の選択に関する要因を、名詞句の性質から考察することの有効性は明らかである。また、本章において注目した固有名詞を含む用例については、第 5 章においてもさらに考察を行う。

引用・参考文献

- ・庵功雄（1997）『『は』と『が』の選択に関わる一要因一定情報名詞句のマーカ―の選択要因との相関からの考察一』（『国語学』188集）
- ・織田稔（1994）『直示と記述同定—英語固有名の研究—』（風間書房）
- ・金水敏（1999）「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」

(『自然処理言語』6巻(4))

- ・田窪行則編(1997)『視点と言語行動』(くろしお出版)
- ・西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』(ひつじ書房)
- ・丹羽哲也(2004)「主題と題目語」(『朝倉日本語講座6 文法Ⅱ』朝倉書店)
- ・沼田善子・野田尚史編(2003)『日本語のとりたて—現代語と歴史的变化・地理的変異』(くろしお出版)
- ・野田尚史(1996)『新日本語文法選書1「は」と「が」』
- ・益岡隆志・田窪行則共著(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』(くろしお出版)
- ・益岡隆志・野田尚史・沼田善子編(1995)『日本語の主題と取り立て』(くろしお出版)

用例データ出典

- ・毎日新聞(1998)『毎日新聞データ‘97データファイル』

附記

本章は、修士論文の一部に加筆・修正を加えたものである。修士論文に対して、多くの方から貴重なご意見・ご指摘をいただいた。ここに記して深謝申し上げる。

第3章

指示詞「この / その」代行指示文における「は / が」の出現傾向

0. はじめに

本章では第Ⅱ章を踏まえたうえで、「{この / その} N {は / が} 述語」文を含む文形態を考察対象とし、指示詞「この / その」による名詞句指示の様相、名詞句の性質、また名詞句の意味属性関係に注目することにより、さらに「は / が」の出現傾向をみる。そのなかでも、本章では考察対象として、いわゆる指示詞の「代行指示」用法用例を主に取り上げる。

では、以下においてまず「{この / その} N {は / が} P」文について、用例の出現傾向を捉える。その後、指示詞「この / その」による名詞句指示の様相、また名詞句の振る舞いについて考察し、「は / が」の出現傾向を概観する。

1. 用例の検索

本稿では、主に『毎日新聞 '99 データファイル』から取り出した用例を用いて考察を行う¹⁵。考察対象となるのは、以下のような文形態の用例である。用例検索結果は（表1）に示す。

「—— 先行名詞句 ——。【{この / その} 名詞句N {は / が}】——。」

（表1）

	この	その	合計
が	10(58.8%)	7(41.2%)	17(100%)
は	43(63.2%)	25(36.8%)	68(100%)
合計	53(62.4%)	32(37.6%)	85(100%)

¹⁵ データファイルから「この」「その」それぞれでキーワードを検索し、ヒットしたうちから指示詞が文脈指示用法である300例を取り出した（およそ20日分）。その中から先行名詞句をもつような指示詞「この / その」を含む例を考察対象とし、名詞句の性質、指示詞や「は / が」の出現傾向について捉える足がかりとした。

本稿において対象とする文脈指示用法の用例では、指示詞「この」が選択されやすく、「このNは」型類型の用例数が最多で、「そのNが」型類型が最少であることが確認された。

2. 用例の考察

本節では、先に示した用例を名詞句の振る舞いに注目して考察する。その結果、指示詞による名詞句指示の様相は一様ではないことがわかる。以下、用例を見ていこう¹⁶。

- (1) 時代は司馬遼太郎が「坂の上の雲」で描いた明治の隆盛期。維新からわずか30年足らずで欧米列強の仲間入りを果たしていた。【この急激な発展が】深刻な問題を引き起こしかねなかった。
- (2) 虫拳も中国から来たが、日本で独自の発展をとげ、虫の三すくみから庄屋、狩人、狐の三すくみへと変る。江戸期の社会体制が織り込まれ、子供ごころにどれを出すか心まようのであった。これを狐拳といい、明治になって紙メンコの隅に印刷され、子供界を席捲し、戦前いっぱい続いた、という。【この紙メンコは】、大正期に入り、石、紙、ハサミのしるしが付加されるようになり、やがて戦後になって、狐拳のしるしは少しずつ消えはじめ、昭和40年を境にじゃんけん一色になる。
- (3) 山藤章二と和田誠といえ、わが国似顔絵界(?)の双璧をなす存在として並び称されてきたが、そんなふう二人をいくくりにするためにためらいを覚えることがある。(中略)【その和田誠が】ついさきごろ、『似顔絵物語』をまとめた。
- (4) 銀行破たんに対する制度面、公的資金面の手当てができていないうちに、日銀総裁は「銀行は債権の第2分類を開示すべきだ」と言った。正論ではあるが金融不安感が広がった。【その総裁は】米国で「日本の銀行の自己資本比率は8%スレスレだ」と言った。

(1) は先行名詞句「維新からわずか30年足らずで欧米列強の仲間入りを果たしていた」を、後続文において名詞句「急激な発展」と換言し、先行名詞句を指示する。(2)(3) につ

¹⁶ 本稿における用例中の下線、隅付括弧、囲み、網掛けなどはすべて筆者による。

いても、それぞれ先行名詞句「紙メンコ」「和田誠」を、後続文「この紙メンコ」「その和田誠」で指示し、(4)は先行名詞句「日銀総裁」を後続文において名詞句「総裁」と短縮化し、「その総裁」で指示するものである。このように(1)~(4)は「{この/その}N」全体で先行名詞句を指示するものである。しかし、指示詞「この/その」による指示には、次のようなタイプも存在する。

- (5) 案内されたのは、黒い森の真っただ中、フライブルク市にほど近いティティ湖のほとりのホテルだった。【この付近は】かつてゲーテが散策したり、ウィーンのハブスブルク家からフランス王朝に嫁ぐマリー・アントワネットが馬車の交換のために立ち寄った場所などがあって、まるで昔の箱根・芦ノ湖畔のような静かなたたずまいの中に歴史がいぶく森である。
- (6) 啓光のお家芸は「ドライビング・モール」。一方でテンポが遅く、縦一辺倒というマイナス面もあった。スタンドでほぞをかんだ記虎監督は、モール以外の新戦術を模索。【そのキーワードが】ラックを起点にした横への「展開」だった。
- (7) 九回裏、2-2の同点に追いつかれ、なお1死一、三塁のピンチで、松坂の投じた初球は痛恨の暴投となり、サヨナラ負けした。「この負けを教訓にピッチングが変わった」という。唯一の敗戦が「平成の怪物」とまで言わしめた松坂の原点だった。【その後は】、史上初の高校3冠（甲子園春・夏、国体）を達成、チーム公式戦44連勝の不敗神話を築き上げた。

(5)は「この付近」部分全体で先行名詞句「黒い森の真っただ中、フライブルク市にほど近いティティ湖のほとりのホテル」を指示するわけではない。「この付近」は「黒い森の真っただ中、フライブルク市にほど近いティティ湖のほとりのホテルの付近」であり、同様に(6)(7)についても「そのキーワード」は「モール以外の新戦術のキーワード」、「その後」は「唯一の敗戦の後」である。つまり上記(5)~(7)は指示詞「この/その」における「こ/そ」部分で先行名詞句を指示するものであり、(1)~(4)の指示の様相とは異なる。

上記のように、指示詞「この/その」による文脈指示には「{この/その}N」全体で先行名詞句を指示する場合と、指示詞「この/その」の「こ/そ」の部分で先行名詞句を指示する場合とがある。前者がいわゆる指示詞の「指定指示」用法、後者が「代行指示」用

法と言われるもので¹⁷、それぞれ区別して捉えることが可能である。先に示した（表1）の内容をこの指示用法別に示すと、以下（表2）のようになる。

（表2）

	指定指示用法		代行指示用法		合計
	この	その	この	その	
が	10(19.6%)	4(28.6%)	0(0%)	3(16.7%)	17(20%)
は	41(80.4%)	10(71.4%)	2(100%)	15(83.3%)	68(80%)
合計	51(100%)	14(100%)	2(100%)	18(100%)	85(100%)

（表2）に示したとおり、指定指示用法と代行指示用法の用例における指示詞「この / その」の出現様相には特徴が見られる。全体の傾向としては、指定指示用法の用例数が多い。さらに、指示詞「この」は指定指示用法において選択されやすく、代行指示用法の場合には「その」が選択されやすい傾向も確認できる。またいずれの用法も「が」よりも「は」が選択されやすい。

（傾向）用例数：指定指示用法**65例**＞代行指示用法20例

指示詞「この」：指定指示用法**51例**＞代行指示用法2例

指示詞「その」：指定指示用法14例＜代行指示用法**18例**

指定指示用法における「は / が」用例数：「**は**」**51例**＞「が」14例

代行指示用法における「は / が」用例数：「**は**」**17例**＞「が」3例

以上、全体の傾向を捉えたところで、本稿においては(1)～(4)のような用例を指定指示用法用例、また(5)～(7)を代行指示用法用例として区別し、各用法における名詞句の振る舞いと「は / が」の出現傾向について、以下で考察をすすめる¹⁸。まず、3節において指定指示用法の用例について簡単に確認し、第4節で代行指示用法の用例を考察する。

¹⁷ 庵功雄(2002)に拠る。指定指示とは「『この / その + NP』全体で先行詞と照応するもの」で、代行指示とは「『こ / そ』部分だけが先行詞と照応するもの」である。

¹⁸ 指示詞の文脈指示用法における「この / その」についての論考は様々見られるが、代行指示用法「この / その」と「は / が」との関係に着目して考察されたものは、管見の限りではみられない。

3. 指定指示用法の用例

(表 2) で示した内容について、指定指示用法のみを取り出し (表 3) に示す。

(表 3)

指定指示用法			
	この	その	合計
が	10(71.4%)	4(28.6%)	14(100%)
は	41(80.4%)	10(19.6%)	51(100%)
合計	51(78.5%)	14(21.5%)	65(100%)

(傾向) 用例数 : 「この」 **51例** > 「その」 14例

「は」 **51例** > 「が」 14例

指示詞「この」: 「は」 **41例** > 「が」 10例

指示詞「その」: 「は」 **10例** > 「が」 4例

指示詞「この / その」による指定指示用法は「{この / その}N」全体で先行名詞句を指示するようなものである。指定指示用法の (8) では、先行名詞句「イタリア」を後続文の「そのイタリア」全体が指示する。

(8)¹⁹ 財政赤字で世界の二大超大国である日本とイタリア。【そのイタリア **は**】予想

先行名詞句

名詞句 N

以上にいま財政改革のあらしの渦中にあった。

第 2 章では「{この / その}N{は / が}述語」文における指定指示用法の用例のみを考察対象とし、名詞句の振る舞い²⁰に注目することによって指示詞「この / その」と「は /

¹⁹ 本用例は『毎日新聞データ ‘97 データファイル』より引用。

²⁰ 以下、本章における名詞句の意味範疇（「固有名詞」以外）の認定は、便宜上、益岡・田窪 (2003) に拠る。「人名詞」「物名詞」「事態名詞」「場所名詞」「方向名詞」「時間名詞」はそれぞれ「ひと」「もの」「こと」「ところ」「ほう」「とき」という名詞によって代表される。

が」の出現傾向について検討した。以下、第2章で明らかとなった点について、簡潔に確認しておく。

3.1 名詞句の性質と「は / が」出現傾向についての考察

まず、先行名詞句、名詞句 N それぞれの意味範疇と意味属性関係について注目した。ここでは名詞句の意味範疇として「固有名詞」「人名詞」「物名詞」「事態名詞」「場所名詞」「時間名詞」「数量名詞」を設定し用例考察を行なった。その際、「固有名詞」と指示詞「この / その」の出現様相が特徴的であったことから、特に「固有名詞」を含む用例に注目し、指示詞「この / その」と「は / が」の考察を行なった。また名詞句の意味属性関係について、先行名詞句と名詞句 N の関係を分類学的観点から捉えた。例えば、先にあげた (1) であれば、先行名詞句「維新からわずか30年足らずで欧米列強の仲間入りを果たしていた」は後続文における名詞句 N に対して「下位」であり、名詞句 N 「急激な発展」は「上位」となり、名詞句間の意味属性関係は「下位上位」関係と捉えることができる。また、(3) の場合は先行名詞句「和田誠」と後続文の名詞句 N 「和田誠」は「同位」関係として捉えることができる。以下、用例を再掲する。

- (1) 時代は司馬遼太郎が「坂の上の雲」で描いた明治の隆盛期。維新からわずか30年足らずで欧米列強の仲間入りを果たしていた。【この急激な発展が】深刻な問題を引き起こしかねなかった。
- (3) 山藤章二と和田誠といえ、わが国似顔絵界(?)の双璧をなす存在として並び称されてきたが、そんなふう二人をいくりにすることにためらいを覚えることがある。(中略)【その和田誠が】ついさきごろ、『似顔絵物語』をまとめた。

上記のように、名詞句をいわば言語からは独立した分類学(タクソノミー)的な階層関係によって分類し、その系統樹を捉えて名詞句間の関係性を考察した²¹。

このように「{この / その}N{は / が}P」文とその先行文脈を対象として、指定指示用法における指示詞「この / その」と「は / が」について考察を行なった。その結果、指示詞「この」は、(1)のように特に先行名詞句と名詞句 N 間で言い換えが起こる場合、つま

²¹ なお、名詞句間の関係は「上位下位」関係の場合も存在する。

り先行名詞句≠名詞句Nの場合に選択されやすい傾向がみられた。そして、用例数の出現傾向から、用例数が最多である「このNは」型類型が、タクソノミーに基づく「下位上位」関係に支えられた定型の類型であると述べた。一方で、「そのNが」型類型は「このNは」型類型の対極に位置すると捉えることができ、用例数が最も少ない特殊な類型であると指摘した。また、指示詞「その」が付与されるものは(3)(8)のように「先行名詞句・名詞句N共に固有名詞」の用例群に偏り、この用例群においては「そのNは」型類型の用例数が多い傾向も見られた。このような点から、先行名詞句、名詞句N共に固有名詞である場合、つまり名詞句間の関係が「同位」関係の用例群では、「そのNは」型類型が定型であるとした。

(8) 財政赤字で世界の二大超大国である日本とイタリア。【そのイタリアは】予想以上にいま財政改革のあらしの渦中であつた。

また先述のとおり、第2章では先行名詞句と名詞句N間で言い換えが起こる場合(先行名詞句≠名詞句N)には、指示詞「この」によって両名詞句が同定される傾向があるということを示した。このような考察結果より、指示詞「この」は、先行名詞句≠名詞句Nである両名詞句を結びつけるものであるということから、名詞句を同定するその判断の際に各名詞句が含まれる文に依存する度合いが低いと捉えた²²。一方で、先行名詞句・名詞句N共に固有名詞で、同位関係の用例に偏る指示詞「その」は、指示詞「この」と比較して先行名詞句と名詞句N一致の際に、各名詞句が含まれる文に対する依存度が高いと捉えられるとした²³。

このように、第2章における指定指示用法を対象とした考察では、名詞句の意味属性関係、なかでも「同位」関係となる固有名詞との関わりに注目して「は/が」の出現様相を考察した。では、代行指示用法の用例はどうだろうか。以下で確認しよう。

4. 代行指示用法の用例

²² この点と関連して、金水敏(1999)には「コ系列」の指示詞について「その指示の値は確定的・唯一的であり、発話に先だつて指示対象の存在が非言語的に決定されている」という指摘がみられる。これは指示詞「この」は「文脈依存度が低い」とする本稿の指摘とおよそ一致するものと考えられる。

²³ 金水(1999)は指示詞の「ソ系列」について「指示の値は言語的文脈に依存」と指摘する。これは本稿での指摘と共通する認識であると考えられる。

代行指示用法の用例は、次のようなものである。

- (7) 九回裏、2ー2の同点に追いつかれ、なお1死一、三塁のピンチで、松坂の投じた初球は痛恨の暴投となり、サヨナラ負けした。「この負けを教訓にピッチングが変わった」という、唯一の敗戦が「平成の怪物」とまで言わしめた松坂の原点だった。【その後**は**】、史上初の高校3冠（甲子園春・夏、国体）を達成、チーム公式戦44連勝の不敗神話を築き上げた。」

(7) は「その後」全体で先行名詞句「唯一の敗戦」を受けるのではなく、「その後」の指示詞「そ」部分で「唯一の敗戦」を受けると考えることができ、「唯一の敗戦の後」となるものである。(表2)から代行指示用法の箇所のみ取り出し(表4)に示す。

(表4)

代行指示用法			
	この	その	合計
が	0(0%)	3(100%)	3(100%)
は	2(11.8%)	15(88.2%)	17(100%)
合計	2(10%)	18(90%)	20(100%)

(傾向) 用例数：「この」2例<「その」**18例**

「は」**17例**>「が」3例

指示詞「この」:「は」**2例**>「が」0例

指示詞「その」:「は」**15例**>「が」3例

代行指示用法の場合、「そのNは」型類型が出現しやすく、それと対極的な類型が「このNが」型類型と捉えられる。では、次節においてそれぞれの類型についてみていこう。

4.1 「このN{は / が}」型類型

「このNが」型類型は0例、「このNは」型類型は2例みられるのみである。

- (5) ここがいわゆる黒い森である。最近では酸性雨による森林被害が全世界的に注目されてすっかり環境問題のシンボルとしての森になっているが、一見する限りは黒々としたモミ、ドイツトウヒの大木が延々と続いて、まさに「黒い森」と名付けた理由が一目で合点できるほどの風景である。案内されたのは、黒い森の真ただ中、フライブルク市にほど近いティティ湖のほとりのホテルだった。【この付近は】かつてゲテが散策したり、ウィーンのハプスブルク家からフランス王朝に嫁ぐマリー・アントワネットが馬車の交換のために立ち寄った場所などがあって、まるで昔の箱根・芦ノ湖畔のような静かなたたずまいの中に歴史がいぶく森である。
- (9) 箱根・仙石原のレストラン&温泉「南甫園」の駐車場にそびえるブナの木に四つもへばりついているのを見つけた。支配人の富岡誠一さんは「【このあたりは】原生林の保存地区でうちのブナも含めて保護されている。このヤドリギはもう15、16年たっていますね」という。

‘(5) 先行名詞句：「黒い森の真ただ中、フライブルク市にほど近いティティ湖のほとりのホテル」 [場所名詞]

名詞句N：「付近」 [場所名詞]

‘(9) 先行名詞句：「箱根・千石原」 [場所名詞]

名詞句N：「あたり」 [場所名詞]

(5)(9) とも指示詞「こ」部分で先行名詞句を受けるもので、先行名詞句、名詞句Nともに場所名詞である。(5) はあたかも書き手が湖のほとりに立って、案内されたホテル付近についての解説をしているような用例であり、現場指示²⁴に近い。(9) は「このあたり」がどのような地区であるのかを説明する支配人の話として示された文で、これもまた文脈指示というより現場指示的であると捉えることができよう。

本稿における代行指示用法の「このNは」型類型は「この付近は」「このあたりは」の

²⁴ 現場指示は「指されるもの（指示対象）が発話の現場に存在する用法」である。また文脈指示は「指示対象が会話や文章の中にある用法」のことである。いずれも庵（2001）に倣う。

ように、ある限られた表現²⁵に用いられやすい。またこの場合、「付近」「あたり」と述べ示すだけでは、「どの付近」「どのあたり」であるのか判然としない点からも、指示詞の付与が必須となろう。「この付近」「このあたり」は、いずれも「このN」によって指示対象そのものの極めて限られた狭い範囲を指示するというより、先行名詞句で示された対象を基準としながら大まかな範囲を把握して指示するものであり、その上で解説や説明をするような側面をもつ文となりやすい。

以上より、指示詞の代行指示用法において、一見すると文脈指示であっても現場指示的な用法に近い場合には、ある範囲を漠然と示すような名詞句が名詞句Nにみられ、またその際には指示詞「この」が選択されやすい傾向があると考えられよう²⁶。

4.2 「そのN{は / が}」型類型

「そのNが」型類型は3例、「そのNは」型類型は15例取り出すことができた。以下、各類型の用例をみていこう。

4.2.1 「そのNが」型類型

(10) 一方、EUにしても、米国や日本などの旧西側諸国と比べると 関係構築が遅れていた中国に接近したいという思いは、この数年、徐々に高まってきていた。【その糸口
が] 英国から中国に返還された香港だ。

(11) 映画「タイタニック」のローズは、今一つダイコンだったが、この 「証言集」ビデオに登場する「本物のローズ」たちの話は重さが違う。

元はアメリカ・CBSのドキュメンタリー（1997年制作）。画面の美しさはCGでは映画に負けるが、当時の写真、ドキュメント、新聞、記録フィルムなど「オリジナル」資料が満載。乗船シーン、スミス船長の動く姿など、その後の事を考えると胸が

²⁵ 用例調査によって確認された「この付近」「このあたり（辺り）」などのように、対象を漠然と指示するような指示表現も興味深い。金水（1999）には「曖昧指示のソ」について以下のような指摘がある。金水は「曖昧指示にソ系列が用いられる理由」として「ソ系列が言語外世界に確定的な値をあらかじめ持たない、ということに他ならない」と述べ、「コ系列やア系列に変えると、必ず特定の場所と結び付けた解釈が生じ、曖昧指示とはならない」とする。

²⁶ 金水（1999）には以下のような指摘があり、本稿における筆者の指摘を裏打ちするものであろう。「コ系列の文脈照応用法は、言語表現を指示対象の代表物として取扱い、あたかも対象が眼前にあるかのように指し示す」。

詰まる。そして、数人の「ローズ」が、1912年4月14日の「その時」のショッキングな情景を思い出し、声を詰まらせながら語っていく。【 そのほとんどが】映画のエピソードに使われている。

〔10〕先行名詞句：「接近（すること）」〔事態名詞〕

名詞句 N：「糸口」〔事態名詞〕

〔11〕先行名詞句：「～『本物のローズ』たちの話」〔物名詞〕

名詞句 N：「ほとんど²⁷」〔数量名詞²⁸〕

上記 (10)(11) のほか (6) も「その N が」型類型である。

〔6〕先行名詞句：「モール以外の新戦術」〔物名詞〕

名詞句 N：「キーワード」〔物名詞〕

各用例における名詞句を考察すると、先行名詞句と名詞句 N が同一の名詞句である用例は見られない。さらに、各名詞句の意味範疇を確認すると、3 用例中 2 用例の先行名詞句と名詞句 N が同一意味範疇であった。また、各用例の名詞句 N のいずれにおいても指示詞「その」が付与されることではじめて「何の糸口か」「どのほとんどか」「何のキーワードか」が明らかとなる類いの名詞句であることが確認できる。指示詞が付与されることで指示物が明確となるこのような名詞句については、後で改めて取り上げて考察する。

4.2.2 「その N は」型類型

(12) 教育もみんなが同じ型の人間を目指す発展途上対応型から、成熟社会対応型に向けて切り替える時期に来ている。切り替えが狙い通り進めば、日本の教育史の極めて重要なターニングポイントになるだろう。そして、【その成否は】旧来の教育の支柱である入試制度改革にかかっている。

²⁷ 益岡・田窪 (1992) によれば「ほとんど」は「量の副詞」として「ほとんど全員」「ほとんど全部」などのように数量を表す名詞を修飾する用法として捉える場合と、「集まった人のほとんどは、礼服を着ていた」のように名詞として捉える場合がある。よって本稿では数量名詞として扱った。

²⁸ 「数量名詞」には「名詞単独で数量を表すもの」（大勢、少数、いくらか等）と「『数の名詞＋助数辞』や『指示詞＋「ほど」、「くらい』』等のように、接尾辞や接尾辞的な語と組み合わせて初めて、数量名詞になるもの」（個、匹、本、どのくらい、等）があるとされる。（益岡・田窪 (1992)）

(13) 作曲家の松村禎三氏は今年、古希を迎える。【その一歩一歩、一作品一作品は】非常に重い。十年単位の歳月をかけて作品を熟成させることも珍しくない。氏の生き方と作品とのかかわりを聞いた。

(14) 競馬界の連勝記録に挑戦している1頭の地方馬が、静かに復活の日を待っている。
【その名は】ドージマファイター（足利・手塚佳彦きゅう舎）。中央競馬で1勝もできずに、地方競馬に“都落ち”した馬だ。

^(12)先行名詞句：「切り替え」〔事態名詞〕

名詞句N：「成否」〔事態名詞〕

^(13)先行名詞句：「松村禎三氏」〔固有名詞（人名）〕

名詞句N：「一歩一歩、一作品一作品」〔物名詞〕

^(14)先行名詞句：「競馬界の連勝記録に挑戦している1頭の地方馬」〔物名詞〕

名詞句N：「名」〔物名詞〕

(12)～(14)の「そのNは」型類型についても、先行名詞句と名詞句Nが同一の名詞句である用例はみられない。さらに、名詞句の意味範疇を確認すると、15用例中4用例のみ同一意味範疇として捉えることができた。先行名詞句と名詞句Nの意味範疇一致率は先に示した「そのNが」型類型より低い。また、名詞句Nにみられる「成否」「一歩一歩、一作品一作品」「名」のいずれの名詞句も、指示詞「その」が付与されることではじめて「何の成否か」「何の一歩一歩、一作品一作品か」「何の名か」が確定し、指示詞付与は必須であることが確認できる。「そのNが」型類型でも同様の指摘をしたが、このような名詞句の性質については以下で改めて考察する。

“(12) 教育もみんなが同じ型の人間を目指す発展途上対応型から、成熟社会対応型に向けて切り替える時期に来ている。切り替えが狙い通り進めば、日本の教育史の極めて重要なターニングポイントになるだろう。そして、【{ その成否/*成否 }は】旧来の教育の支柱である入試制度改革にかかっている。

4.3 代行指示用法における定型類型

4.1 節では、代行指示用法の文脈指示用法ではあっても現場指示的用法であると捉えられる場合((5)(9))には「この」が選択される傾向があると指摘した。また 4.2 節に挙げた用例はいずれも、指示詞「その」が文脈指示であると確認できた。代行指示用法の用例全体を見ると、「そのN{は / が }」型類型は「このN{は / が }」型類型より用例数が多い。よって、このような点から、代行指示用法において文脈指示用法であれば指示詞「その」が選択されることがデフォルトであると考えられよう。また、代行指示用法の場合には、指示詞「この / その」に共通して「は」が選択されやすい傾向がみられる。

「そのN{は / が }」型類型：18例 > 「このN{は / が }」型類型:2例

指示詞「この」:「が」0例 < 「は」2例

指示詞「その」:「が」3例 < 「は」15例

以上より、本稿における代行指示用法用例の範囲においては「その N は」型類型が最も定型の類型であると捉えられよう。では、一方で「その N が」型類型についてはどのように考えられるだろうか。

4.4 「その N が」型類型の特殊性

代行指示用法において「その N は」型類型が定型類型であるならば、「は」ではなく「が」が選択される「その N が」型類型は、いわば、定型からは外れるものである。「その N が」型類型 (6)(10)(11) における各名詞句の意味範疇をここで改めて確認しておこう。

⑥ 先行名詞句：「モール以外の新戦術」 [物名詞]

名詞句 N：「キーワード」 [物名詞]

⑩ 先行名詞句：「接近 (すること)」 [事態名詞]

名詞句 N：「糸口」 [事態名詞]

⑪ 先行名詞句：「～『本物のローズ』たちの話」 [物名詞]

名詞句 N：「ほとんど」 [数量名詞]

(6) は共に「物名詞」、(10) は「事態名詞」と捉えることができ、3 用例中 2 用例の先

先行名詞句と名詞句 N の意味範疇が同一であった。先に確認した代行指示用法における「その N は」型類型全15用例の先行名詞句と名詞句 N の意味範疇は、4 用例が同一のものとして確認できた（「物名詞」2 例、「事態名詞」1 例、「時間名詞」1 例）。

このような考察結果より、先行名詞句と名詞句 N の意味範疇が同一である用例の出現率の高さの点において、「その N が」型類型は注目に値する類型である。よってここから、代行指示用法「その N」で先行名詞句と名詞句 N の意味範疇が同一である場合には、「その N が」型類型が定型になりやすい傾向を見いだすことができる²⁹。また、この点と関わって、第2章では指定指示用法における「その N が」型類型についてその特殊性をすでに指摘している³⁰。以上より、指定指示用法、代行指示用法いずれの場合にも共通して「その N が」型類型は特殊な類型として捉えられよう。

4.5 先行名詞句と名詞句 N についての考察

上記 (5) ~ (7)、(9)~(14) についてみると、本稿における代行指示用法の用例では先行名詞句と名詞句 N が同一意味範疇の名詞句である場合はあっても、同一名詞句の場合はみられないことが確認できた。

- (10) 一方、EUにしても、米国や日本などの旧西側諸国と比べると 関係構築が遅れていた中国に接近したいという思いは、この数年、徐々に高まってきていた。【その糸口 **が**】英国から中国に返還された香港だ。

先行名詞句：「関係構築が遅れていた中国に接近（すること）」 [事態名詞]

名詞句 N：「糸口」 [事態名詞]

(10) は「先行名詞句」≠「名詞句 N」であり、また両名詞句の意味属性関係を考えると、「関係構築が遅れていた中国に接近（すること）」は「糸口」の「上位」でもなく、また「糸口」が「関係構築が遅れていた中国に接近（すること）」の「上位」であるとも捉えられない。よって、先行名詞句「関係構築が～接近」と名詞句 N「糸口」の相互関係を、

²⁹ 代行指示用法の「その N{は / が}」型類型についてのこのような傾向は、非常に限られた用例数において見いだされたものではあるが、名詞句の性質が「は / が」の選択要因に関わるということを確認できたという点で有意義なものであろう。

³⁰ 指定指示用法においては「その N は」型類型が「下位上位」の意味属性関係に支えられた、最も定型の類型であった。

指定指示用法の用例と同様に、名詞句の意味属性関係から捉えることは困難である。すると、それとは異なる観点から兩名詞句の関係を捉える必要がある。では、ここで(10)における名詞句についてさらに考察してみよう。

(10)において指示詞が付与されずに「糸口」と示されただけでは「糸口」が指示する対象は明確ではない。よって、「その糸口」のように、名詞句Nに指示詞が付与されることで先行文脈中から最もふさわしい指示対象が検索され、「何の糸口か」が明らかとなる。そこではじめて「糸口」とはすなわち「関係構築が遅れていた中国に接近すること」の「糸口（物事の手がかりや端緒を示すもの）」であると理解される。つまり、先行名詞句はいわば名詞句Nの外延を定めるような名詞句であると捉えることができる。そして、外延を定める先行名詞句と名詞句Nを結びつけ、名詞句Nの外延を定めることにおいて、指示詞「この / その」は不可欠である。代行指示用法のいずれの用例においても指示詞「この / その」の省略は許容されないことから、この点は裏打ちされよう。上記(10)以外の代行指示用法の用例においてもおおよそこのように捉えることができる。

さてここで、先に示した用例における名詞句Nのように、指示詞「この / その」を要求する名詞句について考察する際には、西山佑司(2003)が参考になる。

西山(2003)では「Xの」を必須とするタイプの名詞句は「非飽和名詞句」とされ、「『Xの』というパラメータの値が定まらないかぎり、それ単独では外延(extension)を決めることができず、意味的に充足していない名詞」であると指摘されている。「非飽和名詞句」という観点から、本稿で考察対象としている用例にみられる名詞句Nを考察すると、代行指示用法における名詞句Nはいわば西山(2003)の言うところの「非飽和名詞句」として捉えることができる。先に示したように、代行指示用法における名詞句Nは指示詞「この / その」の省略が困難である。

“(10) 一方、EUにしても、米国や日本などの旧西側諸国と比べると 関係構築が遅れていた中国に接近したいという思いは、この数年、徐々に高まってきていた。【{ その糸口 / *糸口 } が】 英国から中国に返還された香港だ。

さらに、西山(2003)では「NP₁のNP₂」について「個々のNP₂は、それが要求する可能

なパラメータ X に対して意味的な制約を課している」と指摘されている³¹。(10)であれば「その糸口」が求める指示対象は、名詞句 N「糸口」という物事の手がかりや端緒を意味する名詞句によって制約を課されているとみることができよう。このような名詞句の振る舞いにより、「その糸口」は「関係構築が遅れていた中国に接近することの糸口」として限定される。西山(2003)のこの指摘は、まさしく代行指示用法の先行名詞句と名詞句 N との関係に当てはまる。よって、代行指示用法における先行名詞句と名詞句 N の関係は、指定指示用法に見られたような名詞句間のタクソノミー的な関係として捉えるよりも、先行名詞句が名詞句 N の「外延」を定める関係として捉えることができる。また、名詞句 N は、西山(2003)のいう「意味的な制約」を先行名詞句にかける機能を持つものとして捉えることが妥当であろう。

さらに指示詞に関してもその振る舞いの点で、代行指示用法と指定指示用法における相違点を見いだすことができる。先にも指摘したように、代行指示用法における指示詞「この / その」の役割は名詞句 N の外延を定める際、名詞句 N とその外延を定める先行名詞句を結びつけることにある。しかし、指定指示用法における指示詞「この / その」は名詞句 N の外延を定める際の一端を担うわけではなく、先行名詞句と名詞句 N を一致させるということを主要な役割として担っていると考えられる。指定指示用法の (1) を再掲する。

- (1) 時代は司馬遼太郎が「坂の上の雲」で描いた明治の隆盛期。維新からわずか30年足らずで欧米列強の仲間入りを果たしていた。【この急激な発展が】深刻な問題を引き起こしかねなかった。

(1) のような場合、先行名詞句は名詞句 N の外延を定めるわけではなく、「維新からわずか30年足らずで欧米列強の仲間入り」＝「急激な発展」であるという名詞句間関係を示すものである。

以上、代行指示用法における先行名詞句と名詞句 N それぞれの性質と、名詞句間関係、また指示詞の振る舞いを考察した。考察の結果、指定指示用法における名詞句間関係と「は / が」出現傾向は分類学(タクソノミー)的な関係によって支えられたものであると捉えられ、その一方で、代行指示用法における名詞句間関係と「は / が」の出現傾向は、

³¹ 西山(2003)によれば「NP₁のNP₂」において、例えば「NP₂」が「主役」であれば「パラメータ X に入りうるものは芝居、映画の類い」に限られ、「作者」であれば「本や論文」、「司会者」であれば「会合」の類いに限られる。

名詞句の意味範疇や非飽和名詞句である名詞句 N の性質によるものとして捉えることができることを示した。

6. おわりに

本章では、主に代行指示用法の「{この/その}N{は/が}P」文を考察対象とし、指示詞「この/その」による名詞句指示の様相と、名詞句の性質、および名詞句間の関係に注目して「は/が」の出現傾向について考察を行なった。以下、本章において確認できた点を示す。

- 1) 代行指示用法の用例では「その N は」型類型が出現しやすく、代行指示用法の用例における定型の類型であると考えられる。また指示詞「この/その」いずれの場合も「は」が選択されやすい。
- 2) 文脈指示の代行指示用法には「現場指示的」なものがある。その際、名詞句 N にはある範囲を漠然と示すような名詞句がくる場合が多く、「この N は」型類型が選択されやすい。
- 3) 代行指示用法においては「その N は」型類型が定型類型である。しかし、先行名詞句と名詞句 N が同一意味範疇である場合には「その N が」型類型の出現率が高くなり、そのような点からもこの類型は特殊性をもつ。よって、代行指示用法で先行名詞句と名詞句 N の意味範疇が同一である場合には、「その N が」型類型が定型であると考えられる。
- 4) 代行指示用法における先行名詞句と名詞句 N の関係は、先行名詞句が名詞句 N の「外延」を定めると同時に、名詞句 N が先行名詞句に対して「意味的な制約」を課すようなものとして捉えることができる。これは代行指示用法にみられる名詞句 N がいわゆる非飽和名詞句であることに拠るもので、言語とは独立した分類学（タクソノミー）的階層関係によって支えられた指定指示用法の様相とは異なる。
- 5) 代行指示用法における指示詞の役割は、先行名詞句と名詞句 N を一致させることというよりも、名詞句 N の外延を定める際に、名詞句 N とその名詞句 N の外延を定める先行名詞句を結びつけることにある。一方で、指定指示用法における指示詞の主たる役割は、先行名詞句と名詞句 N を一致させて示すことである。

本章では指示詞と名詞句の振る舞いに注目し、「は / が」の出現傾向を考察した。その結果、指示詞「この / その」による文脈指示用法が指定指示用法であるか、代行指示用法であるかによって、先行名詞句と名詞句 N の関係や、「は / が」の出現傾向について相違がみられることを確認できた。また、ここで得られた成果は連文レベルでの用例の考察によって明らかとなったもので、単文レベルでの分析では明らかにし得なかったものである。以上より、本稿において確認された内容は「は / が」についての研究、ならびに名詞句研究や指示詞研究に対しても有意義な示唆を与えるものであると考える。

引用・参考文献

- ・庵功雄 (1997) 「『は』と『が』の選択に関わる一要因一定情報名詞句のマーカの選択要因との相関からの考察一」 (『国語学』 188 集)
- ・庵功雄 (2002) 「『この』と『その』の文脈指示用法再考」 (一橋大学留学生センター紀要)
- ・庵功雄 (2001) 『新しい日本語入門 ことばのしくみを考える』 (スリーエーネットワーク)
- ・織田稔 (1994) 『直示と記述同定—英語固有名の研究—』 (風間書房)
- ・金水敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」 (『自然言語処理』 6 (4))
- ・長澤理恵 (2008) 「{この / その}N{は / が}P」文における「は / が」に関する一考察—指示詞「この / その」と名詞句の性質との相関—」 (『名古屋大学国語国文学会 第 101 号』名古屋大学国語国文学会)
- ・西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』 (ひつじ書房)
- ・益岡隆志・田窪行則 (2003) 『基礎日本語文法—改定版—』 (くろしお出版)

用例データ出典

- ・毎日新聞 (1998) 『毎日新聞データ ‘97 データファイル』
- ・毎日新聞 (2000) 『毎日新聞データ ‘99 データファイル』

第4章

抽象的意味を表す名詞句と指示詞「この/その」との相関関係

— 「{この/その}システム」文からの考察—

0. はじめに

これまでも述べてきている通り、新聞・雑誌記事に頻出する「{この/その}N{は/が}述語」文は、これまでテキストの結束性構造や「は/が」の選択要因を課題とする論考で取り上げられてきており³²、筆者もこの構文に注目する論考の中で、指示詞と「は/が」の選択において名詞句Nの性質が大きな条件となることを考察してきている。本章においても引き続き名詞句の振る舞いに注目する。なかでも、本章で注目する名詞「システム」は、「タイプ」「バランス」「ケース」「トラブル」などと同様に「抽象的な意味を表す外来語」とされる。金愛蘭(2006)では新聞記事にみられる外来語「トラブル」の「基本語化」の背景について論じ、外来語「トラブル」は「類義語に対する上位語の位置」に立つことによって、意味を「概略的に」示す「それまでの新聞語彙にはなかった基本語」として成立したなど、興味深い振る舞いをみせる名詞句である。前章までにおいても「{この/その}N{は/が}述語」文における名詞句の性質に注目し、名詞句Nと先行名詞句との関係について考察している。たとえば、次のような点をすでに確認し、指摘している。

- ・ 先行名詞句と名詞句Nの意味属性関係が「下位上位」関係にあり、指示詞が指定指示用法の場合、名詞句Nに付与される指示詞は「この」に偏りやすい。また先行名詞句と名詞句Nが「同位」関係にある場合には付与される名詞句が指示詞「その」に偏る。以上の点は、先行名詞句と名詞句Nの分類学的な階層関係から説明可能である。
- ・ 名詞句Nが「Xの」を必須とする「非飽和名詞句」³³の場合には指示詞付与が必須

³² 庵功雄(1997)など。

³³ 西山佑司(2003)。「Xの」を必須とするタイプの名詞句で、「『Xの』というパラメータの値が定まらないかぎり、それ単独では外延(extension)を決めることができず、意味的に充足していない名詞」である。

であり、指示詞が代行指示用法³⁴の場合、先行名詞句は名詞句Nの「外延」を定める。同時に名詞句Nは、先行名詞句に対して「意味的な制約」をかける機能を持つものであると捉えることができる。また、名詞句Nに付与される指示詞は「この」よりも「その」に偏る傾向が確認できる。

名詞句間の関係を見るにあたって、特に名詞句の階層関係に注目する点は、金(2006)とも共通する。そこで、これまで筆者が関心を持ってきた以上の点を踏まえ、本章では管見の限り未だ詳細な考察が行なわれていない、抽象的な意味を表す名詞「システム」が含まれる用例を対象とし、名詞「システム」について「類義語に対する上位語」としての性質を認めるという金(2006)の指摘に注目して考察する。例えば(1)のような用例を考察の対象とする。

(1)³⁵市長選の結果はほんの小さな記事でしか報道されませんでした、その意味するところは極めて重大だと私は思いました。少なくとも市を名乗る所で無投票など許されることではないと思います。投票は「民主主義」の基本だからです。[この/#
φ] システムが定着するためにどれだけの先人の苦労があったのか。

(1)は「投票」について、指示詞「この」が付与された「このシステム」と捉える代行指示用法の用例と考えられる。指示詞が代行指示用法の場合には「そのNは」型が定型であると指摘した第3章³⁶では1例も見られなかった「このNが」型の類型であるという点で、(1)は特徴的である。このように、用例を指示用法別にみるなかで、「{この/その}名詞句」において特徴的な振る舞いをみせる名詞「システム」に注目し、名詞句の性質が指示詞の選択様相や指示詞付与に関わることを示す。

³⁴指示詞「この/その」による文脈指示には「{この/その}N」全体で先行名詞句を指示する場合と、指示詞「この/その」の「こ/そ」部分で先行名詞句を指示する場合とがある。前者がいわゆる指示詞の「指定指示」用法、後者が「代行指示」用法といわれ、それぞれ区別して捉えることができる。詳しくは第3章を参照のこと。

³⁵本稿における用例の下線・網掛け・囲みなどはすべて筆者による。

³⁶第3章では指示詞の代行指示用法の用例を考察対象とした。対象とした全用例いずれも先行名詞句と名詞句Nが同一名詞句ではない。

1. 用例の検索

本稿で考察対象とする用例は「{この/その}システム」部分を含むもの³⁷である。また、用例数を絞るにあたり、便宜上、2008年1年分のデータを調査した(表1)。その結果、「このシステム」用例は131例、「そのシステム」用例は9例であった。この結果から、名詞「システム」は指示詞「この」と共起しやすい傾向があることが分かる。

(表1) 「[この/その]システム」型用例 分布

この	131例	指定指示	117例	この	先行名詞句に名詞 「システム」句	含む	85例
		代行指示	14例			含まない	46例
その	9例	指定指示	7例	その		含む	5例
		代行指示	2例			含まない	4例

各指示詞を用法別に示すと、「指定指示用法」用例が「代行指示用法」用例より多い。また代行指示用法と判断される用例では先行名詞句に名詞「システム」は出現しないことが、以下で用例を検討する中で明らかとなる。以下「そのシステム」型、「このシステム」型用例について順に考察を進める。

2. 用例の考察

2.1 【そのシステム】型用例

「そのシステム」型用例は9例で、9例中7例は「指定指示用法」である。「指定指示用法」の場合、「そのシステム」を含む文の前文に先行名詞句にあたる名詞句が含まれる。一方、その他2例は「代行指示用法」で、先行名詞句と先行名詞句を指示する「そのシステム」部分が共に同一文中に含まれる。また、先行名詞句に名詞「システム」は見られない。以下、「指定指示用法」用例と「代行指示用法」用例を2例ずつ挙げる。先行名詞句は太下線、「そのシステム」部分を含む文は網掛けにして示す。「このシステム」型用例について

³⁷本章における用例は、朝日新聞オンライン記事データベース『聞蔵Ⅱ』ビジュアルから取り出した。本データベースには1984年8月以降の3紙誌(『朝日新聞』『アエラ』『週刊朝日』)の記事データが収録されている。

も同様に示す。

- (2) 「現代世界の覇権的文明と[その]システム」に、アジアから否（ノン）を持続的に突きつけ、その変革の意思を持ち続ける」という姿勢がアジアの原理であり、それは具体的には、「殺し・殺される文明から共に生きる文明への転換」を求めている意思であると。[代行指示用法・（文明のシステム/体系）ヒト統括系のシステム]
- (3) 県発注工事をめぐる官製談合・汚職事件で、有罪判決が確定した木村良樹前知事が私的に使い、県秘書課で管理していた「裏金」の全容が19日、県の調査で明らかになった。約3887万円にのぼる裏金づくりには、県幹部が深く関与していた上、[その]システムは、談合と同様、木村前知事以前から県庁内で受け継がれていたという事実も浮かび上がった。[代行指示用法・（不正のシステム/仕組み）ヒト統括系のシステム]
- (4) 「大野くん、ちょっと」総務部長が呼んでいる。大野克己は立ちあがり部長の机の前に行く。（中略）「去年営業部が新しい会計システムを導入したんです。[その]システムに不具合があるっていうんで……」「そんなこと聞いてんじゃない」部長の声が少し大きくなる。「なんでオレの知らないところで勝手に物事が起こってんだよ」。半年前に大野は営業部から相談を受け、システムの改善方法と外部の業者からとった見積書を提出した。[指定指示用法・（会計のシステム/仕組み、方式）モノ統括系のシステム]
- (5) 自社のトラックのうち、30台に菜種廃食油のBDFを使用している。同ネットの会長を務め、自らの乗用車も100%の菜種BDFで走るという石田会長は「軽油と同じでは意味がない。減反で元気のない農家を励ましたかった」と、低コストの精製システムを開発した。（中略）町産業建設課では、[その]システムを試作し、学校給食センターから出る食用油やJA横浜町女性部が売り出している「菜の花ドーナツ」を揚げた菜種油などで精製。[指定指示用法・（精製のシステム/仕組み）モノ統括系のシステム]

各用例における名詞「システム」の意味用法をおおよそ「何が機能を持つか」を基準として分類すると、「プログラミング、機械、装置などを統括するためにつくられたシステム」

(会計のシステム、精製のシステム等) と、「人間の行動の指針となり、社会と関係するようなシステム」(文明のシステム、不正のシステム等) の2類に大きく分類できる。以降、前者を「モノ統括系のシステム」、後者を「ヒト統括系のシステム」と示す。

2.1.1 「そのシステム」型用例における名詞句指示の様相

2.1節において示した区分を用い「そのシステム」型用例をみると、9例中2例が「モノ統括系のシステム」で、いずれも「指定指示用法」用例である。その他の用例はすべて「ヒト統括系のシステム」である。全体の傾向としては「指定指示用法」「代行指示用法」いずれも「ヒト統括系のシステム」の出現率が高い。

(表3) 「そのシステム」型用例における名詞「システム」句の意味用法分布

指定指示用法(7例)	モノ統括系のシステム	2例
	ヒト統括系のシステム	5例
代行指示用法(2例)	モノ統括系のシステム	0例
	ヒト統括系のシステム	2例

また、名詞「システム」は、「仕組み」「体系」「方式」などによって言い換え可能である。それらは名詞「システム」を「上位」とするならば「下位」の階層の語であろう。名詞句を言語からは独立した分類学的な階層関係によってみると、名詞「システム」は「下位」の語を幅広く持つ名詞句であると捉えることができる。このように、下位語を複数持つという名詞句の性質が指示詞付与を左右する可能性がある。以下「このシステム」についても、名詞「システム」の意味用法、階層関係を考察する。

2.2 【このシステム】型用例

「このシステム」型用例は131例である。用例数が多いため、以下、議論を分かりやすくするために、先行名詞句に名詞「システム」が含まれるか否かで用例を大きく2つの型に分ける。先行名詞句に名詞「システム」が含まれない場合は46例、含まれる場合は85例である。

2.2.1 先行名詞句に名詞「システム」が含まれない場合

(6) 自動車の停止時にエンジンを止めるアイドリングストップ。地球温暖化の原因となる二酸化炭素を削減する有効な手段だが、エンジンの再始動に時間がかかったり、停止時の振動が大きかったりするのが難点。マツダが開発した「i-stop (アイ・ストップ)」はそうした点を改良し、よりスムーズに運転できるようにした。(中略) マツダのシステムではアクセルを踏むとすぐにエンジン内で爆発を起こす。(中略) マツダは来年、[この]システムを搭載した車を商品化して市場に投入する方針だ。

(6)は車に装備されたアイドリングストップシステム(モノ統括系のシステム)の記事で、先行名詞句を「このシステム」全体で指示する「指定指示用法」である。先行名詞句「i-stop (アイ・ストップ)」を「マツダのシステム」で指示し、「マツダが開発した『i-stop (アイ・ストップ)』」は「このシステム」と指示される。このように「(マツダが開発した)『i-stop (アイ・ストップ)』」・「マツダのシステム」・「このシステム」の順に語が換言される形で同一の「システム」(「i-stop」という仕組み)が指示され、上位語へと転換されていく様相が明らかである。ここにおいても名詞「システム」は、下位語(「i-stop」)を内包する上位語であるといえる。

(7)も、先行名詞句を「このシステム」全体で指示する「指定指示用法」の用例である。(6)と同様、下位語「ワンコイン(500円)血液検査」が名詞「システム」という上位語によって指示されている。

(7) 早朝のテレビに様々な街の情報を伝える番組がある。その日はとても興味深い話と思ったので、すぐメモを取った。内容は、若い医療関係者が考案したワンコイン(500円)血液検査である。(中略)ワンコインで血液検査が受けられるというのは魅力だ。病気の早期発見につながるかもしれない。[この]システムの拡大を期待している。

(6) (7)では先行名詞句に名詞「システム」が含まれない場合に指示対象となる先行名詞句を「このシステム」によって指示している。下位語である先行名詞句から名詞「システム」という上位語への言い換えが確認できる。

以上のように、上位語が多数の下位語を内包する場合、名詞「システム」によって指示

する対象が様々に想定されることになる。よって上位語である名詞「システム」の指示対象を特定するためには、名詞「システム」に対して指示詞「この」の付与が必須になると考えられる。

2.2.2 先行名詞句に名詞「システム」が含まれる場合

(8) ワルシャワ訪問中のライス米 국무長官と、シコルスキ・ポーランド外相は20日、東欧に計画するミサイル防衛(MD)システムの迎撃ミサイル基地をポーランドに設置する協定に調印した。(中略) [この]システムは21世紀の脅威への回答だ」と話した。

(9) 講義に対する質疑では、同社の空間除菌システムに話題が集中した。[この]システムの除菌剤は、グレープフルーツの種から抽出した天然物質。これを水で薄めて超微粒子にし、噴霧して殺菌する方法という。(中略) [この]システムは北京五輪が開かれる中国でも韓国の代理店を通じて導入される可能性があるという。

(8) (9)は先行名詞句「〇〇システム」を「このシステム」によって指示する「指定指示用法」用例である。(9)のように「このシステム」が含まれる文が連続して見られる場合などもある。いずれの用例においても指示詞「この」が付与され、指示詞を省略すると指示対象が曖昧なものとなる。2.2.1節でも指摘したように、指示詞が付与されるのは、(8) (9)の場合も上位語である名詞「システム」が多数の下位語を内包することが要因として考えられる。また、先行名詞句が「このシステム」で指示される様相にはいくつかのバリエーションがあり、本稿が考察対象とした用例では、以下[I]～[IV]のパターンが確認できる。

[I] 「〇〇システム」による先行名詞句指示型

(10) 新幹線の地震対策の中心は、この時間差を利用して沿線などの検知器 がまずP波をキャッチ、S波到達前に送電を止め、非常ブレーキをかける「早期地震検知システム」だ。震源までの距離が遠いほど、S波到達までの時間が稼げ、[この]システムは有効となる。しかし、P波とS波の時間差が少ない直下型地震の場合は一。(中略) 検知システムがP波をとらえて非常ブレーキが作動したが、時速

約200キロで走っていた「とき」はS波到達前に減速、停車できずに脱線。そのまま約1.6キロ進んだ。(中略) 検知システム開発を手がけた元鉄道総合技術研究所の中村豊さんは「早期検知には限界がある。地震対策はまず設備面の耐震補強が第一で、これに検知システムを組み合わせると初めて効果が出る」と指摘する。

- (11) コンピューターセキュリティーの専門家として知られる産業技術総合研究所の高木浩光主任研究員は、ネット通販の「楽天」が始めた 新しい広告システムを調べてみて、驚いた。「利用者が気づかぬうちに、プログラムがパソコンの情報を読み取っている」システムは同社も出資する広告サービス会社「ドリコム」が開発、楽天のポータルサイト「インフォシーク」と「楽天ブログ」で使われている。高木さんによると、この広告システムは、利用者の閲覧ソフト（ブラウザ）上で、あるプログラムを動かしている。(中略) 高木さんによれば、広告システムは「この欠陥を利用していた」。(中略) 楽天は[この]システムについて、「プライバシー保護には最大限の配慮をされており、個人情報や閲覧履歴を取得してはいない」とし、機能をオフにすることもできると説明している。

(10)は先行名詞句「早期地震検知システム」を「このシステム」で指示する「指定指示用法」用例である。また「早期地震検知システム」は「このシステム」以降の文において「検知システム」で換言されている。(10)は、以下で示す(12)と類似した形式だが、(12)は「このシステム」以降において先行名詞句が名詞「システム」によって単独で指示される。このように(10) (12)は「このシステム」による換言部分以降に出現する名詞「システム」に修飾成分が付くか否かの点で異なる。名詞「システム」に修飾成分が付与されないことに関しては(12)で改めて考察を行う。

(11)は先行名詞句「新しい広告システム」、つまり「『利用者が気づかぬうちに、プログラムがパソコンの情報を読み取っている』システム」を「このシステム」で指示する「指定指示用法」用例である。(10)と異なる点は「このシステム」で指示する前文において、先行名詞句を「この広告システム」と指示した上で「システム」自体に説明を加えていることである。また名詞「システム」すべてに修飾成分が付く点は(10)と同様である。

また、さらに(10) (11)の名詞句換言の様子に注目する。(10)は先行名詞句「早期

地震検知システム」・「このシステム」・「検知システム」の順に、(11)は先行名詞句「新しい広告システム」・「利用者が気づかぬうちに～システム」・「この広告システム」・「このシステム」の順に名詞句が換言されている。いずれにも共通しているのは、先行名詞句「〇〇システム」として示されたものを、後続文においても引き継いで「××システム」として示している点である。(10) (11)共に名詞「システム」の下位語に位置する名詞が「このシステム」より前部分にみられ、下位語から上位語への換言の様相が確認できる。この傾向はこれまで考察してきた用例とも一致する。

[II]名詞「システム」単独での先行名詞句指示型

(12) (略) 警察当局はひそかに、音波で人や船を感知できる「新兵器」を投入した。東京大生産技術研究所が日立製作所などと07年度に完成させた「水中セキュリティソーナーシステム」だ。実は、[この]システム開発の音頭をとっているのは文部科学省。(中略) システムは約15メートル先まで撮影が可能な音響ビデオカメラと半径500メートル以内をカバーする音響レーダーがある。(中略) システムは10月上旬、東京都内の見本市会場であった「テロ対策特殊装備展」でも紹介され注目を集めた。

(12)は先行名詞句「水中セキュリティソーナーシステム」を「このシステム」によって指示する「指定指示用法」用例である。「このシステム」が含まれる文以降において、先行名詞句「水中セキュリティソーナーシステム」は名詞「システム」単独で指示され、その上でセキュリティシステムについての説明がなされる。このように「水中セキュリティソーナーシステム」「このシステム」「システム」の順に換言されながら同一指示対象を指示する様子を確認できる。この際、名詞句はより上位語へと換言されているといえる。これまで考察してきた用例をみても分かるように、名詞「システム」は指示詞などを含め、何らかの修飾成分を伴うことが多い³⁸。(12)において名詞「システム」は単独で出現するが、いずれも段落の始めに見られるという特徴がある。これは文章冒頭部分で「水中セキュリティソーナーシステム」と示すことで文のトピックが明確になっているため、段落

³⁸名詞「システム」が修飾成分を伴わずに単独で出現するものが、用例全体でどの程度の割合で見られるのかについては未確認である。ただ、名詞「システム」が単独で出てくる場合は極めて少なく、たとえば、記事のタイトルや(12)のように段落の冒頭で見られやすい。

頭にある名詞「システム」は、指示詞付与せずともこのシステムを指示すると考えられる。また、次に示すような、取材に対するコメントの記事において指示詞が付与されない名詞「システム」が出現する場合もある。

(13) 電力使用見て孤独死防ごう システム開発、狛江市で実験 / 東京都

電流の変化で独り暮らしのお年寄りの安否を確認するシステムを、電力中央研究所（本部・千代田区）の狛江地区システム技術研究所が開発し、10月から市と共同で実証実験を始める。（中略）このシステムはテレビや照明、エアコンなどの電源を入れたり切ったりして生じる電流の変化に着目。起床して外出するまでと帰宅後は多くの電気器具を使うため電流変化量が大きくなる一方、外出中は変化量が小さくなることから、電気の使用状態を分析し在宅か留守かを推定する仕組み。（中略）地元・狛江市にある研究所で今回の安否確認システムが開発されたのを知った矢野裕市長が「孤独死防止に使えないか」と発案。（中略）電流の変化による見守りシステムを開発した電中研システム技術研究所上席研究員の中野幸夫さんは「カメラもセンサーもなく、普段通りの生活をしてシステムを意識せずに済む。気軽に使えると思う」と話す。

(13)は先行名詞句「電流の変化で～確認するシステム」を「このシステム」によって指示する。さらにまた先行名詞句は後に「安否確認システム」「見守りシステム」などの語に換言され同定される。記事最後部においては、名詞「システム」が単独で用いられ、先行名詞句を指示する。この場合、指示詞や修飾成分はないが同一文中に「見守りシステム」があることによって名詞「システム」の指示対象が明確になっていると考えられる。

また、「このシステム」を含む文の直後においてシステムの「仕組み」について述べられた一文「起床して～在宅か留守かを推定する仕組み」に注目したい。この一文は「電流の変化で～確認するシステム」の「仕組み」を示したもので、「起床して～在宅か留守かを推定する仕組み」の「仕組み」部分を上位語の名詞「システム」で言い換え、「起床して～在宅か留守かを推定するシステム」とすることは許容されるだろう。しかし、最後の一文「普段どおりの生活をしてシステムを意識せずに済む」を「普段どおりの生活をして仕組みを意識せずに済む」と換言することは困難である。これまでも指摘してきたように、名詞「システム」は「仕組み」「方式」「体系」などの下位語を幅広く内包する上位

語として捉えることができる。そのため、「仕組み」を「システム」と換言することは比較的容易となり、一方でその逆を取ることは難しくなる。また、本章において考察対象としている新聞記事では先行名詞句から「このシステム」、つまり上位語へと換言される場合がほとんどである。このような点からも名詞「システム」から「仕組み」へと換言されることが許容されにくいことが説明できるだろう。

上で示してきた用例はいずれも「このシステム」を含む文より前において先行名詞句が示されるもので、先行名詞句から「このシステム」へと言い換えられることが多い。次の用例は先行名詞句が先に提示されない場合である。これは「そのシステム」型用例においては見られない。

[Ⅲ]指示対象後置型

(14) 日本を代表する酪農地帯、十勝地方。(中略) そのうちの一軒、鈴木牧場は他の酪農場とはちょっと違う。6カ所の牛舎に乳牛が350頭。鳴き声は絶えず聞こえてくるが、「酪農地帯の香り」とも言える糞尿(ふんにょう)のにおいがほとんどしないのだ。(中略)「[この]システムのおかげですよ。(略)」。経営者の鈴木正道さんが語る「システム」とは、糞尿をバイオガスと液肥に変える「バイオガスプラント」のことだ。

用例後半部分は、牧場経営者が「バイオガスプラント」のある現場でプラントを示しながら取材を受けた際の発言であると考えられ、「このシステム」は現場指示的用法であろう。用例では「このシステム」部分以前において、「バイオガスプラント」という語は見られない。つまり、指示対象が後置されているとも見ることができ、経営者が語った内容に含まれていた「このシステム」を受けて、「システム」が「糞尿をバイオガスと液肥に変える『バイオガスプラント』」として同定されるものである。いわば、(14)は名詞句が上位語から下位語へと変換されていくもので、これまで見てきた換言方向とは逆である。これは、「バイオガスプラント」をあたかも目前にあるように示したことで、以降の文では上位語から下位語への換言が可能になっていると考えられよう。

[Ⅳ]先行名詞句・「このシステム」一文型

(15) 特殊なポリ袋に入れて、食品が腐敗する原因となる空気を取り除き、窒素ガスを

補充する。真空のままだと中身の食材が押しつぶされたようになるので、窒素ガスを入れて調理した状態を保つのだという。このあと多段階の温度で調理殺菌する機械にかけて、塩焼きやみそ煮などの製品ができあがる。「新含気調理システム」と名付けた[この]システム全体の設備投資に約1億円かけたが、これによって、調理した食材を缶詰ではなく、ポリ袋で常温保存できるようになった。

(15)は、まず「『新含気調理システム』と名付けた～できるようになった」より前の3文においてシステムの方式が説明されている。その後、調理システムの名称が提示され、その文と同一文中において「新含気調理システム」が「このシステム」として換言される。「このシステム」部分の出方は先に示した用例とは異なるものではあるが、先行名詞句（あるいは先行文における説明）を「このシステム」として上位語に換言して示すもので、この点については他の用例と共通する。

2.2.3 「このシステム」型用例における名詞句指示の様相

ここで「このシステム」型用例の名詞「システム」句の意味用法分布を確認しておこう（表4）。「そのシステム」型用例の場合と異なる点は、指定指示用法においては「モノ統括系のシステム」を示す場合が多い点である。「{その/この}システム」型用例いずれの場合も「指定指示用法」が多数を占める点は共通する。しかし「そのシステム」型用例は「ヒト統括系のシステム」を指示する際に選択される傾向がみられる。

(表4) 「このシステム」型用例における名詞「システム」句の意味用法分布

指定指示用法 (117例)	モノ統括系のシステム	95例
	ヒト統括系のシステム	22例
代行指示用法 (14例)	モノ統括系のシステム	4例
	ヒト統括系のシステム	10例

また、「このシステム」型用例において先行名詞句に名詞「システム」が含まれない用例と含まれる用例の相違点についても確認しておくとして、一記事の中で先行名詞句を換言し述べ示す型が、先行名詞句に名詞「システム」が含まれる用例の場合のほうに多く、バリエーションに富むといえる。一方、共通点として挙げられるのは、先行名詞句が名詞「シス

テム」という上位語へと言い換えがなされているという点である。

以上より、「この^{システム}」型用例においても名詞「システム」という上位語はいくつかの下位語を内包することが明らかとなった。ここでも名詞「システム」の指示対象は幅広いことが確認できる。このような点から、先行名詞句に名詞「システム」が含まれる場合もそうでない場合も、上位語といえる名詞「システム」の指示対象を文中において明確にするためには、指示詞「この」の付与が必須となると考えられる。

3. おわりに

本章では、新聞・雑誌記事において抽象的な意味を表す名詞「システム」を含む「{この/その}^{システム}」文に注目し、先行名詞句と名詞「システム」との関係、また名詞句と指示詞との相関関係について考察を行なった。

考察の結果、名詞「システム」は指示詞「この」を最も選択しやすく、指示詞「その」が付与される用例には先行名詞句に名詞「システム」を含むものはみられないことが確認できた。以上より、先行名詞句に名詞「システム」が含まれる場合には、指示詞「この」が選択される傾向があるといえよう。

指示詞の指示用法別に用例に注目すると、「{この/その}^{システム}」文はいずれも指定指示用法の場合が多い。指示詞の文脈指示において指定指示の用法が多い傾向は、第2章や第3章においても確認済みであり、名詞「システム」においても同様の傾向を確認することができた。つまり、「{この/その}^{システム}」文は、下位語を多く内包する名詞「システム」の性質に支えられた、指定指示用法となりやすい文型であるといえる。

以上、名詞「システム」の振る舞いと指示詞の相関関係に注目した。名詞「システム」は分類学的な階層関係によって支えられた、複数の幅広い下位語を内包できる名詞句であることが確認でき、その性質、すなわち指示対象を明確にする必要性ゆえに指示詞の付与が求められると考えられる。

引用・参考文献

- ・庵功雄(1997)「『は』と『が』の選択に関わる一要因一定情報名詞句のマーカ―の選択要因との相関からの考察一」(『国語学』188集)
- ・石井正彦(1993)「臨時一語と文の凝縮」(『国語学』173集)
- ・金愛蘭(2006)「外来語『トラブル』の基本語化―20世紀後半の新聞記事における一」(『日本語の研究』2-2)
- ・久野暉(1973)「コ・ソ・ア」『日本語研究資料集 指示詞』(大修館書店)
- ・数理科学編集部(2002)『数理科学1月号/特集・〈システム〉という見方 自然・生命・社会現象を見る目、語ることば』(サイエンス社)
- ・長澤理恵(2008)「{この/その}N{は/が}P」文における「は/が」に関する一考察 ―指示詞「この/その」と名詞句の性質との相関一」(『名古屋大学国語国文学会』第101号)
- ・長澤理恵(2010)「指示詞『この/その』代行指示文における『は/が』の出現傾向一名詞句指示の様相と名詞句の性質から一」(『Nagoya Linguistics』第4号)
- ・西山佑司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論』(ひつじ書房)

用例データ出典

- ・朝日新聞オンライン記事データベース『聞蔵(きくぞう)Ⅱ・ビジュアル』

第5章

「{この/その}N{は/が}述語」文における「は/が」の選択要因 —抽象的意味を表す名詞「システム」と固有名詞からの考察—

0. はじめに

第4章では、名詞「システム」を含む「{この/その}システム」文に注目し、先行名詞句と名詞「システム」との関係や、名詞句と指示詞との相関関係について考察を行った。本章でも名詞「システム」句に注目し、新聞記事や雑誌記事に頻出する「{この/その}N{は/が}述語」文における名詞句の意味属性関係³⁹と、「この/その」と「は/が」の選択要因について考察する。そしてさらに、本章では固有名詞の振る舞いにも着目する。抽象的な意味をあらわす外来語「システム」と固有名詞、それぞれの出現する「{この/その}N{は/が}述語」文中の「は/が」選択の様相について整理し、抽象的な意味を表す外来語と具体的なモノの名前を表す固有名詞という、いわば意味上では対極にあるともいえる名詞句の振る舞いによって、「この/その」と「は/が」の選択には相違がみられることを指摘する。

以下では前章において取り上げた、抽象的な意味を表す名詞「システム」を含む用例をまず考察し(1節)、その後、固有名詞を含む用例を考察する(3節)⁴⁰。ここで対象となるのはこれまでと同様に、次のような形態の用例である。

「—— 先行名詞句 ——。{この/その} 名詞句N {は/が}——。」

1. 抽象的な意味を表す名詞「システム」を含む用例の考察

抽象的な意味をあらわす名詞句はさまざまに存在する。たとえば、金愛蘭(2006)では外来語「トラブル」等は「類義語に対する上位語の位置」に立つことができ、意味を「概略的に」示すようなものとして取り上げられている。このような、外来語の振る舞いや出現

³⁹先行名詞句と名詞句Nの関係を、言語からは独立した分類学的な階層関係によってみるものである。意味属性関係は「上位下位」「下位上位」「同位」関係の3つである。

⁴⁰本章における用例中の下線、囲み等はいずれも筆者による。

の様相について指摘した論考⁴¹などもみられる。本章では第4章と同様、抽象的な意味を表す外来語のなかから、その一例として外来語「システム」を取り上げ、抽象的な意味を表す名詞「システム」句と「この/その」と「は/が」の相関関係について考察する。考察対象とする用例「{この/その}システム{は/が}」文は、『朝日新聞・聞蔵Ⅱビジュアル』⁴²から抽出したものである。表1に各用例数を示す。

表1：「{この/その}システム{は/が}」文 用例数

{この/その}システム (用例数)	は/が	用例数
このシステム(42例) (下位上位関係)	は	32(71.1%)
	が	10(22.2%)
そのシステム(3例) (下位上位関係)	は	2(4.5%)
	が	1(2.2%)
	計	45(100%)

(用例数の傾向)

[この] システムは > [この] システムが > [その] システムは > [その] システムが

1.1 用例考察

用例を抽出すると「が」よりも「は」、「その」よりも「この」が選択されやすい傾向が確認できる。用例数が最多である「このシステムは」型用例は、たとえば次のようなものである。

(1)新幹線の地震対策の中心は、(中略)「早期地震検知システム」だ。震源までの距離が遠いほど、S派到着までの時間が稼げ、[この] システムは有効となる。

「このNは」型が最多である点は、第2章・第3章で確認できた傾向と同様である。一

⁴¹ 金(2006)では、名詞「トラブル」以外の「バランス」「ケース」「システム」なども「抽象的な意味を表す外来語」として触れられている。

⁴² 本データベースには1984年8月以降の3紙誌(『朝日新聞』『アエラ』『週刊朝日』)の記事データが収録されている。

方で、「そのシステムが」型は用いられる場面が限られる。「そのNが」型の出現率が低いという点についても第2章で指摘しており、その傾向と一致する。用例全体の傾向として、「この」と「は」が選択されやすいということを鑑みると、「そのシステムが」型は他用例類型の中でも選択されにくく、特殊な類型であると考えられる。では、以下において「この/その}システム{は/が}」型用例全体について、先行名詞句と名詞句Nの関係をみよう。

1.1.1 「このシステム{は/が}」型

「このシステムは」型 32 例、「このシステムが」型 10 例である。他類型と比較して「このシステムは」型の用例数が最も多く、「このシステムは」型が本考察範囲においては定型の類型であると考えられる。用例は(2)~(4)のようなものである。第2章でも「このNは」型の用例数は最多であることが確認されており、さらに「このNは」型は、先行名詞句と「このN」部分が分類学的な階層関係から捉えることができる「下位上位」関係の場合に定型の類型であるとも指摘した。本稿において考察対象としている用例においても、先行名詞句と「このシステム」部分の意味属性関係は「下位上位」である。

(2)ポールソンはなぜ、中東諸国がドルペッグをやめることを恐れるのか。「米国という、マネー集中一括管理システムを維持するためだ」とみるのは、三菱UFJ証券チーフエコノミストの水野和夫である。水野は、数年前から、米国自身を巨大な投資銀行に見立ててきた。(3文略)中東産油国にとっても、米国が繁栄している限りは、[この]システムは好都合だ。

(3)講義に対する質疑では、同社の空間除菌システムに話題が集中した。(中略)

[この]システムは北京五輪が開かれる中国でも韓国の代理店を通じて導入される可能性があるという。

(4)生活保護を受けたいと、福祉事務所へ相談に行く。担当ケースワーカーが訴えを聞いてくれるが、まずこの一担当者の面談にパスしなければ申請は受理に至らず、それから先、事は一切進まない。この担当者は相談窓口には座ってはいるが、実は、厳しい財政事情の中で、申請をなるべく受理しないよう期待されている審査官でもあるのだ。窓口での対応に納得できないという相談者の話は枚挙にいとまがない。一担当者の一存で生活保護への道が事実上閉ざされてしまいかねない[この]システムが、制度の運用をゆがめる深刻な問題として社会的に取り上げられることはな

かった。

また、「このシステム」型類型は 42 例中 27 例、つまり用例全体の約 64% で先行名詞句に名詞「システム」を含み、「システム」の名称（「米国という、マネー集中一括管理システム」「空間除菌システム」等）などを示す傾向が確認できる。後続文はその内容を受けて、取り上げられている「システム」自体に対する説明や評価を加えるような内容である。

さらに、「このシステム」型においては、先行名詞句と後続文における「このシステム」が 10 文以上離れて示されるなど、先行名詞句と名詞「システム」が遠距離で照応する場合もみられる。

- (5) 救急救命センターの医師が救急車に同乗して、搬送途中から治療を開始する高槻市消防本部の『特別救急隊』のシステムが、高い救命効果を上げている。（12 文略）[この] システムは、医師を現場に出す府三島救命救急センターの協力なしには成り立たない。

以上の様相は、「[その] システム {は/が}」型においては確認されない点で特徴的である。このような点から、先行名詞句と名詞句 N の両名詞句が近距離で照応する場合と遠距離で照応する場合のどちらにも対応できるものが「このシステム」型類型だということができよう⁴³。一方で、「このシステムが」型における先行名詞句部分の特徴は、取り上げられている「システム」についての名称を示すというよりも、「システム」自体の内容がどのようなものであるかを提示することに重点が置かれる傾向にある⁴⁴。(4)や(6)がその例にあたる。

- (6) 自社で商品企画から販売までを手がけ、仕入れコストを減らし、低価格を実現したレンズの在庫を充実させたくえで、店内に検眼機とレンズ加工機を複数台用意する。 そうすることで眼鏡選びから受け取りまでが約 30 分で済む。 [この] システムが、売り上げ低迷に悩む眼鏡業界のカンフル剤（となって、他社も追随した）

⁴³庵功雄(1997)には「遠距離照応」の場合には「この」だけが用いられるという指摘がある。この指摘は本稿において捉えられた点を補強するものであろう。

⁴⁴「このシステムは」型用例の先行名詞句は、「このシステムが」型と比較して「システム」の名称を提示する様相が強い。

(4)(6)からも分かるように、「システム」自体の内容提示がなされるため、先行名詞句は比較的長くなる傾向にある（10例中4例）。このように、比較的長い先行名詞句を一語で示すことができる名詞「システム」などは、紙幅に制限のある新聞において特に利便性は高い。以上より、「このシステムが」型は先行名詞句において取り上げられている「システム」自体の内容を後続文で受けて述べ続けるような場合において、定型の種類となる傾向があると考えられる。

1.1.2 「そのシステム{は/が}」型

「そのシステム{は/が}」型は計3例抽出でき、「このシステム{は/が}」型よりも用例数は少ない。文脈指示用法では「その」が用いにくいという傾向は第2章においても示したが、その傾向はここでも確認できる。そして、先行名詞句と名詞句Nの意味属性関係はいずれも「下位上位」関係である。

(7)彼らが活躍する背景には、旧社会主義時代の「スポーツ・プロジェクト」の影響がある。（中略）当時から世界王者クラスと評されるボクサーは多く存在し、[その] システムは引き継がれている。

(8)教授は「いかに首相一人が健闘しようとも 自民党システムと戦後自民党政治は終焉を迎えた」と評し、戦後政治を支えたシステムの特徴を「ボトムアップ型で全体が合意に達するプロセスを重視すること」にみる。そして、機動力を欠く [その] システムが時代遅れとなった点を指摘しつつもそれに代わる新たな統治システムを構築できなかった点に今日の自民党の混迷の真因をみるのである。

(7)では、対象となっている名詞句に関わる新たな情報が後続文脈において付与されると判断され、名詞句の情報量は先行名詞句<名詞句Nと捉えることができるシンプルな主題文である。また、(8)の1例のみ「そのシステムが」型である。この点についてはどのように考えることができるだろうか。

(8)における名詞「システム」に関しての「機動力を欠く」という修飾成分は、先行文脈において確認することはできない。よって、名詞句の保有する指示性という観点からみれば、「そのシステム」は指示性の高い名詞句として捉えられよう。つまり、新たな情報が(8)

のように名詞「システム」に加わる場合、名詞句の指示性の高さの点から指示詞付与のなされない形での同一指示は困難であると判断されるが故に、後続文で提示される「システム」が先行名詞句と同一であることを示す「その」が、まず必要になる。さらにまた、「戦後政治を支えたシステム」が「時代遅れ」であるということも新たな内容であり、後続文に内容の新規導入・意味内容の転換が起こっていると捉えることができる。よって、このような場合に「が」が内容の新規導入・転換のマーカースとして選択されると考える。

このように、先行文脈における記述内容を受けた「そのNが」部分を含む後続文脈には名詞句Nに関連する情報が多く含まれるということや、あるいは名詞句の指示性の高さなどが確認できる。この場合の典型類型が「そのNが」型であると考えられる。

2. まとめ・抽象的な意味を表す名詞「システム」を含む用例の場合

以上より、先行名詞句と名詞句Nの意味属性関係が「下位上位」関係である「{この/その}システム{は/が}」文においては「このNは」型がもっとも定型で、広く適用される類型といえる。先行名詞句と名詞句Nの両名詞句が近距離で照応する場合と遠距離で照応する場合のどちらにも対応できるものが「このシステム」型であり、先行名詞句に名詞「システム」を含む場合においては「この」が選択されやすい。「このシステムが」型は、取り上げられている「システム」自体の内容を先行名詞句において述べるような場合に定型の種類となると考えられる。

また、先行名詞句と名詞句Nの情報量の多寡や、名詞句の指示性の高さの点から先行名詞句<名詞句Nと捉えることができ、指示詞付与のなされない形での名詞句の同一指示は困難であると判断される場合、後続文で提示される名詞「システム」が先行名詞句と同一であることを改めて確実に示す「その」が必要になる。そして、「が」は後続文脈内容についての先行文脈からの予測困難性を示し、いわば内容の新規導入・転換に関するマーカースとして選択されると考えられる。

3. 固有名詞を含む用例の考察

ここまでは名詞「システム」句を含む用例について考察を進めたが、以下では、先行名詞句・名詞句Nいずれかに固有名詞を含むものに注目し、「この/その」と「は/が」選択の様相を考察する。用例はいずれも『毎日新聞データ'97 データファイル』から抽出したものである。表2に各用例数を示す。

表2：「は」「が」出現傾向

		先行名詞句・名詞句Nともに固有名詞 (同位関係)	先行名詞句のみ固有名詞 (下位上位関係)	名詞句Nのみ固有名詞 (下位上位関係)	先行名詞句・名詞句Nとも固有名詞以外
その	は	15(45.5%)	0(0%)	0(0%)	28(8.9%)
	が	13(39.4%)	1(7.1%)	0(0%)	34(10.8%)
この	は	5(15.1%)	10(71.4%)	0(0%)	203(64.4%)
	が	0(0%)	3(21.4%)	1(100%)	50(15.9%)
合計		33(100%)	14(100%)	1(100%)	315(100%)

全体の傾向をみると、先行名詞句・名詞句Nともに固有名詞である場合には「そのN{は/が}」型に、先行名詞句のみ固有名詞の場合には「このN{は/が}」型に用例が偏る。さらに特徴的なのは、先行名詞句・名詞句Nともに固有名詞の場合には「このNが」型は0例であり、一方で先行名詞句のみ固有名詞の場合には「そのNは」型は0例であるという点である。また、名詞句Nのみ固有名詞の用例は「このNが型」の1例のみである。先行名詞句・名詞句Nともに固有名詞が含まれない場合には、上述したような傾向はみられない。以下、それぞれの類型について詳しく考察する。

3.1 名詞句Nのみ固有名詞

名詞句Nにのみ固有名詞が出現するものは、調査した範囲において、以下の「このNが」型1例のみ確認された。

(9) 流木に乗った張騫が、激流にもまれながら流れ下る姿である。面白いことに、江戸城の「松の廊下」の奥にある「竹の廊下」の杉戸絵にも、[この] 張騫図が描かれた。

先行文脈には「張騫」という固有名詞が含まれ、「張騫図」についての情報が提示されている。先行文脈中の「流木に乗った張騫が、激流にもまれながら流れ下る姿」は、「張騫図」という「全体」に対する「部分」の関係になる。つまり、この用例における名詞句の関係は「部分と全体」の関係であると捉えることが可能である。

「が」が選択される要因についてもみよう。江戸城に張騫図が描かれたことが後続文において示されているが、これは先行文脈中から得ることはできない新たな内容で、予測は困難である。先ほど、内容の新規導入・転換の際に「が」が選択されると指摘したが、(9)の場合においても「が」の選択はこの要因によるものとみることができるだろう。後続文冒頭に「面白いことに」と述べられていることから、これは内容の新規導入や転換を示していると考えられる。また、これは同時に「張騫図」が描かれたことに対する興味深さを示すものである。先行文脈からは予想困難な、後続文において示された新たな内容が「意外性」などにつながることは十分に考えられ、これを「が」が担うものとする。

3.2 先行名詞句・名詞句 N とともに固有名詞

次に「先行名詞句・名詞句 N とともに固有名詞」の場合をみる。「その N は」型 15 例、「その N が」型 13 例、「この N は」型 5 例、「この N が」型 0 例であった。また名詞句の意味属性関係はいずれも「同位」関係である。

この用例群においては「その」と「は」が選択されやすい。表 2 で示したように、考察対象とした全用例の傾向は「この N」型 > 「その N」型である。しかし、先行名詞句・名詞句 N とともに固有名詞である場合には「その N は」型が最多で、一方「この N が」型は 0 例と、このような用例の出現傾向は特徴的である。では、以下において各用例型ごとに考察を行う。

3.2.1 「この N は」型

「先行名詞句・名詞句 N とともに固有名詞」の用例の場合、「この N が」型 0 例で、「この N は」型は計 5 例である。

- (10)その子は誕生した場所にちなみ、大来(伯)皇女(おおくのひめみこ)と名付けられた。[この] 大来皇女は、父の大海人皇子(おおあまのおうじ)が天武天皇として即位した2ヵ月後、12歳で伊勢斎王に選ばれ、泊瀬(はつせ)斎宮に住んだ。
- (11)王城の門も下馬せず通過し、彼は海外からの使者の宿泊施設である鴻臚寺(こうろじ)に迎えられた。[この] 鴻臚寺は紫禁城(故宮)の正門、成天門の前にあった。
- (12)ウメの公園として名高い水戸の偕楽(かいらく)園は、金沢の兼六園、岡山の後楽園と並んで、日本三大公園の一つに数えられている。[この] 偕楽園は「民と偕(ともに)に楽しむ」という趣旨で、水戸九代藩主徳川斉昭(なりあき)が1842年に開園した。
- (13)仙台などの水ガメとして白石川(しろいしがわ)をせき止めて造られたのだが、お陰でセヶ宿(しちかしゅく)のうち渡瀬宿(わたらせじゅく)は湖底に沈んでしまった。[この] 渡瀬宿は芥川賞作家・古山高麗雄(ふるやまこまお)さんの父の生まれ故郷だそうだ。
- (14)もう少し日本を感じるために、平泉寺(白山神社)に向かった。日本の家には神棚と仏壇が同居しているが、[この] 平泉寺はその代表みたいな所で、寺あり、同時に神社でもあるのだ。

上記用例をみる限り、後続文脈で示されるのは下線で示した名詞句が表すものが存在する場所、居住場所、生誕地などであり、いずれも取り上げられている名詞句に対する解説等として捉えることが可能である。よって、「先行名詞句・名詞句Nともに固有名詞」における「このNは」型は、固有の場所やモノなど、取り上げられている事柄の事象について叙述する際の定型類型と考えられる。

「{この/その}N{は/が}述語」文全体における傾向では、「このNは」型が用例数において最多で、「この」は「その」よりも、また「は」は「が」よりも選択されやすい傾向があり、本稿における用例全体においての定型類型であると捉えることができる。しかし、「先行名詞句・名詞句Nともに固有名詞」の場合において「このNは」型が選択される割合は、考察範囲では2%程度(5例)と選択されにくく、この出現様相は特徴的である。

3.2.2 「その N{は/が}」型

本用例型は「その N は」型 15 例、「その N が」型 13 例である。先行名詞句・名詞句 N とともに固有名詞である場合、つまり、名詞の意味属性関係が「同位」関係と捉えることができる場合に「その」が選択される割合はおおよそ 85%である。

表 2 で示したように、考察対象とした全用例における「その N{は/が}」型の用例数は「この N{は/が}」型と比較すると少数である。このように、先行名詞句・名詞句 N とともに固有名詞である場合において「その N」に偏るという点は特徴的であり、この様相は固有名詞の性質によるものと考えられる。

(15) 財政赤字で世界の二大超大国である日本と イタリア。[その] イタリア は予想以上にいま財政改革のあらしの渦中にあった。

(16) ジタさん が休暇明けで香港に出かけるたびに、末娘は「行かないで」と泣きじゃくる。[その] ジタさん は 17 日、39 歳の若いおばあちゃんになった。

先行名詞句と名詞句 N の意味属性関係は「同位」関係にあり、そのまま捉えれば名詞句それぞれが持つ情報量も同等であるようにみえる。しかし、(15) では「イタリア」が「予想以上に」「財政改革のあらしの渦中」にあり、また (16) は「ジタさん」が「39 歳」にして「若いおばあちゃん」になったということが示されており、文意を考慮したうえで先行名詞句と名詞句 N をみれば、それらが持つ情報量は相対的に先行名詞句 < 名詞句 N という関係として捉えられよう。

田窪(1997) には、「同一指示が許されるのは、一番構造的に高い位置にある名詞句が一番情報量が多い場合」で、「指示的名詞は、より指示性の少ない名詞を先行詞としてはいけない」という指摘がなされていた。

(33)⁴⁵ 田中課長は最近元気がない。課長の奥さんに原因があるのかもしれない。

(田中課長 = 課長 は可能)

(34)⁴⁶ 課長は最近元気がない。田中課長の奥さんに原因があるのかもしれない。

(課長 ≠ 田中課長)

⁴⁵ 用例番号(33)(34)は田窪(1997) のまま。

⁴⁶ (34)における先行名詞句「課長」と名詞句 N「田中課長」の意味属性関係は「上位下位」関係であると捉えることができる。

ここで考察している「先行名詞句・名詞句Nともに固有名詞」の用例は、一見この原理に反するように見える。しかしそうではなく、この場合には先行名詞句と名詞句Nの意味属性関係が「同位」関係であることと、先行名詞句と名詞句Nのそれぞれがもつ情報量に注目する必要がある。

先行名詞句と名詞句Nが「同位」関係である場合、名詞句の同一指示は比較的容易である。また先行名詞句と名詞句Nについて、その情報量が先行名詞句<名詞句Nであっても、同一名詞を指示する場合は実際にある。その場合、「その」を名詞句Nに付与することによって名詞句の同一指示を確実なものとしている。このように「そのNは」型をみると、先行名詞句と名詞句Nの両名詞句は「同位」の関係にあるが、情報量の観点からみると先行名詞句<名詞句Nであり、このような場合には「その」付与が求められると考えられる。

では「は/が」の選択については、どのように考えることができるだろうか。次の用例をみよう。

(17) キューバは原住民の言葉で〈中心地〉という意味だそうだ。その キューバが、リマの日本大使公邸「人質事件」解決の中心地になろうとしている。

先にも述べたように、(17)などにおける先行名詞句と名詞句Nは、情報量の観点からみて先行名詞句<名詞句Nという関係にあり、後続文脈の内容は先行文脈の内容から推測することが困難である。そのような点から、「そのN」以降で明らかとなる意味内容は先行文脈中にはみられないことを示す指標としての「が」が選択されると考えられよう。

「が」の基本的性質について、野田(1996)は「主題をもたない文⁴⁷— 前の文脈とのつながりをもたず、話題を導入したり、転換したりするのに使われる」、また「述語が主題になっている文⁴⁸— 前の文脈にでてきたものや、それに関係のあるものを主題にして、話題を継続するのに使われる」と指摘している。この指摘は、先に提示した指標としての「が」の振る舞いを裏打ちするものである。また、本稿における考察対象に限らず、「そのNが」型が意外性や排他的な意味を表すと捉えられる傾向を「前の文脈とのつながり」がなく「話題の導入」や「転換」がなされることに起因するものと考えすることは、十分に可能であろう。たとえば、上記用例の先行文脈中において「キューバ」が「〈中心地〉」を意味すると

⁴⁷ 例文「八木がホームランを打った」

⁴⁸ 例文「八木がキャプテンだ」

いうことは明らかであっても、後続文脈において示されている『人質事件』解決の中心地」まで推測することは困難である。このような後続文脈における「前の文脈とのつながり」の程度によって、意外性という意味表出が左右されると考えられる。

3.3 先行名詞句のみ固有名詞

次に「先行名詞句のみ固有名詞」の場合を考察しよう。「先行名詞句のみ固有名詞」の用例は、「このNは」型 10 例、「このNが」型 3 例、「そのNが」型 1 例、「そのNは」型 0 例である。用例は「この N{は/が}」型に偏る。(18)(19)は「この N{は/が}」型である。

(18)ウガンダ東部、ケニアとの国境に近いトゥバ村。[この] 田舎町は、しばしば干ばつに襲われてきた。

(19) 4年前、骨粗鬆症（こつそしょうしょう）で身動きできなくなった実母 ヤエさん を自宅で介護することになった。[この] お母さんが半端じゃなかった。

上記用例における先行名詞句と名詞句Nの意味属性関係は、「下位上位」関係である。先行名詞句と名詞句Nが「下位上位」関係の場合、先行名詞句と名詞句Nの保有する情報量はそもそも同等ではない。よって先行名詞句と名詞句Nを同定するためのマーカーがもとより求められているといってもよく、同一指示を果たすマーカーがあってはじめて名詞句の同定が可能となろう。

(18)'ウガンダ東部、ケニアとの国境に近いトゥバ村。[この/?φ] 田舎町は、しばしば干ばつに襲われてきた。

では、同一指示マーカーとして付与されるのは何か。この場合には「その」よりも「この」が求められる。金水(1999)ではコ系列の指示詞について「対象の同一性を保ちながら、異なるカテゴリー付けを行なう、すなわち複数の異なるフレームに属するものとして扱うことができる」と指摘されている。(18)の「トゥバ村」「田舎町」と(19)「ヤエさん」「お母さん」のような名詞句を同定する場合には、「その」ではなく「この」が選択される。

「下位上位」関係というのは、言語とは独立した階層関係に基づく意味関係であること

は、先ほど述べた通りである。本稿で考察対象としている文章形態においては、「この N は」型の用例数が最多で、またそのうちの 90%以上が「下位上位」関係のものである。つまり、「この N は」型は、分類学的な階層関係に基づく「下位上位」関係に支えられて確立していると考えられ、「下位上位」関係における定型類型として捉えられよう。

なお、「先行名詞句のみ固有名詞」である用例において、「その N が」型をとるものは唯一、以下の 1 例だけであった。

(20)そこでは皇太子の愛人、カミラさんよりも、離婚の原因を作った チャールズ皇太子 自身への風あたりが強い。[その] 皇太子が、国民の王室離れが進む中で次期国王を約束されているのだ。

先行名詞句は「チャールズ皇太子」、名詞句 N は「皇太子」である。名詞句の意味属性関係は「下位上位」関係であるが、名詞句 N「皇太子」という名詞句のもつ特性、また書き手の持つ知識から、ほぼ「同位」関係であるとして捉えなおすことができる。つまり、上記用例は先に取り上げた「先行名詞句・名詞句 N とともに固有名詞」の例として位置づけることが可能である。このように捉えると、先行名詞句のみ固有名詞であるとき、「同位」関係の場合は「その」、「下位上位」関係の場合は「この」を選択するとみることができよう。

4. まとめ・固有名詞を含む用例の場合

以上より、先行名詞句のみ固有名詞である場合、名詞句の意味属性関係は「下位上位」関係で、「この N は」型類型が定型であるといえよう。名詞句 N のみ固有名詞である場合の名詞句の意味属性関係も「下位上位」関係である。

また、先行名詞句・名詞句 N とともに固有名詞の場合には意味属性関係が「同位」関係であり、「その N は」型類型が定型である。文意を踏まえずに先行名詞句と名詞句 N の意味属性関係についてみると、それは「同位」関係であるが、文意を考慮してみるとその情報量は先行名詞句 < 名詞句 N であり、先行名詞句と名詞句 N の同一指示は困難である。よって、その際には名詞句 N に「その」が付与されることで、同一指示を可能にしている。そして、「その N」部分以降で明らかになる意味内容が先行文脈には明示されず、新規に導入された内容である場合、そのことを示す指標として「が」が選択される。

また先行名詞句・名詞句 N とともに固有名詞の場合の「この N は」型類型は、場所や人名などを取りやすく、いずれもそれら名詞句についての説明であり、その際の定型類型と考えられる。

5. おわりに

本章では、「{この/その}N{は/が}述語」文における「この/その」と「は/が」選択の様相について明らかにするにあたり、抽象的な意味を表す外来語の一つである名詞「システム」、そして固有名詞に着目し、それぞれの名詞句を含む用例について分析を行った。

いずれの場合も、傾向としては「が」よりも「は」が選択されやすく、「その」よりも「この」が選択されやすいという点は共通して確認された。また、先行名詞句と名詞句 N の意味属性関係が「下位上位」関係の場合には「この N は」型類型をとる傾向があり、先行名詞句と名詞句 N の含む情報量が先行名詞句 < 名詞句 N の場合には「その」が付与される傾向にあった。「その N」部分以降の内容が先行文脈からは予測困難であるような、新規の内容の導入などを示す際に「が」が選択されることなども共通して考察できた点である。

他に特徴的なものとしては、たとえば先行名詞句・名詞句 N とともに固有名詞である場合、つまり、名詞句の意味属性関係が「同位」関係である場合には「この N は」型ではなく「その N は」型が典型類型となることが挙げられる。また、抽象的な意味を表す外来語「システム」を含む「このシステムが」型は、先行文脈部分において「システム」の名称を示すというよりも、「システム」自体の内容を述べる際の定型類型となる傾向があることなども挙げられる。これらの点は、それぞれの用例における名詞句の出現様相に注目することによって、はじめて明らかになったといえよう。

以上、本章において捉えた内容は、いずれも先行名詞句と名詞句 N の意味属性関係や情報量、指示性などに注目することによって得られたものである。「この/その」と「は/が」の相関関係を明らかにするにあたっては名詞句の様相に着目することが有効であることを、改めて確認し、示すことができたと考える。

引用・参考文献

- ・庵功雄(1997)『『は』と『が』の選択に関わる一要因—情報名詞句のマーカ—の選択要因との相関からの考察—』(『国語学』188集)
- ・金愛蘭(2006)「外来語『トラブル』の基本語化—20世紀後半の新聞記事における—」(『日本語の研究』2-2)
- ・金水敏(1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」(『自然言語処理』6巻(4))
- ・田窪行則編(1997)『視点と言語行動』(くろしお出版)
- ・長澤理恵(2008)「{この/その}N{は/が}P」文における「は/が」に関する一考察—指示詞「この/その」と名詞句の性質との相関—」(『名古屋大学国語国文学』第101号)
- ・長澤理恵(2010a)「指示詞『この/その』代行指示文における『は/が』の出現傾向—名詞句指示の様相と名詞句の性質から—」(『Nagoya Linguistics』第4号)
- ・長澤理恵(2010b)「{この/その/あの}システム」文における名詞句の性質と指示詞「この/その/あの」との相関関係」(『名古屋大学国語国文学』第103号)
- ・野田尚史(1996)『新日本語文法選書1 「は」と「が」』(くろしお出版)
- ・益岡隆志・田窪行則共著(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』(くろしお出版)

用例データ出典

- ・毎日新聞(1998)『毎日新聞データ‘97データファイル』
- ・朝日新聞オンライン記事データベース『聞蔵(きくぞう)Ⅱ・ビジュアル』

附記

本章は、名古屋言語研究会(第95回例会)での発表原稿に加筆・修正をしたものである。その際、多くの方に貴重なご意見・ご指摘をいただいた。ここに記して深謝申し上げる。

結論

1. 本論のまとめ

本研究では、「{この/その}N{は/が}述語」文を考察対象として、名詞句の意味機能から「は/が」の問題についてアプローチした。

まず、第1章では、「{この/その}N{は/が}述語」文についての数少ない先行研究として、筆者が本研究を行うきっかけとなった論考を概観し、それらをベースとして指示詞「この/その」と「は/が」の選択要因について考察した。その結果、「このN」「そのN」はいずれも定名詞句として捉えることができ、また述部について考察すると、一時性述語・恒常性述語のいずれも見られ、一時性述語が多く用いられていることを確認した。しかし、「は/が」の選択と述部との間に明確な相関関係は見出されず、述部だけが「{この/その}N{は/が}述語」文の場合の「は」と「が」の使い分けに大きく関わっているとは考えにくいことを指摘した。また、どのような場合に「が」が選択されるかを分析すると、先行文脈に名詞句Nと対比されるような名詞句、あるいは対比されるようなものが連想されるような要件がそろっている場合には「は」が選択され、そうでない場合には「が」が選択されることを確認した。そして、「は」は名詞句Nと対比される対象がその文中に明示あるいは暗示される場合に対比の意味をもつという指摘がなされていることから、「は」ではなく「が」が選択されるのであれば、結果として対比ではなく「排他」という意味を持つことになり、そこから自ずと意外性や強調という意味合いが生じると指摘した。

第2章では、第1章を踏まえた上で「{この/その}N{は/が}述語」文における指示詞「この/その」の指定指示文を考察対象として、名詞句の性質や分類学的な意味属性関係に注目し、指示詞「この/その」と「は/が」の相関関係について分析した。その結果、「{この/その}N{は/が}述語」文においては「このNは」型が最多の類型で、先行名詞句と名詞句Nが意味属性関係において「下位上位」の関係である「このNは」型が定型であることを指摘した。一方で、指示詞「その」の持つ性質から、「そのNは」型は「同位」関係の定型として捉えることができた。また、考察対象としている類型において定型とした「このNは」型のもっとも対極に位置するのが「そのNが」型であり、「は」に対する「が」の有標性についても確認した。以上の成果は、名詞句の中でも特に固有名詞の出現様相に注目したことによって導かれたものである。

第3章では、まず「{この/その}N{は/が}述語」文における指示詞「この/その」による文脈指示の様相を考察した。考察の結果、第2章で確認できた通り、指定指示用法の場合は名詞句間の関係をタクソノミー的な階層関係に基づく意味属性関係として捉えることができ、その一方で、代行指示用法の場合の先行名詞句と名詞句Nの関係は、先行名詞句が名詞句Nの「外延」を確定させるような関係であり、同時に名詞句Nは先行名詞句について「意味的な制約」を課していることが明らかとなった。そしてさらに、代行指示文について分析した結果、代行指示用法の用例では「そのNは」型が出現しやすく、定型の類型であると捉えることができるが、先行名詞句と名詞句Nの意味範疇が同一である場合には「そのNが」型の出現率が高くなるということを確認した。なお、代行指示用法の「この/その」はいずれの場合も「は」が選択されやすいということから、「そのNが」型は特殊性を持つと指摘した。以上、本章によって明らかになった点は、いずれも名詞句Nの性質に因ることを確認した。このように、第2章での結果を踏まえた上で、指示詞の用法の違いにより、名詞句の意味属性関係などの点において異なりを見出し、「は/が」の出現傾向について整理した。

第4章では、「{この/その}N{は/が}述語」文における指示詞「この/その」と「は/が」選択の場面では名詞句の性質が大きく関与するという、これまでの考察によって得られた成果を踏まえ、「抽象的な意味を表す外来語」とされる名詞「システム」に着目し、指示詞「この/その」との選択要因について考察した。その結果、名詞「システム」は下位語を幅広く内包する上位語であり、そのような点から「{この/その}システム」文においては指示詞付与が必須で、この文型は下位語を多く内包する名詞「システム」の性質に支えられたものであることを指摘した。以上の様相は、名詞句の分類学的な階層関係から説明可能であり、「この/その」のいずれが付与されるかは、名詞「システム」の意味用法、使用場面に因ることが確認された。

第5章では、第4章において取り上げた、分類学的な階層関係において複数の下位語を含む名詞「システム」、さらに固有名詞について注目した。そして、抽象的な意味をあらわす名詞「システム」と固有名詞それぞれの出現する「{この/その}N{は/が}述語」文中の「は/が」選択の様相について考察した。いずれの場合も、全体の傾向としては「が」よりも「は」が選択されやすく、「その」よりも「この」が選択されやすいという点が共通して確認された。また、先行名詞句と名詞句Nの意味属性関係が「下位上位」関係の場合には「このNは」型類型をとり、先行名詞句と名詞句Nの含む情報量や指示性の高さにおいて、先行名

詞句よりも名詞句Nのほうが勝る場合には「その」が付与される傾向がみられることを指摘した。「そのN」部分以降の内容が先行文脈からは予測困難であるような、新規の内容の導入などを示す際に「が」が選択されることなども共通して考察できた点であった。

さらに特徴的な点として、先行名詞句・名詞句Nともに固有名詞である場合、つまり、名詞句の意味属性関係が「同位」関係である場合には「このNは」型ではなく「そのNは」型が典型の類型となることも指摘した。意味属性関係が「同位」関係である場合に「そのNは」型が典型となる点は第2章でも同様に確認されており、本章における分析と一致する。また、第4章ならびに本章において注目した、抽象的な意味を表す外来語「システム」を含む「このシステムが」型は、先行文脈部分において「システム」自体の内容を述べる際の定型類型となる傾向があることも指摘した。このように、本章において指摘したいずれの点も、それぞれの用例における名詞句の出現様相に注目することによって、はじめて明らかとなったものである。

2. おわりに 一本論の課題と今後の研究方針

本論の課題としては、次のような点が挙げられる。

- ・本論の調査対象とは異なるテキストタイプにおける「は/が」についての調査と検討。
- ・指示詞「この/その」と「は/が」の選択要因についての通時的観点からの考察。
- ・名詞句と「は/が」の問題に関する、より厳密な構文論的考察。

先にも述べたように、本研究での成果は主に新聞記事や雑誌記事に頻出するような「{この/その}N{は/が}述語」文という、ある種限られた類型の考察によって得られたものである。しかし、このような文型において名詞句の性質や名詞句指示の様相に特に注目し、「は/が」について考察したものは管見の限りでは少ない。よって、本研究の成果は、これまであまり重点的に調査・検討されてこなかった点からの分析によって導かれたものであり、その意味において一定の意義をもつもので、今後、他の観点からの分析の可能性も大きく、分析方法としての発展性は高いと考える。

また、本研究は現代語における「は/が」の様相を考察対象としており、「は/が」について通時的な観点からの検討は行っていない。たとえば、主格表示の「が」について通時的

に考察しているものとして山田昌裕（2003）などがある。山田（2003）では名詞文「AガBダ」型がどのような経緯で発生し、それが「AゾBダ」型・「AコソBダ」型との関わりにおいて、どのように拮がったかを考察している。そのなかでは『『意味・機能』を『未分化的に抱えこんでいた』係助詞による表現から、主格表示『ガ』と終助詞による表現へ、すなわち『主語ゾ』から『主語ガーゾ』へ、『主語カ（あるいはヤ）』から『主語ガーカ』へという分析的傾向が見て取れる」と述べられ、名詞文「AガBダ」型は「日本語の文表現の中心が係り結び的断続関係から論理的格関係へと移り変わっていく過程の中で発生した」という指摘がなされるなど、興味深いものである。このような通時的観点からの先行研究などを踏まえ、本研究のような共時的観点から行った「は/が」研究と通時的観点からの研究をコミットさせることが、今後、「は/が」をめぐる問題の全体像を明らかにする上では必要となるのではないかと考えている。また、すでに多くの研究がなされている指示詞に関する通時的・共時的研究との関わりに関しても同様の考えをもつ。

このように、「は」と「が」の研究に対して名詞句の意味機能からのアプローチが今後どれほど影響を及ぼすかは未だ予測がつきにくい部分があり、未知の部分が多い。たとえば、第1章で考察した丹羽（2004c）における「N{は/が}P」文の分類などについても十分であるとは言えず、検討の余地がある。そのような中で、本研究における方法論や本研究によって得られた結果を援用し、「は/が」に関わる問題一般、「は/が」の選択要因の全体像について明らかにすることが今後の課題の一つである。それはまさに「は/が」についての研究、「名詞句」についての研究のいずれにも関わることであり、意味をもつものであると考える。その意味で、本論はそれらの一端を明らかにできたという点において一定の意義を持ち得たではないかと思う。

以上、本研究は多くの点においてさらなる発展の余地をもつものであると考える。今後の研究方針としては、「{この/その}N」のような名詞句指示の様相等の問題も含めた上で、現在も研究が進められている名詞句の意味機能に注目しながら、いまだ十分明らかになっていない「は」と「が」の選択要因について研究を進めたい。

引用・参考文献

- ・丹羽哲也(2004)「主語と題目語」(『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』第11章)
- ・山田昌裕(2003)「名詞文『A ガ B ダ』型の発生とその拡大の様相—主格表示『ガ』と係助詞『ゾ』『コソ』との関連性—」(『国語学』第54巻2号)

(以上)

附記

本研究をなすに際し、釘貫亨先生、宮地朝子先生、また多くの方から懇切なご指導、ご教示を賜りました。記してここに厚く感謝の意を表します。

初出一覧

序論

書き下ろし

本論

第1章：「{この/その}N{は/が}述語」文における「は/が」の選択要因—名詞句の定・不定と述部の性質からの考察—

「現代語助詞『は』と『が』の選択についての一要因—名詞句の性質との相関を中心に—」

名古屋言語研究会第40回例会(2006年11月) 発表原稿

第2章：指示詞「この/その」指定指示文における「は/が」の出現傾向

「『{この/その}N{は/が}P』文における『は/が』に関する一考察—指示詞『この/その』と名詞句の性質との相関—」

『名古屋大学国語国文学』第101号,pp.101-118 名古屋大学国語国文学会(2008)

第3章：指示詞「この/その」代行指示文における「は/が」の出現傾向

「指示詞『この/その』代行指示文における『は/が』の出現傾向—名詞句指示の様相と名詞句の性質から—」

『Nagoya Linguistics(名古屋言語研究)』第4号,pp.59-71 名古屋言語研究会(2010)

第4章：抽象的意味を表す名詞句と指示詞「この/その」との相関関係—「{この/その}システム」文からの考察—

「『{この/その/あの}システム』文における名詞句の性質と指示詞『この/その/あの』との相関関係」

『名古屋大学国語国文学』第103号,pp.161-176 名古屋大学国語国文学会(2010)

第5章：「{この/その}N{は/が}述語」文における「は/が」の選択要因—抽象的意味を表す名詞「システム」と固有名詞からの考察—

「『この/その』と『は/が』選択に関する一要因—新聞記事『{この/その}N{は/が}述語』文における名詞句の考察から—」

平成23年度博士課程(後期課程)単位認定論文

結論

書き下ろし